令和6年度 集落機能維持強化支援事業

実績報告書

令和7年3月31日

公益財団法人　えひめ地域活力創造センター

目次

1 はじめに 3
2 事業実施概要 3
（1） 持続可能な地域運営実践支援プラットフォーム構築事業 3
① プラットフォームの目標 3
② プラットフォームで実施した事業 3
ア 「地域づくり実践誘導」事業 3
●先進地研修派遣 3
〇令和6年度先進地派遣実施状況（6か所） 4
〇令和6年度研修派遣実施状況（2か所） 4
イ 「地域づくり課題解決」事業 4
●地域づくり課題解決勉強会＆交流会 4
〇令和6年度地域づくり課題解決勉強会＆交流会実施状況（3回） 4
ウ 「地域づくりマッチング支援」事業 5
●地域×専門家マッチング支援（地域運営高次化コーディネート） 5
〇令和6年度地域×専門家マッチング支援実施状況（3か所10回） 5
エ 「地域巡回相談」事業 5
●地域づくりモニタリング 5
〇地域づくりモニタリング実施状況 5
●地域づくりアーカイブ 6
（2） 集落サポート人材育成事業 7
● 地域づくりマネジメント講座実施状況（3回） 7
（3） 元気な地域づくり応援団「関係人口」創出事業 8
● 元気な地域づくり応援団「関係人口」創出事業実施状況（15回延べ91名） 8
（4） 愛媛県集落支援員に係る業務 9
3 詳細報告 9
〇プラットフォーム・先進地派遣 10
〇プラットフォーム・研修派遣 45
〇プラットフォーム・地域づくり課題解決勉強会＆交流会 54
〇プラットフォーム・地域×専門家マッチング支援 60
〇集落サポート人材育成・地域づくりマネジメント講座 77
〇元気な地域づくり応援団「関係人口」創出事業 86

1 はじめに

令和6年度集落強化維持活動支援事業の「持続可能な地域運営実践支援プラットフォーム構築事業」「集落サポート人材育成事業」「元気な地域づくり応援団「関係人口」創出事業」の3事業については、委託契約、実施要領、個人情報取扱特記事項、その他関係諸法令に基づき、以下の体制により実施した。

事業実施体制

2 事業実施概要

（1） 持続可能な地域運営実践支援プラットフォーム構築事業

小規模・高齢化が深刻化し、維持・存続が危ぶまれる集落が抱える様々な課題に対応するため、地域住民の主体的な地域づくりの取組に伴走しながら、集落の持続可能性を高める実効性のある手法に関する情報やノウハウを、各種団体と連携しながら提供する事業である。

① プラットフォームの目標

本事業が謳うプラットフォームとは、「持続可能な地域運営の実践を広く県内に普及させるための仕組み」であるが、それが本事業の実施のみで構築できるものではなく、事業の実施を通して地域課題の本質を浮かび上がらせ、関係者らが一緒に考えるフィールドを作り出し、さらに、県や市町の政策・施策への参考となる仕組みづくりも意識しながら、より実効性の高いプラットフォームの構築を目指して事業を展開した。

② プラットフォームで実施した事業

プラットフォームでは、次のア～エに掲げる事業を実施し、それぞれの内容を組み合わせて取り組むことで、県内地域運営組織（過疎地域等において複数集落で形成され、地域の課題解決に向けた取組みを実践している組織。以下「RMO」という。）の活動を支援しつつ、地域運営の現状をモニタリングしながら新たな支援策の検討などを行った。

ア 「地域づくり実践誘導」事業

●先進地研修派遣

過疎地域等における地域づくりの担い手となる人材を育成するため、県内外の先進地や各種の地域づくり研修会等への派遣を行った。先進地派遣先との調整では各RMOの意向を最大限尊重しつつ、効果的な視察となるよう視点整理を行ったほか、実施後のレポート（アンケート）を通じて各地域での実践意向などを把握し、今後の支援策の基礎資料とした。

○令和6年度先進地派遣実施状況（6か所）

日付	派遣 RMO	派遣先	視察内容
R6.9.4(水) ～6(金)	ステラ新宮	島根県仁多郡 奥出雲町	観光地域づくりを通した地域資源の活用や旅行商品の制作方法
R6.9.18(水) ～20(金)	みらいの関川を考える会	島根県益田市	地域の未来の担い手づくり、地域活力の維持を目指す取組
R6.10.6(日) ～8(火)	横林自治振興協議会	山形県置賜郡 川西町・小国町	農産物のブランド化、福祉有償運送、地域計画、中間支援組織の機能など
R6.11.21(木) ～23(土)	かりとり もさくの会	北海道上川郡 東川町	ふるさと納税返礼品制作方法と運営
R7.1.27(月) ～28(火)	魚成地域振興会	広島県庄原市 ・三次市	農村 RMO の設立と活動、地域の合意形成
R7.3.14(金) ～16(日)	(一社)ゆりラボ	山梨県富士吉田市	高校生を対象とした地域での教育プログラム

○令和6年度研修派遣実施状況（2か所）

日付	派遣 RMO	研修先	参加研修等
R6.11.21(木) ～23(土)	横林自治振興協議会	鳥取県日南町	(一財)地域活性化センター主催「中山間地域のモデルを創るまちづくりの実践～森林資源を活用したSDGs×官民連携による創造的過疎のまちづくり～」
R7.2.28(金) ～3.2(日)	みらいの関川を考える会	島根県益田市	益田市のひとまち集会実行委員会主催「ますだ　ひとまち集会 2025(やってみたいが生まれるまち。やってみようを応援するひと～地域も学校もみんなでつくるまちを目指して～」

イ　「地域づくり課題解決」事業

●地域づくり課題解決勉強会＆交流会

複数の RMO が抱える課題の解決方法を検討し、組織活動の活性化を図るため、課題となるテーマに応じた勉強会＆交流会を開催した。

今年度は、令和5年度に実施された愛媛県集落実態調査の結果を踏まえ、「空き家管理」、「移動支援」、「買い物支援」をテーマとして取り上げるほか、地域づくりモニタリングによる需要把握を踏まえ、「中間支援」をテーマに追加して実施した。

○令和6年度地域づくり課題解決勉強会＆交流会実施状況（3回）

日付	テーマ	内容	参加者数
R6.11.2(土)	生活インフラ (移動・買い物)	「生活インフラは地域で運営できるのか」 場所：みそぎの里(内子町)	7人 (定員 20 名)
R6.12.21(土)	空き家対策	「地域課題第 1 位『空き家対策』さぁどうする？」 場所：IYO 夢みらい館(伊予市)	28人 (定員 30 名)
~~R7.2.7(金)~~	中間支援	「行政と住民の間にある『中間支援組織』とは」 場所：ゆりラボ(久万高原町)	大雪のため中止 (申込者数 13 名)
R7.2.14(金)	中間支援	「行政と住民の間にある『中間支援組織』とは」 場所：SAIJO BASE(西条市)	10人 (定員 10 名)

ウ　「地域づくりマッチング支援」事業

●地域×専門家マッチング支援（地域運営高次化コーディネート）

特定の地域課題を抱えるRMOと、それぞれの課題解決に対応する最適な外部専門家をコーディネートし、効果的な助言が得られるようカリキュラムやフィールドワークの調整、マーケットリサーチに資するフィールド紹介や企業との連携など、組織活動の高次化を支援した。

○令和6年度地域×専門家マッチング支援実施状況（3か所10回）

RMO 名	専門家	内容	派遣日
かりとり もさくの会	(一社)リズカーレ 代表理事　安形　真	法人化支援	第 1 回 R6.8.5(月) 第 2 回 R6.9.27(金) 第 3 回 R6.11.6(水) 第 4 回 R7.3.13(木)
横林自治振興 協議会	cuddle ﾌｰﾄﾞｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰ　長尾　愛理 (株)マルブン 取締役会長　眞鍋　明	地域産品のブランディング、マーケティング及び販路開拓支援	第 1 回 R6.7.31(水) 第2･3回 R6.9.26(木) 第 4 回 R6.12.11(水) 第 5 回 R7.1.30(木)
みらいの関川を考 える会	NPO 法人おむすび 理事長　大畑　伸幸	地域づくり人材育成支援	第 1 回 R6.10.3(木)

エ　「地域巡回相談」事業

●地域づくりモニタリング

RMO の形成･活動促進プロセスなどのモニタリングのため、行政や RMO、中間支援組織などに対し、個別訪問による巡回相談を実施し、新たな RMO の立ち上げ等に関する情報提供や、RMO の抱える課題やニーズを収集するとともに、当事業を活用した課題解決への誘導を行った。

なお、年度当初は、県による過去の集落対策事業の実施地域や、大学等の関係機関がフィールドワークなどの活動を行っている地域の RMO に対して事業を実施することとしていたが、当事業の展開や PR 活動が進むにつれ、農村 RMO モデル形成支援事業の採択を目指す地域や、中間支援を目指す個人や団体、地場産品の活用を模索する企業からの相談を受けるようになり、新たな RMO 形成や RMO 活動のきっかけとなる可能性のあるものについて巡回の範囲を広げ、地域づくり実践誘導事業や、地域×専門家マッチング支援事業への展開につなげることにもつながった。

○地域づくりモニタリング実施状況

市町名	地域	団体名	主な活動
今治市	伯方	―	伯方島の住民の動向や地域振興策に関するヒアリング
	（共通）	―	主に専門家マッチング事業におけるヒアリング
新居浜市	別子山	別子校区連合自治会	別子山企業組合や、(株)近藤酒造による別子山地域農産品活用の動向などをモニタリング
	新居大島	NPO 元気プロジェクト東予	中間支援の動向と、新居大島移住者の状況、新居浜商業高校フィールドワーク視察などをモニタリング
	（共通）	―	別子銅山など近代文化遺産を軸とした探求学習ニーズ(修学旅行生の受入れ)への取り組みに、別子山や新居大島の振興につながるポイントをモニタリング
西条市	丹原町長野	―	農村 RMO の視察や耕作放棄地の解消活動を行う地縁団体副代表へヒアリング

市町名	地域	団体名	主な活動
西条市	（共通）	（一社）リズカーレ、NPO 法人西条まちづくり応援団	中間支援組織としての活動をヒアリング
四国中央市	新宮町	ステラ新宮	※先進地派遣参照
	土居町関川	みらいの関川を考える会	※先進地派遣、専門家マッチング、研修派遣参照
	中之庄町	—	真鍋商店の真鍋久美氏など住民活動の拠点づくりを模索する方々の動向などをモニタリング
上島町	弓削	NPO 法人弓削の荘	島外民交流拠点運営や配色サービスなど生活支援事業に関するヒアリング
	弓削	NPO 法人頼れるふるさとネット	自治会研究、空き家対策、住民交流拠点運営に関するヒアリング
	岩城	（株）いわぎ物産センター	特産品開発に向けた生産農家との交渉・調整と加工センター設立経緯に関するヒアリング
伊予市	（共通）	（一社）いよのみらいかいぎ	移住施策、空き家対策に関する動向をヒアリング
東温市	（共通）	—	空き家対策に関する動向をヒアリング
久万高原町	柳谷地区・西谷	NPO 法人 Te to Te	移住施策、空き家対策、移動支援対策に関する中間支援の動向をヒアリング
	美川地区・仕七川	仕七川校区の未来を築く絆の会	移住施策、空き家対策、買い物支援対策に関する動向をヒアリング
	（共通）	（一社）ゆりラボ	住民活動拠点や地域と高校生をつなぐ活動をモニタリング
宇和島市	（共通）	てんやわんや市協同組合	てんやわんや市協同組合の活動視察・ヒアリング
八幡浜市	日土	NPO 法人にこにこ日土	移動支援などの活動をヒアリング
	（共通）	NPO 法人八幡浜元気プロジェクト	中間支援組織としての活動をヒアリング
大洲市	豊茂	豊茂自治会	ミニスーパーを運営する豊茂自治会の活動をヒアリング
西予市	明浜町狩江	かりとりもさくの会	※先進地派遣、専門家マッチング参照
	野村町横林	横林自治振興協議会	※先進地派遣、専門家マッチング、研修派遣参照
	城川町魚成	魚成地域振興会	※先進地派遣参照
内子町	御祓	みそぎの里運営協議会	みそぎの里運営協議会による施設運営と活用状況をヒアリング
愛南町	緑	まるごと緑	まるごと緑の活動をヒアリング

※この他、各市町への事業説明、施策に関するヒアリングを実施（19市町）
※複数回実施している場合あり

●地域づくりアーカイブ

地域づくりの機運醸成を図るため、この事業の活動内容や活動に得られた成果を整理し、（公財）えひめ地域活力創造センター公式ウェブサイトに掲載しアーカイブ化した。

なお、アーカイブ資料は、次年度以降も引き続きウェブサイトで周知するほか、市町、RMO、集落支援員、地域おこし協力隊や、本事業にかかわった企業・団体等へ冊子として配布し、RMO実践支援についての理解促進と、事例の横展開を図りたい。

・ウェブサイトによるアーカイブ

・（公財）えひめ地域活力創造センター公式ウェブサイト URL
https://www.ecpr.or.jp/

（2） 集落サポート人材育成事業

人口減少や少子高齢化の著しい県内集落での集落機能の維持・強化を図るためには、地域の実情を把握し、それぞれの状況に見合った効果的な集落対策を推進できる人材の育成が不可欠であることから、市町職員や集落支援員を対象とした今後の集落対策の方向性等を学ぶための実践的な研修を実施し、今後の集落機能を維持する仕組みづくりをサポートするためのマネジメント能力の向上及び地域づくり関係者のネットワーク構築を図った。

● 地域づくりマネジメント講座実施状況（3回）

回	日付	場所	内容	参加者数
1	R6.11.4（月）	愛媛大学 城北キャンパス	【講演】 「集落実態調査から見えてきた愛媛県における今後の地域づくりの方向性」 愛媛大学社会共創学部　准教授　笠松浩樹 「地域づくりってなに？どうサポートしていけばいいの？」 徳島大学大学院　教授　田口太郎 【意見交換】 ファシリテーター　徳島大学大学院　教授　田口太郎 アシスタント　愛媛大学社会共創学部生	11 名
2	R6.11.30（土）	西予市 渡江集会所	【現地フィールドワーク①＆事例発表】 「渡江地区における地域づくり活動の実践」 かりとりもさくの会　西村吉仁・二宮祥子 愛媛大学未完商店 【先進事例】 「岡山県久米南町「食」のサブスクリプションサービス」 中国学園大学　国際教養学部　教授　佐々木公之 岡山県久米南町　産業振興課　主幹　中村英之 【意見交換】 アシスタント　愛媛大学未完商店	6 名

回	日付	場所	内容	参加者数
3	R6.12.1(日)	西予市 渡江集会所	【現地フィールドワーク②】 かりとりもさくの会、愛媛大学未完商店 【全体振り返り】 ファシリテーター　愛媛大学社会共創学部　准教授　笠松浩樹	6名

(3) 元気な地域づくり応援団「関係人口」創出事業

地域活動の担い手が不足している集落を支えるため、センターに当該事業を実施するための事務局を設置し、「元気な集落づくり応援団「関係人口」創出事業実施要領」に基づき、祭りや清掃等などの活動の支援を希望する集落と、ボランティア活動で応援したい企業・大学等(元気な集落づくり応援団)とのマッチングを行い、関係人口づくりを支援した。

● 元気な地域づくり応援団「関係人口」創出事業実施状況(15回延べ91名)

	日付	場所	応援内容	応援団体名	応援者数
1	R6.6.1(土)	松山市久谷地区	第3回松山くぼの町ホタル祭り運営	伊予銀行 愛媛銀行	6名
2	R6.7.14(日)	久万高原町中津地区	旧中津小学校の清掃	伊予銀行 愛媛銀行 聖カタリナ大学 ネコの手	12名
3	R6.8.4(日)	愛南町中浦地区	夏祭り会場の設営、運営	愛媛銀行 小関電工 ネコの手	8名
4	R6.8.10(土)	四国中央市新宮町	盆踊り準備	ネコの手	1名
5	R6.8.12(月)	四国中央市新宮町	盆踊り片付け	ネコの手	2名
6	R6.8.14(水)	内子町寺村集落	山の神火祭り準備	ネコの手 松山大学 聖カタリナ大学	4名
7	R6.8.15(木)	内子町寺村集落	山の神火祭り駐車場整理	ネコの手 松山大学 聖カタリナ大学	3名
8	R6.8.16(金)	内子町寺村集落	山の神火祭り片付け	ネコの手 松山大学 聖カタリナ大学	4名
9	R6.9.15(日)	松山市久谷地区	第4回いよ窪野収穫祭農産品販売補助	ネコの手 聖カタリナ大学	3名
10	R6.9.23(月)	松山市久谷地区	第4回いよ窪野収穫祭農産品販売補助	ネコの手 聖カタリナ大学	3名
11	R6.10.6(日)	伊予市本谷集落	中間道の排水溝等の清掃	ネコの手 愛媛銀行	4名
12	R6.11.23(土)	久万高原町中津地区	「結い音楽祭」の運営	伊予銀行 愛媛銀行 三浦工業 ネコの手	15名
13	R6.12.8(日)	東温市河之内区	しめ縄龍の運搬、神社奉納	愛媛銀行 伊予銀行 三浦工業 ネコの手	11名

	日付	場所	応援内容	応援団体名	応援者数
14	R7.3.30(日)	伊予市本谷集落	桜の植樹	愛媛銀行 伊予銀行 ネコの手 三浦工業 聖カタリナ大学	8名
15	R7.3.30(日)	久万高原町中津地区	「桜まつり」の運営	愛媛銀行 伊予銀行	7名

（4） 愛媛県集落支援員に係る業務

この事業を円滑に遂行するため、愛媛県が指定（委嘱）する愛媛県集落支援員と密に連携を図りながら事業を遂行した。

●定例ミーティング・個別相談等（19回）

定例ミーティング：8回（5/23、6/27、8/1、9/12、10/24、12/5、1/9、3/13）

個別相談等：11 回（4/19、5/13、6/3、7/10、7/29、8/13、8/19、10/4、11/7、11/26、2/25）

●地域づくり課題解決勉強会＆交流会での活動（3回）

・勉強会＆交流会（11/2） テーマ：生活インフラ ファシリテーターとして

・勉強会＆交流会（12/21） テーマ：空き家対策 ファシリテーターとして

・勉強会＆交流会（2/14） テーマ：中間支援 パネリストとして

3 詳細報告

次ページ以降で各事業の詳細を報告する。

○プラットフォーム・先進地派遣

日付	派遣 RMO	派遣先	視察内容
R6.9.4(水) ～6(金)	ステラ新宮	島根県仁多郡 奥出雲町	観光地域づくりを通した地域資源の活用や旅行商品の制作方法

1 概要
(1日目)
8:30 tiliki 出発
10:00 四国中央市出発
15:00 島根県奥出雲町到着
・(一社)奥出雲町観光協会
観光コーディネーター 日野由加里氏より、奥出雲町の歴史と観光施策に関する説明を受ける。
・(株)タビカラのサミーラ グナワラデナ氏より、明日のカリキュラム概要の説明を受ける。

(2日目)
10:00～タビカラ事務所にて座学
・奥出雲町観光協会の法人化に至るまでの経緯
・インバウンド向け観光の基礎と奥出雲町の地域資源を生かした観光商品開発に関すること(地域のキーマンとの信頼関係構築や地場産品を生産する経営者たちとの折衝とインバウンド向け観光商品開発の協働、収益等メリットの享受)等の実例紹介
・特にインバウンド客向けに必要な、日常の営みにある日本の伝統に触れるための「ストーリー」と「ストーリーテラー」の重要性に関する説明
12:00～現地視察(ストーリーの形成と模擬ストーリーテラー体験)

●山県そば
奥出雲がそば処となる歴史に深くかかわる「鉄穴流し」と、事あるごとに蕎麦を食べる生活風習について学ぶ
●奥出雲の棚田
奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観を一望できる展望台から、棚田の美しさに触れるだけでなく、砂鉄採取により切り崩された山々、荒涼となった平地の土壌改良のために栽培された蕎麦、鉄穴流しで用いた水路の水田用水路への転用、様々な開発を経ても祠や墓地など神聖な場所を今に残す鉄穴残丘、たたら製鉄で用いる木炭生産のため30年周期で輪伐を行うための植林の様子など、現在の SDG‘sにつながる日本人の知恵をストーリーとして展開し、景観価値を高めることを学ぶ
●奥出雲とうふ・いしだ
3代に渡る老舗の豆腐製造所が新たに直売所を展開し、豆腐づくりや湯葉づくりの体験メニューを考案。同じ材料、分量、工程でも異なる豆腐になる、豆腐づくりの難しさや奥深さを体験することで、世界文化遺産である「和食;日本人の伝統的な食文化」に触れるための手法について学ぶ
●道の駅「奥出雲おろちループ」
指定管理者である「有限会社 絲原」(たたら製鉄の鉄師として財を成した絲原家が母体)の従業員で、同駅駅長の藤原紘子氏より、道の駅運営と地元地域振興との接点づくりにおける課題について、道の駅「霧の森」の課題も交えながら意見交換
17:00 視察終了
18:00 交流会

（3日目）
7:25　JR 木次線乗車
・沿線に見える農村風景が、1,400 年以上続けられてきた「たたら製鉄」によって生み出されたという、ストーリー無くしては触れることができない魅力を、地元高校通学生の乗る列車の車窓から再確認
・JR 出雲三成駅から三井野原駅まで乗車し、途中の三段スイッチバックを体験
10:00　奥出雲町観光名所視察
・奥出雲たたらと刀剣館、鬼の舌震（景勝地）を見学し、奥出雲鬼蕎麦（十割そば）で昼食
16:50　四国中央市到着
19:30　tiliki 到着（レンタカー返却）

新宮地域における茶の栽培や製茶などを含めた、観光の「原石」となるものを探し、歴史に裏打ちされたストーリーや体験メニューなどを地域の人々と共に開発し展開することで、外国人を含むあらゆる人々を魅了し、訪れる人々の知的好奇心を刺激しながら、地域が「儲かる」仕組み＝新たな産業を生み出すきっかけになればとの参加者の思いに、先進地派遣事業として、どれだけ合致させることができるか腐心した。
今回は特に年齢の若い方が参加するということもあり、目的地までの道中において、学びのポイントや見どころ、感じどころなどについて話し合いながら、一定の意識共有を図り、各所での指導に臨むことができたのは良かった。
研修会や勉強会と異なり、いわばオンデマンドで学びの機会を与えられる先進地派遣は、贅沢な事業ではあるが、真剣に地域課題に立ち向かおうとする RMO にとって、これほど成果が得られる事業もないのではと感じた。

2　参加者
四国中央市新宮町ステラ新宮　　大廣　将也（地域おこし協力隊）
〃　　曽我部　知洋（四国中央市観光交通課主事）
（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりGチーフアドバイザー　田村　政幸

実施の様子

動画（YouTube）

https://youtu.be/1ZdURfTIEgQ

参加者アンケート

RMO 名	ステラ新宮
参加者（回答者）氏名	大廣　将也

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

・観光を通して生まれるもの（地域連携、外貨を稼ぐ方法、地域独自の観光のあり方等）、守れるもの（地域の伝統、農業、歴史、公共交通等）があるということ。
・自分自身が考える観光面でのやりたいことを進めると、結果的に地域のまちづくりに繋がることが期待できるということ。
・先進地と思っている場所でも、自分たちと同じような悩みや、その時々で変化していく課題がある。それに向き合って、前に向かっているようで進んでいない。という現状があることを学んだ。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

・観光やまちづくりに対する考えや想いを団体や周辺の関係者から聞き取り、確認・共有すること。
・「たたら製鉄と循環型農業」のような、新宮らしい地域独自の価値を伝えるストーリー（伝えたいこと）を明確にしておくこと　例えば、「新宮で見る日本一の紙のまち（紙の原料ミツマタ、製紙産業を支える新宮ダム、伝統を引き継ぐ多羅富來和紙、かつての冬の作業ミツマタの皮剥ぎ）」
・新宮茶での体験メニュー拡充、ブラッシュアップ
・地域として進めたい観光促進を理解し、共に歩んでいくための行政へのアプローチ

Q3　先進地と比べて、自らの地域（での活動）の方が優れているものを教えてください。

（新宮という地域と奥出雲町を比べて）
・新宮地域には、訪問の目的地となる「霧の森」があり、「霧の森大福」が地域の特産品として不動の人気を確立しており、集客力もある。
・地域内への公共交通は不便だが、IC から道の駅までの距離は近い。
（ステラ新宮と奥出雲町で出会った方々を比べて）
・地域が頑張っていれば行政から多少の支援が得られるのではないかと期待して活動を行っている。イベントに参加、協力してくれる市職員がおり、今回の視察プログラム応募も、すぐに提案してくれており、市役所との関係性は良好
・先進地の方々と同様に、当該地域に来てくれる人に楽しんでもらうことを第一に考えて動ける人がたくさんいる。

Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。

　単なる先進地の成功事例や自慢話を聞くような研修ではなく、自分自身や地域の今後を本気で考える機会となった。期待以上の話が聞けたがその背景には、自分に必要だと思うことを、視察中に受け入れ先やtiliki担当者の田村さんが考えてくださり、行程を柔軟に変えて対応してくださったことにあり、感謝している。
　「ステラ新宮」としては、まだまだ活動が始まったばかりの団体だが、メンバーが足並みを揃えて、新宮の強みを活かした活動にできるよう、調整していきたい。また、今回の視察先で学んだことは、愛媛県内のどの地域にとっても学びに繋がると感じたので、視察先の方々を愛媛県に招いた勉強会等の開催を、強く希望します。観光について多様な考え方、取り組みの方法があり、自分自身の意志を貫いて、これからも新宮での活動に励みたい。
　今回は本当に、ありがとうございました！

RMO 名	ステラ新宮
参加者（回答者）氏名	曽我部　知洋

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

奥出雲町の観光振興に尽力されている観光協会の方やサミーラさんにお話しさせてもらう中で、自分のやりたいことをはっきりと言語化して他者に説明できるというところが、非常に熟慮されていると感じました。

観光や地域振興といってもプロセスや明確なビジョンが説明できない人も多いと思います。サミーラさんからは、今までの苦労話などを交えてお話いただきましたが、私も地域の観光イベントに携わる中で中々地域の方々との関係性を築くことができず悩むこともあり、自分の思いや考えをしっかりと言語化する力や、わかりやすく伝える言葉選びなど、足りないものが多々あると痛感しました。また、四国中央市としては、まず地域の財産や魅力を発掘する作業が必要と思いました。
Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。
奥出雲町は四国中央市と同じ時代に合併し誕生した町であるにもかかわらず、観光分野では非常に優れている町だと感じます。体験することを販売し収益化できていることが四国中央市でも真似をすることができると思います。四国中央市でも新宮の茶摘みや手すき和紙体験、土居の里芋掘りなど PR できるものがあります。インバウンドという視点から見ても田舎でしか体験できないメニューを販売し体験を売ることは取り組むことができる事業だと考えられます。地域をあげて取り組むためのシステムの構築というところが大変で、地域の従事者への説明など、一朝一夕でできるものではありませんが、奥出雲町というモデルがあり、私自身、話を聞けた点も含めて実現しやすくなったと思います。
Q3　先進地と比べて、自らの地域での活動の方が優れているものを教えてください。
奥出雲町と比べて四国中央市のほうが優れている点としては、新宮地域にある特産品の知名度ではないかと考えます。新宮には「道の駅　霧の森」で販売されている「霧の森大福」が発売当初から25年を経た今なお名物商品として売れ続けています。霧の森大福のほかにも関連商品が続々と開発・販売されており、霧の森は「お茶と甘味処」としても有名ではないかと推測されます。
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
今回、先進地派遣事業として奥出雲視察に同行させていただき、自分のなかで見識の広がりを感じることができました。都会にはなく田舎でしか体験できないことを PR することの難しさや、地域をあげて取り組むためのシステムの構築など、内と外、両方に課題があり、それを解決しなければ体験を売るといった事業は成り立ちません。サミーラさんも様々な壁に当たりながらも、やりたいことをやるために常に考えながら行動に移してきた結果がいまの奥出雲町の観光事業の成功に繋がっているのだと感じました。奥出雲町はそもそも地域の財産がたくさんあるようにも考えられますが、それをうまく運用できているのは、観光協会含めた地域振興に携わっている方の尽力であると考えられます。四国中央市も奥出雲町のように地域の魅力を発信できるように考えてみたいと思います。

○プラットフォーム・先進地派遣

日付	派遣 RMO	派遣先	視察内容
R6.9.18(水) ～20(金)	みらいの関川を考える会	島根県益田市	地域の未来の担い手づくり、地域活力の維持を目指す取組

1 概要
(1日目)
8:30 tiliki 出発
10:00 四国中央市関川公民館到着
16:00 島根県益田市到着
(2 日目)
9:30NPO 法人おむすびにて、益田市「ひとづくり協働構想」の成り立ちと公民館等での実践に関する概略説明
13:30 市内豊川地区における事例研修・視察
18:00 交流会
(3 日目)
9:30 西益田地区における事例研修・視察
11:40 益田市出発
16:50 四国中央市関川公民館到着
19:30 tiliki 着

日時:9 月 19 日(木)9 時 30 分～
場所:NPO 法人おむすび事務所
理事長の大畑伸幸氏より、益田市ひとづくり協働構想やその実践に係る概要についてお話をいただいた。
(少子化が招く様々な課題とその転換)
・「少子化や施設老朽化に伴う幼保小中学校や公民館の統廃合・建替え問題の存在」「アンケートで明らかになった、益田には何もないという子どもたちの意識」「学校再編に対し地域住民たちの郷愁にも似たあきらめムード」を打破するための政策立案
・これらを危機ではなく希望に転換していくために、「児童数議論ではなく小規模複式学級の価値再考」「地域が子どもたちとともにまちづくりを進めるための取組み」「親世代と地域との分断解消」の活動に注力
・進学や就職で子どもが益田を離れ、都会に移ることはやむを得ないが、子どもがふるさとに帰ってこられる環境(地域)をつくることが大事
・益田にも仕事はあるが、「何もない」「過疎」というステレオタイプの意識が「ふるさと回帰が困難である」というある種の幻想となっている。
・益田で生きるリアリティを子どものうちから経験させ、益田にいつでも戻ってこられるためにすべきこと(＝ひとづくり)を活動の中心に位置づけ、それを実践する地域のキーマンたちを結ぶことをNPO法人おむすびの使命としている。
(行政課題と地域課題の解決に向けたマッチング)
・学校等の統廃合が地域にとってマイナスではなく、プラスにするためには、子どもの教育を学校まかせにせず、地域で取り組む仕組みを構築することが大事であった。
・ハード面では「学校内に公民館を入れ、公共施設を減らし」、ソフト面では「地域は学校を助けるために活動するのではなく、学校を巻き込んで地域活動を行うための仕組みづくりをつくることで、行

政運営上も地域運営上もメリットのある取組みにする必要がある。
・行政を巻き込むためには、住民感情で終始するのではなく、理路整然と進めることが大事で、益田では「ひとづくりの方針（計画）」を、学校統廃合と公民館との合築とセットで議論することで進めることができた。
・公民館（教育部局）をコミュニティセンター（市長部局）化する傾向があるが、益田では公民館を維持した。地域コミュニティづくりの機能を果たすためには公民館のまま進める方がよいとの判断。公民館職員である会計年度任用職員は公民館活動のために採用されるが、市長部局の会計年度任用職員となると、市の窓口となり、あらる市業務を行わせることが実質可能となってしまい、「単なる市の窓口」と化す可能性があるため、敢えて公民館としている。
（益田市行政職員としての振り返り）
・平成 11 年から 5 年間、社会教育主事として益田市教委で行った地域活動が 10 年後も残っていたことが、「益田市ひとづくり構想」への着想のきっかけとなった。（振り返れば、当時の社会教育主事としての活動が、今につながる種まきになっていた。）
・教員でありながら、学校現場だけでなく益田市行政にも立場（役職）と人脈を得て、財政当局との議論や折衝、人口減少・少子化対策などのセクションと協働しながら業務に従事できたことや、活動に理解を示し適時に応援してくれる市議会議員の存在など、「ひとづくり協働構想」の策定において、良きタイミングや幸運に恵まれたと思う。
（みらいの関川を考える会の活動への応用）
・みらいの関川を考える会として課題を集約する必要性を強く感じた。以前、子どもが減少し地域が疲弊することに危機感を感じ、課題ごとに部会を分けて、最初に移動スーパーを誘致した。（高橋）
・子ども（小中学生）との対話テクニックは、子どもの話を「頷きながら（真剣に）」「はー・へー・ほーを使いながら（共感を表しながら）」「それで（深掘り質問）」
・アイデアをまず実現する方法について考えること。
・最初から地域課題やまちづくりについて、「危機を煽らない」「課題から入らない」が大事

日時：9 月 19 日（木）13 時 30 分～
場所：益田市立豊川小学校
「とよかわの未来をつくる会」顧問の河野利文　氏（益田市議会議員）より、地域自治組織とコミュニティスクール（豊川小学校）の一体的推進に関する説明と実例紹介をいただいた。

日時：9 月 20 日（金）9 時 30 分～
場所：益田市豊田・西益田公民館
益田市豊田・西益田公民館（館長　岡本　康）の石川有里氏、西益田まちづくりの会事務局の大畑咲絵氏より、西益田つろうて子育て協議会の活動紹介をいただいた。
（豊田・西益田公民館の活動）
・「つろうて子育て」（つろうて：一緒に、連れ立って）
・コミュニティスクールとの事業の重複（学校・公民館）があるが、社会教育コーディネータが学校と公民館活動のコーディネートを行っているが、活動が重なっていても問題ない。（充実度を高めるコーディネートを行う。）
・小学生の活動に中学生が参加できる。（高校受験倍率が低く、受験難度が低いのもあるが）
・中学生が活動に参加しやすいタイミングで活動を予定（公民館主事）
・中学校の給食の時間に参加を宣伝したり、スタッフを募ったりしている。
・「With の会」輝く地域の大人のコミュニティと協働する。（大人になった子どもも巻き込む）
・高津川での「鮎体験交流」や「川流れ」を通じ、子どもの川遊びを軸に子どもの育成を図っている。（豊田西益田の方々と高津川とのつながり）
・「こどもを育てる＝地域を育てる」が益田の基本方針
（夏季休を利用して公民館に来ていた大学生の話）
・奉仕よりも「貢献感」を感じる
・西益田灯火祭の話題。中学校生徒会長が公民館に相談し（裏話あり）灯火祭を開催にこぎつけた話

・In・About・For・With のサイクルは、子どもが地域に主体的にかかわり、やがて次の子どもと地域とをつなぐ大人になるサイクル。公民館をはじめ地域の大人たちが、自分たちを「子ども」ではなく、「地域の仲間」として扱ってくれたので、やりがいがあって、地域活動が生活の一部というか、あたりまえというか、特別な感じもなく普通にあって、それを楽しんでいる。（大塚薫さん、斎藤一心さん）
・この 2 人の大学生が、今回の訪問のために公民館に来ていたのではなく、たまたま高津川の清掃ボランティアに来て公民館に顔を出していたタイミングで参加してくれ、地域への思いを自分の言葉で語ってくれたことが驚き。
（みらいの関川を考える会の活動への応用）
・子どもの発意をつぶさず、対話テクニックをつかって拾い上げ、実現に向けて公民館と一体となって動く。実現につなげる志向に意識改革をしなければならない。（寺尾）

2　参加者
四国中央市土居町　みらいの関川を考える会　寺尾 晴志
〃　〃　髙橋 英吉
（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりGチーフアドバイザー　田村 政幸

実施の様子

参加者アンケート

RMO 名	みらいの関川を考える会
参加者（回答者）氏名	寺尾　晴志

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

児童が多い少ない、学校の大小でなく町へ残りたい、帰りたいと思う子を育て地区の担い手づくりを。学校を拠点に地域の人が世代を繋ぐために、同じ敷地内に小学校・保育園・公民館・児童館・消防詰め所・診療所等を建設。
小、中、高校生をイベント企画から参加、人づくり、担い手づくりを。
何故若者が帰って来ないか？（小さいときから楽しい体験がないから田舎と都会の比較ができない。） 小規模校はいけないのか？（適正規模に騙されている。保護者に不安と分断を与えている。教育環境が大切。）

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

イベントに児童生徒が企画段階から参加させる。
古里の素晴らしさ、良さを教える。
地域を支える組織づくりが大切。（各団体が地域課題を解決するための事業に視点を。何の為にしているか？そのことが地域課題を解決に繋がっているか？事業に参加して楽しかったか？児童や生徒を巻き込めないか？）

Q3　先進地と比べて、自らの地域（での活動）の方が優れているものを教えてください。

一絃琴の保存継承が行われている。
小学校に一弦琴クラブや特産の赤石五葉松クラブがある。
秋祭りが盛大に行われている。

Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。

地域課題の追求だけでは解消が難しく、地域づくりと担い手づくりが必要。
地域の担い手を育てるための組織づくりが必要。
活動に参加して楽しいと思えるような企画運営が大切。
関川に住みたい、残りたい、帰りたいと思える様な児童生徒を育てるために、各事業の見直しが必要。

RMO 名	みらいの関川を考える会
参加者（回答者）氏名	髙橋　英吉

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

関川とあまり変わりない田舎町で子供、先生、議員、行政職員、地域住民が明るく胸張って地域の取り組みを話せる姿に感動した。話をお伺いする中で、いかにすれば子どもが留まるか、故郷に帰ってくるかを基本理念に取り組むことが、地域が活性化し人口減少対策にも一定の歯止めになることを学び、私たちの基本的な考え方を変えないといけないと思った。
①子供や人口の減少は受け入れること。
②長期的な視点から何が大切であるかを見極めること。
③地域活性化に向けた子どもの役割を考えること。
④地域全体が同じ方向性を持つこと。
⑤行政の考え方も変えていく努力が必要なこと。
⑥目的達成に向けた組織体制の在り方。
これらを本会で深く審議する必要があると感じた。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

全てのイベントに、子ども（事業によって小中高校生をすみ分けする）を企画段階から参加してもらう。西益

田地区の住民は、地元を流れる河川に愛着があり、そこを会場にしたイベントを行っており、関川でもできるものがあるのではと思った。 例 ①子供にも参画してもらっての「きも試し大会」。 ②関川でウエットスーツ川下り。 ③堤防で鮎の塩焼大会。 これらを実施しながら、徐々に子どもたちが主体となっていくように仕向ける。
Q3　先進地と比べて、自らの地域（での活動）の方が優れているものを教えてください。
なし
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
住民が日々笑顔で生活できることは何かをずっと考えていたが、見つけたように思う。それは、社会に希望を持たせる子どもが中心にいること。とかく、大人が大人社会を動かしていると思っているようだが、実際には大人の精神的支えは子どもであることに気付かなければならない。関川地区は子どもの数が減少しているが、それを受け入れた中で子どもが明るく過ごしていることが地域に元気をもたらしてくれる。子どもが地域に残ってくれる、或いは戻ってきてくれる、そんな気持ちを抱かせる地域づくりが大切であることをつくづく感じた。そのためには長期的視野に立って、取り組みを継続、積み上げていきながら人間関係を醸成していく環境づくりが必要と思う。

○プラットフォーム・先進地派遣

日付	派遣 RMO	派遣先	視察内容
R6.10.6(日) ～8(火)	横林自治振興協議会	山形県置賜郡 川西町・小国町	農産物のブランド化、福祉有償運送、地域計画、中間支援組織の機能など

1 概要

令和 6 年 10 月 7 日(月)

○上中原の草木塔見学(8:30～)

髙橋氏より草木塔の由来等の説明していただき、置賜地域文化について学ぶ。

○東沢地区協働のまちづくり推進会議視察(8:50～11:00)

(説明) 事務局長 佐々木 英之 氏、センター長 阪野 正則 氏

山形県川西町及び東沢地区の紹介、東沢地区協働まちづくり協議会の設立経緯、運営、取り組み、事業内容等について説明していただく。(別紙資料参照)

【質疑応答】

Q1:現在、民間受託をしていると説明にあったが、会議設立当初からか。

A1:初めは町が運営していたが、公民館の名のみだけで、住民が管理していた。その後委託方式を経て民間運営に切り替わった。

Q2:第4期東沢地区計画 P14 にある新規施策は今後実施予定か。

A2:実施予定。除雪事業は町の事業であり、雪は町の資源になるため。

Q3:青年育成と支援は?

A3:青年団の復活を目指す。現在は、消防団として活動しており、青年団自体はない。消防団から引き抜きをし、青年団を復活させ、事業のスタッフとして活動してほしい。

Q4:NPO 法人ハートサービス川西の有償運送は、福祉有償運送か。障がい者手帳等は必要か。また、現在のドライバーは何名か。

A4:以前は過疎地有償運送として運行していたが、メリットがあまりないため終了し、福祉有償運送のみ実施、移動に介助の必要な方が会員登録をして利用可能。現在のドライバーは、十数名だが高齢化で少しずつ減っている。サービス提供エリアは川西町全域と米沢市も一部対象となっている。

Q5:中心的な存在はいるのか。

A5:町づくり推進会議の理事長は地区の方が、事務は NPO 法人で募集し、地区の人を雇っている。

Q6:設立時、構成員について教えてほしい。また、法人化は行政も介入したか。

A6:構成員は8名。設立時は、民生委員、ボランティアが運営していた。法人化は町議員が中心となって行った。

Q7:農事組合法人夢里について教えてほしい。

A7:構成員は7名。中心人物は、元農業組織の会長であり、夢工房の代表、町議会議員も勤めていた。バックアップやアドバイス等を貰っている。オブサーバー的に地域おこし協力隊を入れており、川西町の地域おこし協力隊が定着し勤めている(外部の意見も必要)。現在は、地域振興分野での協力隊の募集はしていない。

Q8:耕作放棄地問題はあるのか。

A8:ある。毎年見回りをし、耕作放棄地を出さないよう取り組みをしているが、どうしても放棄地が出てしまう。

Q9:東沢米翔について教えてほしい。

A9:エコファーマーの認定を受けた土地に、たい肥投入による土作りや減化学肥料と減農薬によ

る米を栽培し、「おむすび権兵衛」等に販売するために設立。東沢米翔は株式会社、NPO法人の中に法人は作れないので、株式会社として設立。構成員は同じで、社長だけ違う。

＜おむすび権兵衛との関係＞
元々、川西町（東沢地区）と東京都町田市が山村留学で繋がっており、毎年夏休み期間中に短期留学を行っていた。その中におむすび権兵衛と繋がりを持つ保護者がおり、卸先となった。最大6店舗の店頭で宣伝してくれた。
Q10：山村留学について教えてほしい。
A10：山村留学は、やんちゃ留学として実施していた。夏休み期間中に行う短期留学と1年間の長期留学1年間があり、短期留学生の中から長期留学生（転校手続きあり）が決まっていた。短期留学生の里親が長期留学生の受け入れも行っており、地域全体で留学生を巻き込んだイベント等も実施し、保護者との交流もあった。閉校と共に終了したが、卒業した留学生との繋がりは続いている。
Q11：地区計画の評価は、外部評価か。
A11：内部評価。運営委員に評価してもらっている。課題等の意見を出してもらい、各組織で評価している。
Q12：若い女性の活躍はあるのか。
A12：今はないが、女性ならではの感性が必要と感じている。
Q13：佐々木氏の事務内容を教えてほしい。
A13：佐々木氏は、協働まちづくり推進会議で雇われており、役場の地域運営に関わる事務的なことを行っている。東沢地区としての窓口は当センターであり、地域づくりの交付金や助成金等の手続き等を行っている。住民票等の発行はない。町役場にも町づくり課はある。

○おぐにマルチワーク事業協同組合視察（13：15～15：00）
説明：事務局長　吉田　悠斗　氏
事前に周藤氏からいただいていた質問への回答を含めた組合の運営等について説明をしていただく。
【創立の経緯】
吉田氏は、6年前に農業・畜産関係の地域おこし協力隊として小国町に移住したが、冬の仕事がないことが悩みだった。
卒業前に町役場の職員から「特定地域づくり事業協同組合制度」の話しを聞き、組合を創立することを決める。その後、酒蔵を改装した「KAMOSQ」をワーキングスペースとして利用している。
東北では2例目、山形県では初の事業であった。
元々、農協青年部（20人）が飲み会で従業員のシェア制度ができないか話題に上がったことが発端。冬はマルチワークをしている農家が多く、土木業者や郵便局と連携することで、担い手、移住者が増えるのではないかと話しており、その話を聞いた町役場の職員が「特定地域づくり事業協同組合制度」ができることを教えてくれた。

【運営等について】
・現在、おぐにマルチワークでは7名を雇用しており、20歳～30歳代が多い。都市部で育った若者が田舎に来ることが多く、キャリア探求として若者が応募してくる。
・キャリア探求の場として提供しており、3年後を目安にゴールを設定している。派遣先への就職や新規就農、土地に合わないことがわかるため、あえてゴールを設定している。
・運営は、人材派遣会社とほとんど変わらない。しかし、当組合は細かな生活サポートを行っている。例えば、移住者は車を持ってない人が多く、雪道にも慣れていないため、雪道の運転方法を助手席に乗り、アドバイス等のサポートや、雪国の暮らしの生活のサポート、地域との摩擦が起きないようにフォローしている。
・マルチワーカーは、現在週休4～3日／月を目安に働いており、ライターやカフェの経営を目指している。
・マルチワーカーは、正社員として雇い、時給で働いている。
・給与は月15万～20万円程度あり、社会保険に加入してもらっている。
・組合事業者は、山菜、キノコ、米等の農家、宿泊業等も登録し、繁忙期を組み合わせることで、マルチワーカー、移住者を確保する。

・現在は、圧倒的にマルチワーカーが足りていないため、年3～4人雇用し、10 人を目標に増やしていきたい。
・マルチワーカーを雇用するには基準資産額があり、1人につき 70 万円必要である（※法律で決められており、借入の資金は不可）。
・出資した組合員にしか派遣できないので、組合員を増やすことも重要。
・リクルート機能として、マルチワーカーを利用している人もおり、事業者もヘッドハンティング目的で利用しているところもある。
・今後、職業紹介も行いたいため、資格を取得する予定。
・初めは、業者の紹介も役場の職員が繋いでくれたが、組合員 14 事業社中5、6事業者しか派遣できなかった。
・将来的には、商工会員 400 事業者全てが当組合に出資していただけるようにしたい。

【その他】
・創立して3年目でようやく軌道に乗り出した。
・組合が軌道に乗っているのは、町役場が緑のふるさと協力隊（過疎化・少子化に悩みながらも地域を元気にしたい地方自治体と、農山村での活動や暮らしに関心をもつ若者をつなげるプログラム）や大学生等、長年関係人口づくりを実施し、地盤ができていたことが大きいと感じている。
・ほかの自治体がうまくいっていないのは、決め細やかに事業者とマルチワーカーを繋いでいないことが原因ではないかと感じる。（繋いでいくことが一番大変）
・また、地元の理解が必要。いかに地元の人が、マルチワーカーや若者を労働力ではなく育成していくかという考えになること重要。
・マルチワーカーには、夏祭りやお田植祭等、人手不足に困っている地域行事やイベント積極的に参加するように伝える。そこから口コミで派遣が決まることもある。
・小国町は工場が多いため、危機感を持っている人が少ない。
・都市部の人の移住は限界にきており、地元出身の若者がUターンして戻ってくるような仕組み作りをする必要がある（高橋氏）。
・地元の人をいかに外に出さないかが重要だと感じる。
・働いた年数が能力より重要視されることが若い人が受け入れにくいのではと感じている。また、マニュアル作成等、丁寧な教育をしていないところが多いと感じている（職人気質が多い）。しかし、当組合の事業により働き方改革をし始めているところもある。以前は、終身雇用が当たり前だったが、いかに若い人を雇用するかにシフトしており、1年目でもベテランと一緒に作業できるようにマニュアル作りを依頼もされた（映像、文書で作成）。
・事業承継の問題もある。
・現在、全国版のマルチワークの仕組みを考えている（実際、要望を国に提出している）。
・将来、県境を跨いだ派遣ができるようになれば、派遣先に選ばれる町にしたい。

【質疑応答】
Q1：創立前に説明会等は行ったのか。
A1：小国町役場と協力し、年に3回程度 40 人程度集めて説明会を行った。
Q2：マルチワーカーや事業者がどうすれば満足してもらえるのか。
A2：時給 1,050 円で派遣しており、15％のマージンを貰っている。将来的に派遣先の事業者にどのような影響があるかは確認中。中には、将来、会社に就職してくれるかもと投資的な意味も込めて 1,050 円支払っているところもある。
Q3：事業者（組合員）が増えているということは、事業者的に満足しているのか。
A3：していると思う。小さな町なので、満足していなければ出資していないと思う。応援で出資してくれる人もいる。
Q4：職員は協力隊等ではなく、マルチワーカーとしてきた？
A4：マルチワーカーとして来た。10 名中2名はほかの協力隊として出て行った。
Q5：本人の希望次第で週休2日にできるのか。
A5：できる。最初の1年目は、週5で働いてほしいと要望することが多かったが、現在は選択肢が増えて、職員の要望にも応えることもできだした。
Q6：住宅の斡旋はどのようにしているのか。
A6：吉田氏本人がシェアハウスを4件運営しており、仮住まいとして2、3か月の間提供し、自分の

住宅を探してもらう。小国町への移住者は単身が多く、アパートや町営等の需要が多いため、空きが全くない。実は、シェアハウスはメリットが多い。例えば、除雪を当番制にし、負担を減らすことができる。

Q7：小国町内しかマルチワーカーの派遣はできないのか。

A7：制度上、町内しか派遣できない。

Q8：マルチワーカーを卒業された人はいるのか。

A8：2名いる。1名は新潟県胎内市の地域おこし協力隊へ、もう1名は教育員会に就職後、転職した。

Q9：応募とのマルチワーカーのバランスはどのようになっているのか。

A9：応募が多い。メディアに取り上げられるが多いため、それが要因ではないか。

Q10：経営はどのようになっているのか。

A10：派遣料が一番の収入源（農業の場合：1,050 円／時間）。ただし、経費が倍以上かかるので、残りは助成で賄っており、組合全体の経費を全て合算した2分の1を負担してもらっている。内訳は、町の負担（特別交付税含む）は、4分の1、国から4分の3、残り半分は事業者からの会費で成り立っている。現在、出資希望の事業者が7社ある。

Q11：農家への派遣は、1戸（又は個人）にごとに出資してもらうのか。また、派遣日数による年会費の減額等の要望はないのか。

A11：してもらっている（出資：3万円　年会費：1万円）。
現在は、何日派遣しようと（2日のみでも）年会費1万円だが、今後、事業者が増えると減額の要望が増えると思われる。

Q12：大学生等の長期休暇時の雇用はしているのか。

A12：無期雇用の厚生年金に加入してもらわないといけないので、半年のみの雇用はできない。また、学生採用は制度上できない。しかし、フレックス方式はできると思われる。

Q13：3年後のゴールの設定はどのようにしているのか。

A13：採用時に、3年後に卒業するつもりでと伝えている。採用前に2泊3日で小国町に来てもらい、体験してもらう。実際、ミスマッチやトラブルもあるが、この3年間で少しずつだがノウハウもできている。しかし、マルチワーカーには、コミュニケーション能力が最低限必要と感じる。苦手な人は残らないパターンが多い。

○白鷹町深山和紙センター（16：15～16：40）

案内：髙橋　恵　氏

現在、深山和紙の制作者は髙橋氏しかいないこと、和紙の制作工程、材料等の説明、制作した和紙は、白鷹人形研究会に依頼し、しらたか人形としても販売している等の説明をしていただいた。

令和 6 年 10 月 8 日（火）

○ぐっど山形（産直・観光センター）視察（8：50～9：30）

観光センターに掲示してある県内の観光資源やセンター内で取り扱っている土産品等について案内していただく。

○上山市楢下宿楢下蒟蒻番所視察（9：40～10：10）

蒟蒻を活用した商品開発等の取り組みや醤油製造業者との連携、契約栽培農家等への販路拡大等について紹介していただいた。

○羽州街道楢下宿（10：15～10：20）

羽州街道楢下宿にある庄内屋を見学し、羽州街道楢下宿にある建造物の一部は住民が管理し、利用していると説明していただいた。

【視察を終えて】

東沢地区協働のまちづくり推進会議視察では、横林地区には、地区計画書はあるが、東沢地区のように落とし込めていないし、住民に配布できていないため、改善の余地があると感じた。また、現在は会計が各地区に分かれているため、来年度を目途に会計を一か所にまとめ一元管理をしていきたいと話されていた。

説明してもらった部分は、コロナ禍前の部分が多く、現状をもう少し聞きだすことができればよかったと話されていた。

移動中に、椎茸の販路拡大にはロットの制約があり、販路拡大が思うようにいかないと話されており、米の販路についてどのようにしているのか興味を持たれた印象を受けた。また、有償運送についても興味深く聞かれている印象を受けた。

おぐにマルチワーク事業協同組合視察では、運営方法や派遣内容を特に熱心に聞いていた。また、マルチワーク運営について直接当事者から聞けたことが大変勉強になったと話されていた。

2　参加者

横林自治振興協議会　井上　謙二
〃　　周藤　功治
〃　　蒔苗　圭輔
（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループアドバイザー　池田　桃子

実施の様子

参加者アンケート

RMO 名	横林自治振興協議会
参加者（回答者）氏名	井上　謙二
Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。	
【川西町：東沢地区】 ○住民との話し合いのもとで 5 年ごとに「地区まちづくり計画」を策定し、印刷物として配布して住民全体の意識共有が行われている。 ○計画の各目標ごとに具体的な検証作業が行われている。 ○町田市との相互交流、人的交流の体制が継続されてきた。 ○特定非営利活動法人による移動サービス、有償運送の取り組みが良好に運営されている。 【小国町：おぐにマルチワーク事業協同組合】 ○運営が困難といわれるマルチワーク事業を、住民や町内企業との意思疎通、理解協力を得ながら、良好な運営が行われている。	
Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。	
○地域づくり計画の検証作業の実施。住民との話し合いと意識の共有。 ○地区外や都市部の地域・人材・専門機関等との交流と連携活動。 ○地域づくり学習会の推進と地域内人材の育成。	
Q3　先進地と比べて、自らの地域での活動の方が優れているものを教えてください。	
○地域おこし協力隊や外部人材の受け入れ、地区外との連携体制。 ○若者の地域づくり活動への参画。 ○地域づくり活動センターが市の直営で、市の職員が配置されている。	
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。	
○人との出会いを大切にし、人に学ぶこと。また地域人材の育成が重要だと感じた。 ○引率していただいた農村づくりプロデューサー・高橋先生の解説や地域づくりへの考え方を伺えたことが有意義だった。 ○各地で上杉鷹山や米沢藩の地域づくりの考え方に触れることができて良かったです。	

RMO 名	横林自治振興協議会
参加者（回答者）氏名	周藤　功治
Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。	
【川西町東沢地区の地域づくり活動】 <u>○地区計画</u> 　5 年毎に地区計画を策定され、分野ごとに基本目標を設定。具体的施策も年次計画を策定し、会議において検証も成されている。また、その中で、SDGsとの関りも位置づけ、「誰 1 人取り残さない」という理念に基づいた計画となっていた。5 年毎の改訂の為、地域の実情に応じた新規事業も盛り込まれている。計画は全戸配布して共有されている。 <u>○山村留学</u> 　東京町田市との連携で、短期、長期の山村留学に取組まれていた。地元小学校が閉校後は、コロナの影響もあり、その流れは途絶えているようだが、この交流を通じたきっかけから、特産品であるお米「つや姫」の販路拡大や企業との連携にも繋がっており、東沢地区の地域づくりが大きく飛躍したように思います。「交流事業」のもつ効果と、そこから生まれる信頼関係、単なる一過性の交流でない本来の事業の在り方に、改めて多くを学びました。 <u>○農事組合法人「夢里」</u> 　元協力隊2名が任期後も運営に携わっている。「つや姫」のおむすび権兵衛への提供や農地の集約、紅大豆のオーナー制度等へも取組をされている。東沢地区の農地利用も耕作不利地等はある程度粗放管理にし、条件の良い土地を集約されている点も今後の横林地域においても非常に参考になる取組でした。 【小国町おぐにマルチワーク事業協同組合】	

○マルチワーク事業協同組合の取組
　この取組みは、これからの地域づくりにおいて移住定住へは勿論、関係人口、人手不足の解消にも繋がる取組と考えており、その仕組みや実際の話しが当事者から直接聞けたことは、非常に勉強になりました。マルチワークの取り組みから、伝統技術の継承や働き方改革、事業所の従業員確保にも繋がる可能性を秘めており、単なる移住者獲得ではなく、U ターン者の受皿、若者に対しての教育的側面等、まちづくりそのものにも大きく関わっている点は、参考になりました。
【上山市樽下宿蒟蒻番所】
　蒟蒻という農産物を活用した取り組みが、経済効果を生み、関係人口・ファンを生み、醤油製造業者や契約栽培農家の関連産業にまで波及されている取組は、驚愕でした。
　横林地域も原木椎茸の新たな加工品を開発に取り組もうとしている最中の為、今回のようにバラエティーに富んだ商品開発を目の当たりにすると、新たな販路の開拓や、裾野の拡がりを実際に感じることができ、農産物を活用した事業展開の参考になりました。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

【川西町東沢地区】
○シンクタンク『夢里創造研究所』の設立
　・農産物のブランド化や地域みんな使用できる「夢里」の商標登録
　・地域資源のリストアップと商品化　等、大変素晴らしい内容。
　現在、横林地域も農村RMOに取組む中で、『横林カスタマイズ』という運営組織を立ち上げ、農産物を通じた地域ブランディングの機運も醸成できている。今後、東沢地区の取組を参考に、横林地区の地域資源をブラッシュアップしていきたい。
○NPO 法人はーとサービス川西の設立
　・H19 年9月から福祉有償運送への取組開始。需要も多い。（※約 87 名利用。）
　・H23 年からは助け合い運送も開始。（※ドライバー10 名体制）
　現在横林地域でも、「地域の足」検討委員会を立ち上げ、先進地の取組を学んでいる最中であり、今回の運営内容や予約方法、料金体験等は、今後横林の地域交通を検討する上で、大いに参考にし、必要あれば再度、詳細を照会させていただきたいと思います。
【小国町おぐにマルチワーク事業協同組合】
○中間支援組織としての機能
　人材派遣や生活のサポート、リクルート機能までをおぐマルがこなしており、移住者にとっても、この中間支援的な役割は非常に大きいと感じました。当地域でも、移住者や協力隊に対して中間支援的な役割を果たせたらと思う。
○シェアハウス
　おぐマルの吉田事務局長は小国町内にシェアハウスを4棟用意されており、マルチワーカーの職員は当初は、その施設に居住し活動を始められるとのこと。この点は、とても良い取組と思いました。やはり移住者や地域おこし協力隊希望者を受入する場合、住宅問題は非常に難しいと感じていたので、横林地域でも現在計画中の『横の base』を整備し、地域への受入れの入り口として活用を図っていきたいと思います。

Q3　先進地と比べて、自らの地域での活動の方が優れているものを教えてください。

【川西町東沢地区】
　センターの運営において、公設民営であれだけの活動をされている点は、とてもすごいと感心させられました。でも、西予市の市職員を配置しての直営方式は、行政手続き等の住民の利便性を含め、地域課題に対して、直営だからこそ出来る地域づくりを実践できるのではないかと考えています。
【小国町おぐにマルチワーク事業協同組合】
　おぐマルのマルチワーク事業協同組合もまだ活動が浅い為、定住へ結びついた実績は無いとのことでした。当地域では協力隊任期終了後、新規就農者として定住者を得ている実績があり、その点では、マルチワーカーとして活動する3年間と、地域おこし協力隊（※個人事業主型）の活動・支援の方が、定住には結び付きやすい部分もあるのかも知れません。

Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
【川西町東沢地区の地域づくり活動】 〇公設民営での地域づくり、住民自治活動。 ※公設民営での運営と直営（※市職員常駐）での運営について、行政サービスの提供や住民の利便性等については今回の研修では比較できなかったが、『地域づくり』活動や『住民自治』活動においては、東沢地区は大変充実した活動がなされていた。 【小国町おぐにマルチワーク事業協同組合】 　マルチワーカーとしての働き方は、人手不足に悩む地元事業所と、働き場所・現金収入を必要とする移住者にとって、とても双方に良い仕組みであることは間違いありません。しかし、定住まで帰結するかというと、マルチワークだけでは足りない部分もあるのかもと、考えています。勿論、マルチワーカー希望者の目的が、キャリア探求と人間的豊かさの追求のみにある場合は、需要を満たすものだと思いますが、地域で受け入れる場合には、各種施策と複合的に連環した仕組みの構築が出来ればと思っています。 【農村着火型プランナー　高橋信博先生】 　今回の研修では、高橋信博先生にアテンドいただきました。その為、当事者が取り組まれた背景や捕捉的なお話もお伺いすることができ、大変有意義な物になりました。 　また置賜地方に遺る「草木塔」の考え方を最初に聞けたことは、雪深い雪口で育んでこられた産業や文化、暮らしの奥深さも活動の中に感じることができ、単なる先進的な取組を学ぶ以上に深い学びを得られたように思います。 　今回、高橋先生からは「地域計画」策定に向けたマニュアル本も伝授していただき、これからの2～3年後の横林の地域づくりに大いに役立てることができそうです。 【研修全体を通じて】 　今回学べた素晴らしい取組・・全て「人」が成されたことです。上杉鷹山先生の、 『なせば成る　なさねば成らぬ　何事も　成らぬは人の　なさぬなりけり』を肝に銘じ、これからの地域づくりに取り組んでいきたいと思います。ありがとうございました。

アドバイザーレポート

（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループ　アドバイザー　池田　桃子

今回の先進地派遣は、運営当事者から直接、事業の詳細や、報告書等には載っていない些細な事柄を伺うことができ、大変満足度の高い派遣になったと思う。

農村 RMO 設立を目指す横林地域のため、設立時の動きや運営方法についての質問が多かったが、農産品の販路拡大方法についても興味深く聞かれていた。

先進地派遣事業は、派遣先からの学びだけでなく、我々が派遣元の取り組みを深く理解する機会にもなり、地域づくりのリアルな現場を知るモニタリングのよい機会となった。

一方、横林自治振興協議会（RMO）のように、地域づくり活動センター（行政）がしっかりと RMO 活動の下支えを行っている場合には、先進地派遣の意義や学ぶポイントを絞って、効果的に進めることができるが、曖昧なイメージで先進地派遣を希望する RMO も出てくることも想定されるため、そのような場合には地域課題に関するヒアリングや活動モニタリングを通して、効果的な事業となるべくコーディネートしなければならないと感じた。

○プラットフォーム・先進地派遣

日付	派遣 RMO	派遣先	視察内容
R6.11.21(木) ～23(土)	かりとりもさくの会	北海道上川郡 東川町	ふるさと納税返礼品制作方法と運営

1 概要

<u>11 月 21 日(木)</u>

役場職員と巡るひがしかわ魅力発見ツアー

東川町経済振興課　小林 峻 室長

〃　　堀口 開世 主事

冒頭に役場内で小林室長と堀口主事から東川町の概要や取り組んでいる主な事業が行われた。東川町は人口約8,000 人、耕作放棄地はほとんどなく、地下水100%使用をする「写真の町」づくりを推進するコンパクトシティであるとのこと。

役場職員は専門職含め約 130 人で、その内の 80～90 人が事務職員。東川町出身の職員は数人程度で、他は町外出身の職員。小林室長は千葉県出身の移住者で、堀口主事も東川町外の上川郡町村出身であるとのこと。現在東川町は人気の移住先として移住者が殺到しており、住宅・土地不足が課題となっている。

地域おこし協力隊は 70 名以上が活動しており、定住率は4割ほど。“町を歩けば協力隊に出会う”と言われるほどの人数がいるとのことであった。

他、「写真の町」としての取組みや産業、子育て・教育事業、移住施策、多文化共生事業などの概要説明があった。

西村氏から多くの事業を行う財源と空き家への取組みについて質問があり、財源については国の様々な交付金制度を活用しておこなっていること、空き家については中間管理住宅の取組み(資料p47)を行っていると回答があった。

町で多くの事業を進める背景には役場の指針「3つの“ない”はない」を掲げている。「予算がない、前例がない、他でやってない」を言わず、民間の力を活用しながら町民が誇りを持てる行政をつくることを目指している。

なお、東川町では視察依頼が殺到しており、連日視察対応が行われている。多い時は一日2件対応することもあると。参加費は10,000 円/人で、参加費は寄付金として頂戴している。最近韓国の雑誌に東川町が取り上げられ、韓国からの視察が増加している。韓国語で対応できるようにしているとのこと。

説明の後は町内の主要施設「複合交流施設せんとぴゅあⅠ・Ⅱ」「サテライトオフィス KAGU の家」「東川町共生プラザそらいろ」「東川小学校」を役場車両で視察した。

(せんとぴゅあⅠ)

建物の2～3階が日本語学校となっている。日本語学校はアジア圏からの留学生が多く、留学期間は半年～3年間などバラバラ。日本語の理解度に合わせたクラス分けを行っており、一番難しいクラスでは二重否定を扱い、日本人でも理解するのが難しいと。卒業後は東川町内で就職する人もいる。

1階はせんとぴゅあは「織田コレクション」などのアートギャラリーやNPO法人が運営するコミュニティカフェ、ラウンジなどを設置しており、留学生と町民の交流の場として活用されている。

(せんとぴゅあⅡ)

せんとぴゅあⅠに隣接するせんとぴゅあⅡは町立図書館として機能しており、学習スペースや多目的スペース、木工小物を販売するショップが併設されている。「君の椅子プロジェクト」の展示や大雪山に関する文献をまとめたコーナー、壁面に未来チャレンジ活動支援事業を活用した取り組みのPRコーナーが設置されていた。

建物内には町民や課外となった学生が多く訪れており各々の時間を過ごす様子を見学した。

（サテライトオフィス「KAGU の家」）
　たまたま隈研吾と知り合いのデザイナーが協力隊として東川町に来た際に、隈研吾建築都市設計事務所と連携して総工費1億円の「KAGU の家」を建築。オフィス内の全てに旭川家具が使用され、冬でも温かく快適に過ごすことができる。

（東川町共生プラザそらいろ）
　隈研吾氏監修で建築された、町民のサードプレイスの役割を持つ施設。1階に子どもの遊び場やラウンジ、2階に運動器具を置いている町民利用 700 円の健康スペースが設置されている。ジムの午前中は高齢者や主婦の利用が多く、夜は学生や社会人の利用が多いとのこと。

（東川小学校）
　平屋建てのオープンスクールで広大なグラウンドや芝生広場、水田、果樹園を備えた小学校。廊下は全長 240mあり、「セグウェイが欲しい」と教頭先生が話しているとのこと。多くのJETsが所属しており、東川町独自の国際教育「globe」を推進している。オープン教室が苦手な特性を持つ生徒に対しては仕切りを設けた教室で対応している。
小学校の隣には扉で仕切られた地域交流センターが設置されており、学童保育が行われている。小学校のもう反対側にはコミュニティスペースとなっており、高学年の部活動に使用される体育館やアンサンブル活動が行える講堂がある。
　この小学校とグラウンド、教育プログラムを見て移住を決定する人が多いとのこと。
　時間が押したため、ツアー内容にあったグリーンヴィレッジ見学は省略することとなった。
　ツアー最後に小林室長から、東川町役場には松山市出身の職員と西予市出身の職員が1名ずつおり、どちらも業務の都合上会うことは難しいが愛媛から来た人がいることを伝えておくと話があった。
　西予市の方は西村氏と繋がりのある人のようで、この後小林室長から話のあったその方が大歓喜していたと、ココ企画を通じて連絡があった。

【ココ企画より】
・東川町人口の約半数は移住者である。
・役場職員の人数が少ないため、このツアーの案内を外部委託に出す検討が行われているが難航している。
・たくさんの事業を少人数で行い、外部の力を積極的に活用しているのが特徴。交付金をたくさん活用しているのでその分たくさんの計画が策定されているためやらざるを得ない部分もある様子。ここだけの話、職員の勤務環境は想像のとおり…。
・ココ企画もよく役場に今後の展望を話に行くが支援を求めているからではなく、役場の人に話しておけば勝手にまちづくり計画をたててくれるので事業が進めやすい一面があるとのこと。

11 月 22 日（金）
大雪山フォトトレッキング
　写真家兼登山ガイド　大塚　友記憲　氏
　スノーシュー体験も含め、旭岳麓のトレッキングを行った。最初に旭岳ビジターセンターにて大雪山周辺の地理や特長の説明とコース内容の説明があった。
　大雪山とは周辺の山岳一体の総称であり、この日は大雪山の一部である旭岳の麓を歩くとのことであった。
　雪の上の歩き方や注意点、トレッキング中の体温調節の方法の説明が行われて出発した。今季の雪の量は少なく、例年 10 月下旬頃の雪量とのこと。道中は雪の上に残った動物の痕跡や植物の解説、微量の温泉が流れている場所で植生しているクレソンの試食や水中生物の探索を行った。
　また、雪の上での楽しみ方のレクチャーと、観光客の喜ぶポイントの説明があった。観光客の喜ぶ反応が良いとガイドする側のモチベーションも変わると大塚氏やココ企画社員が話していた。
　旭岳の見える湿地帯で休憩した後コースを折り返した。
　大塚氏は埼玉県からの移住者で、20年以上東川町で暮らしているとのこと。主に風景の写真を撮っている。大塚氏の他にも東川町で写真家を名乗っている人は約8人いる。
　21 日に東川町をガイドした役場経済振興課の小林室長も移住前はネイチャーガイドをしており、鳥類に精通している。ガイド分野で鳥類は特に難しいと有名、などの小話をはさみながら進行した。

【ココ企画より】
・ガイドに必要なのは知識だけでなく、ガイドの合間に色々な話題を提供できること。最初はガイドのみ行い、参加者の慣れてきた様子に合わせてガイド以外の話題を増やしていく。
・今後はガイドの高齢化が問題となってくるが、ただ若い人がガイドをするのではだめ。多様な経歴やたくさんの経験がガイド自身の魅力や信頼感に表れてくるのでガイド育成は難しいところである。
・プランをコーディネートする際はピンポイントを楽しむのもいいが、全体を理解してもらえるような内容になることをココ企画では心掛けている。
・企業研修の依頼で「とにかく旭川家具をたくさんみせてほしい」とオーダーがあったが、家具屋さんを時間いっぱい回るのではなく、原材料となる木の生産地や加工場、携わる人との対話をメニューに組み込む。季節が合えば木を伐りだしているところを見させてもらう。その上で家具を見る内容を提案する。
・家具に限らないが、どういう環境や過程を経ているかを現地で見たり話をすることが大切だと思っている。

ココ企画の事業説明
　合同会社ココ企画　代表社員　林　和寛　氏
　　課長　　小川　茉奈恵　氏
　　社員　　若生　木ノ葉　氏

　視察の最後にココ企画の事務所にて、「体験型ギフトカタログ」についての説明があった。
　カタログを作成するまでの流れや町村との協議内容、事業者への協力依頼などについての話があった。東川町などカタログをてがけた町ではふるさと納税の返礼品の他、一般や企業が贈答品として活用しているとのこと。
　カタログは使用後も地域情報誌として活用できるよう工夫を凝らしており、体験のため町を訪れた際に食事や土産品購入の参考とすることもでき、地域の経済効果向上に貢献している。
　西村氏より、西予市へふるさと納税する際、使途を「狩江のため」にチェックを入れると納税金の一部がかりとりもさくの会へ入ってくるようになっているため、狩江版で同様のカタログを作成して返礼品とすれば収益増に繋がるため検討したいと話があった。
　カタログ作成にかかる見積書の作成を西村氏がココ企画へ依頼し、視察は終了した。

【所感】
・東川町役場の取り組む事業は幅広く、たくさんの事業を抱えながらも自分たちの仕事と町に誇りを持ち、良い町を作ろうという熱意が伝わり、同じ公務員として勇気をもらうことができた。
・移住施策は特に行われておらず、地下水と教育プログラムが決め手の移住者が多いと説明を受け、その2点は確かに魅力的であった。しかし2日間を町で過ごし、町の人と話す中で自分たちの生活を大切にする気持ちや、町への愛着心が伝わり、東川町を知るにつれて「ここで暮らしたい」という魅力が沸き上がってきた。“魅力的”という言葉はよく見聞きするものだが、東川町を知るにつれて体が磁石のように勝手に引き寄せられるような感覚に、愛媛県や今治市を訪れた人に同じような魅力を感じてもらうために何が必要かと考えた。
・ココ企画の考え方や事業展開の方法からは、今後 tiliki で企画をする上での考え方の参考とすることができた。
・随行者の立場であったが、職務に対する姿勢や考えを学ぶことができた。

2　参加者
　かりとりもさくの会　事務局　西村　吉仁
　　〃　　二宮　祥子
　（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループアドバイザー　山岡　藍子

実施の様子

動画（YouTube）

https://youtu.be/ici58BWtl8k

参加者アンケート

RMO 名	かりとりもさくの会
参加者（回答者）氏名	西村　吉仁

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

地域を変えるのは「人」の想いであることを改めて感じた。
地域資源と移住者を上手く活用し、まちを維持していることが非常に参考になった。
特に、教育への工夫が驚いた。乳幼児や園児の居場所を作り、小学校の設備を整え、多くのELT を抱えることにより、教育水準が上がるとともにそれを目的に、子供連れの移住者を呼び込むことに成功をしている。まさに好循環と感じた。
また、70 人もの地域おこし協力隊、酒蔵の建設、地域通貨、外国語学校の運営など、多くの補助金や交付金の活用を行っており、それを実行できる職員のモチベーションの高さに驚嘆した。
「地域を変える」ことへの自治体職員の役割の大きさを痛感したので、自分自身もさらに頑張りたいと感じたところです。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

田舎体験メニューをふるさと納税の返礼品とする取り組み。
田舎での日常の体験が、都会では非日常となることがまだたくさんあると思ったので、それを探すことから始めたい。
東川町では、環境資源だけではなく人材資源も有効に活用しており、あらゆるまちの資源を
経済循環として有効利用していた。狩江地区にも、様々な特技を持った職人が多数存在しており、外部人材との交流機会を創出したい。

Q3　先進地と比べて、自らの地域での活動の方が優れているものを教えてください。

色々な活動への住民の関わりは当地区の方が多いのかなと感じた。
各事業が、移住者ファーストにも見えなくはなかったが、その事業が地域住民に大いに貢献しており、結果として全ての方々に住みやすいまちとなっている。
住民 8,000 人の内、約半数が移住者ということで、移住者の受け入れのハードルは「ほぼない」と感じた。
優れている点を探すのが難しい。

Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。

非常に素晴らしい視察となりました。ありがとうございました。
視察に関する予算が削減されている中で、やはり先進地の視察は重要だなと改めて感じました。また、視察に関する事務経費等もチリキさんで行っていただき、負担も少なくとても助かりました。
継続して実施していただくことを希望します。
山岡さんが、全く気を遣わなくていい方で、とてもありがたかったです♪

RMO 名	かりとりもさくの会
参加者（回答者）氏名	二宮　祥子

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

東川町役場では、町内での事業の取り組みや経緯などを学びました。最も印象深かったのは、前町長さんが掲げた、①写真映りの良い景色＝景観②写真映りの良い人づくり＝教育③写真映りの良い物つくり＝経済　この3つの目標に沿って、事業がぶれることなく振興していることです。建築条件を設定するなどして、景観を守りながら地下水の活用することや、人を育てるための教育現場の充実、オリジナル家具や建物を起爆剤とした経済振興など、多くの学びがありました。また、ココ企画さんの体験商品の提供方法や企画作りを学び、実際に商品を体験できたこともよかったです。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。
行政の取り組みとして、大きく事業を起こすことはすぐには難しいですが、持続可能な地域づくりを目指すために地域で大きな目標を立て、今年度、更新を迎える地域づくり計画書の作成に役立てたいです。また、観光資源の活用も見直し、観光商品のさらなる魅力づくりを考えたい。 ココ企画さんでの体験予約サイトを拝見し、地域でもスムーズに予約ができるよう予約システムの導入を考えたい。
Q3　先進地と比べて、自らの地域（での活動）の方が優れているものを教えてください。
まず、観光資源の種類が豊富といえます。私たちが提供する体験は、農業、漁業、レジャーなどさまざまです。少ない移動時間で多くの体験ができることが有利だと思いました。 また、気候が年間を通して温暖なので、ほぼ年中通して体験を受け入れられます。 昔から続く祭りなどの地域の伝統行事あり、日本の歴史や、文化に触れる機会が多くあります。
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
この度、このような視察をさせていただき、本当にありがとうございました。 西予市以外の行政の仕組みや取り組を聞けたり、実際に施設を回らせていただいたりと、大変参考になりました。また、実際に住む方の話や、移住者さんのお話も所々で聞くことができました。住む方の、思いや考え方を聞くことで、その町の将来が見えてくることがあります。東川町の将来は今以上に明るいなと感じました。 我が町も、住む人、訪れる人、関わる人が、前向きで、地域の夢を語れる人が増えるよう頑張ります。

アドバイザーレポート

（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループ　アドバイザー　山岡　藍子

東川町は北海道のほぼ中央に位置しており、大雪山系の最高峰旭岳の所在であり豊富な森林資源や水源に恵まれた町である。面積は247．30㎢、人口は約8，000人であり、愛媛県内でいうと鬼北町（面積：241．88㎢、人口：約9，000人）の規模に近い。

東京の羽田空港から旭川空港まで約1時間30分、旭川空港から東川町まで車で約15分、旭川市内から東川町内まで車で約30分という都市からのアクセスが格段に良い。

今回の視察で感じた東川町を象徴する要素は「写真の町」、「日本唯一の公立日本語学校」、「豊かな天然資源」であり、この3点を核にまちづくりが展開されている。

また、人口の半分が移住者であり、行政職員も大半が町外からの移住者で運営されていることから、“まちづくり”というよりも、地域の特性を活用してリノベーションされたまちという印象を受け、町役場の職員、積極的に町民や外部人材と関わることで得たアイデアや人脈をまちづくりに取り込むこと、利用できる資源（人・モノ・環境・制度）を十分に活用することでアイデアを実現させ、理想とする暮らしやすいまちへのブラッシュアップが図られていると感じた。

役場職員は「予算がない、前例がない、他の町でやってない」の3つの“ない”に挑戦する姿勢が長年培われ、職員のモットーとして根付いている。また、職員一人一人が町の営業マンとなり、年齢性別関係なく相手を大切にしながら職務にあたることで、職員、町への好感や信頼が高まり、東川町を訪れたり、移住するきっかけを職員自身が作っていた。

また、視察中は各所で役場の存在感や、役場と連携したまちづくりへの考えや事業を様々な人から聞いた。町役場が要となってまちづくりを先導し、役場職員だけでなく、町の人が町のまちづくりを語れる関係性が町のパフォーマンスを向上させる要因とも感じた。

職員の意識や姿勢だけでなく、町と住民の密な対話と関係性が東川町を先進地に押し上げている要因であった。

今治市は、市の看板的スポットや名物料理、アクティビティの数と、自転車移動で市内移動、地域間移動が行えること。1年を通して季節上の制約がない。海、山、まち、里など自転車で景色の移ろいを楽しむことができるところが強み。

視察コーディネートをいただいた「ココ企画」では、東川町の生活の一部を体験型ギフトとして取り扱っており、ふるさと納税を通して東川町への来訪者誘致を行っているが、QOL を追求した生活環境の整備に特化した東川町では、観光客誘致のための看板的存在が少ない一方で、一棟貸しの宿泊施設は多くあるため、地域に溶け込んで静かに余暇を過ごしたい、大勢の観光客を避けてアクティビティをしたい人にはうってつけの旅先だと感じた。

今まで他市町村への視察に行く機会はほぼ無かったため、今回、東川町の視察に同行し、町の取組みを見聞できたことは私にとってとても刺激ある経験となった。

今回の視察で、初めて東川町が移住先としてとても人気のある町であることを知り、実際に話を聞いて町を見ることで「ここに移住したい」という気持ちを味わうことができた。地縁のない場所を移住先と決めるまでのポイントは人それぞれだが、興味関心を示した人が決意に変えさせるのはその土地でのポジティブな記憶や感情であると思った。

愛媛に興味を持って移住を検討している人の決め手になれるよう、一つ一つの丁寧な対応が自分に今できることだと思った。

また、旅の仲間であったかりとりもさくの会のお二人からも学ぶことは多く、視察中の着眼点や、地域との関係性など感じ取ることができた。

アドバイザーレポート

（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループ　チーフアドバイザー　田村　政幸

今回参加いただいた西予市の RMO「かりとりもさくの会」は、宇和海に面し、「みかん」「海産物」「真珠」など愛媛の特産品が集まる魅力的な場所にあり、修学旅行客や日本の風土に根差した体験を求める外国人観光客を地域で受け入れ、収益を上げている RMO である。

「人口流出」「空き家」「耕作放棄地」など過疎に伴う地域課題は当然あるものの、大学生によるフィールドワークや移住者の受け入れなど、いわゆる「若者」「よそもの」の力を積極的に活用しようとする風土がある。

北海道東川町とは地理的には全く異なるものの、その風土は近く、「観光を軸としていること」「地域住民を巻き込むための数々の仕掛けを行っていること」「ふるさと納税を生かした収益化や、関係人口増加を目指していること」など、先進地派遣によって得られる効果は大きいと考えられた。

RMO「かりとりもさくの会」は現在、企業組合による法人運営に移行すべく準備を進めている。地域おこし協力隊を法人運営スタッフとして招き、4年後に協力隊を企業組合で正規雇用できるよう財務計画をたて、収益事業の拡大を図ろうとしている。

今後、企業組合による収益拡大と RMO との関係性や収益還元が RMO 活動に与える影響など、かりとりもさくの会の実践をモニタリングし、他地域における RMO 活性化につなげたい。

○プラットフォーム・先進地派遣

日付	派遣 RMO	派遣先	視察内容
R7.1.27(月) ～28(火)	魚成地域振興会	広島県庄原市 ・三次市	農村 RMO の設立と活動、地域の合意形成

1 概要

1月27日(月)

山内自治振興センターにて、ブランド米「里山の夢」の取組み、農村RMOの概要と取組み、意見交換、堆肥センターの見学を行った。

※庄原市には 22 の自治振興区があり、振興区は市事業費の8割の補助金(上限300 万)を市から受けて活動している。山内集落地域振興協議会は振興区の1つ。

●ブランド米「里山の夢」

竹林整備で伐採された竹をパウダー化し、堆肥と混合させた肥料を使用して栽培されたお米。基準を超えた食味値を満たしたものを「里山の夢」として販売。銘柄は生産量の3分の1があきさかりで、他こしひかりなどある。生産は三次市、世羅町へも普及している。販売先は全農8割、自主販売2割。自主販売は収穫した中でより高品質なものを確保し、インターネットや全国の駅ビル、紀伊国屋で販売している。輸出も検討したが、国内の米の価格高騰や収穫量減少、安価な海外米が海外で流通していることもあり断念。調査した後に輸出はダメだと言われたため、輸出は考えない方がいいとのこと。

●RMOの取組み

毎月 20 日に開催される自治会長会に諮りながら地域との合意形成を行い、協議会を設立。交付金事業を活用しながらスマート農業技術の実証実験や各地への視察、獣害対策研究、広島県立大学や地元小学校と協力した研究や事業展開を行っている。広島県から古川氏が派遣され、制度活用や組織運営等支援を受けている。R7年度にRMO3年目で、今後の組織の在り方について検討を行う予定。

●堆肥センターの見学

市が所有して自治振興区で維持管理を行っている。木で作られた 2,000 万円程度の簡素なセンターなので維持管理料はあまりかかっていない。約4t の堆肥を保管。このセンターで竹パウダーと牛糞を攪拌。現在攪拌しているのは元酪農家の1名のみ。組合員はタントウ 7,000 円で肥料散布まで行う。余れば 15,000 円/t(運搬費込)で組合外に売ることもあるが、自分たちで使う分を作るので精一杯。

●意見交換

(魚成)地域の住民とどう合意形成をはかり、無関心層を取り込んでいったのか。

(山内)山内集落では各自治会の意見を自治会長が取りまとめ、月1回の自治会長会で集約する。集約した内容を自治会でまた検討してもらうことを繰り返している。自治会長会へも協議会の説明を行う。自治会長の任期は2年で長年再任している人が多く、協力的。

(魚成)魚成は自治会長の任期が1年のため意見の集約が難しいのが現状。

(山内)1年交替だと当番制のところもあり難しいだろう…。とにかく広く、交替した人も分かるよう情報提供をしていくことが大事だと思う。山内は視察をたくさんしている。総勢約40名、担い手や中山間、多面的の代表者を連れて行く。実際に行って視察して、帰りの道中にアンケートをいてみるとほとんどの人が「やりたい！」という回答で、皆がやった方がいい方向へ切り替わる。口で説明しても中々理解を得られないが、実際に現地へ行って現地の話を聞けば受け取り方が違う。そういうところへお金を使う方がいい。地域の人も一緒に連れていけば気運が変わる。視察や研修にどんどん行った方がいい。

（山内）山内のブランド米のように、魚成の地域の売りはあるか。
（魚成）今は柚子。田んぼが柚子畑にどんどん切り替わっている。地元に柚子を加工する大きめの会社があり、機械の大型化で田んぼに入れず米を作れなくなった高齢の農家が柚子に切り替えている。ただ、補助金を使用したパイプライン工事を行っており、それを考えずに柚子への切り替えを行ってしまっているため、今以上に水稲面積がなくなると農家が補助金返還しなければならなくなる。山内集落の活動を元に、古川氏より交付金事業の活用方法について説明と解説があった。
（魚成）地域には保守的な考えを持つ人が多いため、交付金事業等と活用し、地域が同じ目線に立てたところが魚成のスタートだと思う。

1月 28 日（火）
●田幸地区町内会連合会
田幸まちづくりビジョンの更新時期に三次市から農村RMOの活動の打診があり、三次市の農政課と地域振興課の伴走支援を受けながら検討を重ね、R5年度に農村RMOを立ち上げた。「RMO通信」で住民への周知を行いながら、主にフルーツ農業の製品化やラジコン草刈り機の入手、地域交通の検討・実証実験を行っている。R7年度にRMO3年目となるため、今後の組織の在り方について検討を行う予定。
●石原集落地域振興協議会
田幸地区と同様に三次市からの声かけをきっかけに農村RMOを設立。里帰り出産を機にそのまま集落へ引っ越してくる家族が多く、住民が地域に対して協力的な集落。海外の農村コミュニティ開発に携わってきた守満氏をコーディネーターとして雇用し、RMOの組織体制を整えた。スマート農業機器導入の実証実験や研究、地域人財を講師とした勉強会の開催、生活支援事業に取り組んでいる。R6年度でRMO3年目となるため、次年度の組織体制について検討中。古川氏より、定年退職して集落を戻ってきた人たちをプロボラ（プロのボランティア）隊として鳥獣害対策に、携わってもらっているが、定年年齢の引き上げの風潮に担い手確保に苦慮していると話があった。
●意見交換
（魚成）西予市は市からの補助金を受けて地域活動センターを運営しているが、市からの補助はいつまでも続くとは思っていない。終わる前に自分達で自走できる組織にしていないと、市の支援を止められた時に活動できなくなる。交付金事業を活用しながら会の収益を上げ、法人化をゴールに持っていきたい。田幸地区ではどう考えているか。
（田幸）田幸は連合会全体が法人化するのではなく、1部会を法人化し、残りの部会は連合会の事業とすることを検討している。交付金事業等を活用し、部門を分けながらできることを行い、法人化のきっかけづくりをしてくれるのがRMOの役割だと思う。最終的には田幸を農業振興と農地保全の2階建ての地区を考えており、2階は農業を行う人や法人。1階は農地保全を行う。忙しくて草刈りできない時に草刈りを手伝ったり、空き家対策など。この1階部分の仕組みを作るため、一般社団法人を検討している。魚成地区は農村RMOの活動の予定はあるか。
（魚成）目標は令和8年度。そこを目標に計画を作れるよう県に相談しながら進めている。
（田幸）RMOをするにはビジョンが必要。魚成の計画がR6年度までなので、更新する時にRMOの計画を作るのがいいだろう。田幸もRMOをするから計画を作ったのではなく、計画があって三次市に見せたからRMOの活動を行うこととなった。RMOを検討するにはいい時期だと思う。振興会の中でRMOを行おうとしているのか。
（魚成）話し合い次第にはなるが、地域に役員の成り手が少なく、皆何かの役員を兼任しているので新たに組織を増やしたくはない。振興会の中に中山間の組織、例えば環境保全部が入る形がいいと思う。皆、新しい役員と聞くだけでアレルギー反応になりつつあるので、できるだけ既存の組織を活かしてやるべきかと思う。魚成では退職した年齢以上の人が地域づくりの主体となっている。石原地区では30歳～40歳代の若い世代が地域づくりに参加しているが、どのように入ってもらったのか。
（石原）石原集落は石原出身の女性が出産して集落へ戻り、集落で2世帯住宅を建てて暮らすという傾向が10年前から続いている。去年は子供が集落で3人生まれた。盆や正月に集落の実家へ帰省した際に住みやすいと感じてくれて、戻ってきている人が多い。そのような人に呼びかけて参加してもらった。若い人が中心になってRMOの事業やビジョン作成を推進して

いくと言うと、年配の人たちは反対できない。若い人たちが他所から来た人たちにも声をかけると、積極的に参加してくれた。参加してもらったら1時間でも2時間でも日当を払うようにした。活動に対して少しでも対価を払う仕組みをつくることで若い人たちの意欲にも繋がっていると思う。

（守満氏）中山間地域だと役員は若い人にとって親世代の人たちで、親世代の人たちを中心に動いていることが多い。若い人たちは無関心で、自分たちもその年になればやると思っているが、今何があってどういう決まりがあるのかわかっていない。石原を見ていてよかったのは、若い人が委員になることによって、古川氏からこういうことをしましょうという話をすると、若い人に知識が入り、地域が今どうなっているのか理解して興味が湧く。将来自分がやるんだという自覚が育ってきているのを感じている。

（石原）若い人が地域の会に行っても黙っておこうとすることが多いが、地域のビジョンは地域の皆の意見を取り込む必要があるため、参加してもらい意見を話してもらうようにしている。どんな活動も昔と違ってボランティアで全て行おうと思ってはいけない。ほんのわずかでも対価を払えるような仕組みを作ることが地域の持続可能な運営であると思う。

（魚成）事務局はRMO3年目が終わった後の雇用をどう考えているか。

（石原）守満氏は、本業は別にありながら石原集落に貢献してもらっている。月20万円程度で雇用している。今年は通年雇用ではなく必要な時に都度雇用している。月20万円でも1年雇用すれば金額は大きいので考える必要はある。

（田幸）同じ西予市野村町にある横林のRMOを視察して三次市に来たのか。

（魚成）横林とは普段から情報提供をしてもらうなどの縁がある。

（田幸）広島県のRMOは4つあり、内3つが三次市で、田幸と石原と隣の布野町というところ。あと1つは庄原市の山内集落で、県北に集まっている。年に数回、県主催で交流会を行っている。

（魚成）愛媛でも県主催の会があるのでそこに行ってみようと思っている。魚成の人口は 1300 人程度。事業を始める時は皆が同じ方向を向くことが難しい。地域の人にどうこっちに向いてもらうかが今一番課題。地域の役員でやっていると、自分たちが住民なのにあの人たちでやっているという雰囲気になるのが悩み。

（守満氏）田幸は広くて町もあれば農業もしている場所もあるので合意形成は難しいのではないか。

（田幸）町は塩町駅周辺だけで、そこは農業がない。あとは全部農業がある。9割以上は農家なので難しいということはない。

庄原市山内集落地域振興協議会　事務局長　松田 一馬
〃　事務局　実安 裕美
田幸地区町内会連合会　事務局長　古川 三平
〃　事務局　間 大介（地域おこし協力隊）
〃　農村振興部会長　割下 勉
石原集落地域振興協議会
内閣府地域活性化伝道師　古川 充
石原集落農村 RMO 事業コーディネーター　守満 美紀

しょうばら産学官連携推進機構　コーディネーター　小池 拓司
〃　スタッフ　赤堀 幹義

2　参加者
魚成地域振興会　福原 浩一
〃　浅野 晋司
〃　久保田 学
〃　高橋 和世

（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループアドバイザー　山岡 藍子

実施の様子

参加者アンケート

RMO 名	魚成地域振興会
参加者(回答者)氏名	久保田　学

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。
・どの先進地も農業が元気な印象を受けた。これまでの地域づくりでは、地域住民とその住民が属する任意団体、センター(行政)が主体であったが、農業法人をはじめとした企業や教育機関を取り入れていく視点が必要ではないかと思った。 ・持続可能な取り組みにするために、住民への事業の周知と出口戦略は重要だと感じた。
Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。
・いつまでもボランティア無償の会議やイベント参加では続かないので、会議等にも手当を出すことは検討したい。 ・共感者を増やすことが重要、話し合いだけでは伝わらない部分を、多くの住民が視察等に行くことで、取り組みへの理解と当事者感を上げたい。
Q3　先進地と比べて、自らの地域(での活動)の方が優れているものを教えてください。
鳥獣害対策について、魚成が西予市内で最も鳥獣の捕獲件数が多い地域であり、優秀な漁師が多く存在する。そういった方がプロボラとして直接捕獲するのはもちろんであるが、今後人材育成にも関わってくれるのではないだろうか。
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
視察のよい機会を与えていただきありがとうございました。せっかくの良い機会なので、もっと多くの人数が参加できる事業になればとてもありがたいと感じました。

参加者(回答者)氏名	高橋　和世

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。
山内集落では、ブランド米を推進することで、地域にも田にもいい効果が出ていることがわかりました。一人で行うことには限界があるので、やはり地域の方々の力が必要だと思いました。 三次市では、農業だけでなく生活支援や、プロのボランティア活動などのお話が聞け、また会計的な面も資料に添付いただいたので、活動内容を理解しやすかったです。
Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。
里山カフェなどは、地域ニーズもあり、地域の人材を掘り起こしてできるのではないかと思いました。 将来ビジョンの作成に当たり、若い人材を招くことなどを参考にさせていただき、真似したいと思います。
Q3　先進地と比べて、自らの地域(での活動)の方が優れているものを教えてください。
鳥獣害対策への取り組み(西予市の補助金等)が出来ているように思う。ただ、捕獲頭数は多いが、被害は年々深刻化しているので、猟友会なども部会に参加してもらうような取り組みができればと思います。
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
視察させていただいた地域は、農村RMO推進事業を活用する前から、様々な取り組みをされていて、いいタイミングで事業を活用され、地域おこしにつながっているように感じました。魚成地域では、行事やイベントなどをボランティアに頼った運営を行ってきていますが、いつまでもボランティアでは続かない現状があり、様々な事業や補助を使って仕組み作りに力を入れていく必要があると感じました。

○プラットフォーム・先進地派遣

日付	派遣 RMO	派遣先	視察内容
R7.3.14(金) ～16(日)	(一社)ゆりラボ	山梨県富士吉田市	高校生を対象とした地域での教育プログラム

1 概要

①富士吉田市概要説明

講師：山梨県富士吉田市ふるさと創生室ふるさと魅力推進課 主幹 秋山 眞一郎 氏

・ふるさと魅力推進課秋山主幹より、富士吉田市の概要やふるさと魅力推進課の取り組みを説明していただく。
・富士吉田市は富士山の麓にある街で、富士山信仰の拠点でもある。2013 年には、世界文化遺産に登録された。
・市の南半分は富士山が占めているため、北側に人口が集中しており、若い世代が減少傾向にある。
・産業は、第三次産業(製造・小売・サービス業)が約 64%を占めている(第一次産業：1.1%、第二次産業：35.2%)。
・高速バスや市内循環バス、電車等があり、交通の利便性は高い。
・商店街や飲食店は多いが、少しずつ衰退している。一部では、空き家をリノベーションして、居酒屋やカフェを経営しており、「新世界乾杯通り」も復活した。
・ハタオリが有名ではあるが、昭和初期頃から衰退。現在は、若い職人達が奮闘し、毎年 10 月頃にハタオリマチフェスティバルを開催している。
・ふるさと納税は8年連続県内最多であり、過去には全国 10 位内に入ったこともある。返礼品に特徴的なものはないが、地域の力を結集して、様々な種類を提供している。

【ふるさと魅力推進課の取り組み】

▸地域魅力発信事業
・郷土愛醸成プロジェクト
郷土愛醸成を核とした若者チャレンジプロジェクトをかえる舎と共に取り組む。
・地域おこし協力隊による地域活性化
現在まで、18 名の協力隊が活動し、現在は3名が活動中。

▸定住促進関係事業
・ふじよしだ定住促進センターによる移住のサポート
移住相談(よしだの暮らしの相談室)、空き家バンク、お試し滞在住宅(NERUTOCO 棟)、情報発信(you FUJIYOSHIDA)、移住後のコミュニティづくり(交流会等の実施)
・富士吉田市定住促進奨励金交付事業

▸域学連携事業
・地域活性化・人口減少対策に関する調査研究(慶応大学)
・魅力ある街のデザイン調査研究(東京大学)
・大学連携によって取り組まれた事業もある。

②富士吉田市と東京大学の連携プロジェクト(下吉田えきまち近未来ビジョンの提案)の報告展示見学

・観光と暮らしの課題と適切な関係性、新倉・下吉田エリアの将来像(景観や駅前広場の活用等)の提案を展示。
・慶応大学との連携事業を東京大学が引継ぎ、取り組んでいる。
・来訪されていた学校法人月江寺学園山田理事長からは、人口減少、特に若者の減少は共通の課題である。また、地元に戻ってきても就職先がなく、生活がままならない。しかし、就職等で戻ってくるのではなく、戻ってきた若者が自らの力でやりたいこと、できることを実践していくような育成をしていきたいと話されていた。

③NPO 法人かえる舎「超かえる組」との交流及び FW、互いの活動事例等を共有
コーディネーター：NPO 法人かえる舎 代表理事 斎藤 和真 氏
＜富士吉田市内のフィールドワーク＞
富士吉田市上吉田地域を巡り、富士山信仰等の文化について学ぶ。
〇北口本宮富士浅間神社
・富士山信仰と富士吉田市の文化について学ぶ。
・富士信仰の中心であり、富士山世界文化遺産の構成資産でもある。
・8月末に行われる鎮火大祭は、服が溶けるほどの熱量があるため、松明が設置される道には、電線はない。
・そのほか、富士山大鳥居等の由来や街の模型を使った説明をしていただいた。
〇センゲンボウ
・NPO 法人かえる舎及び高校生の交流・地域づくり活動拠点
・市の指定管理施設であり、かえる舎が指定管理者として受託している（7年目（5年更新））。
・元々は、御師（おし：神職であり富士山の参詣者に宿坊を提供した人々）の住居であったが、市が高校生の交流及び地域づくりの活動拠点として活用。
・リノベーション及び管理は、主に高校生が行っている。
・施設利用は、市の条例で高校生、大学生に限定している（高校生のための活動拠点であるため、主になる高校生が使えなければ意味がないため。）。また、小中学生に拡大すると管理が難しくなるため、今のところ予定はない。
・かえる舎は、初めは市内にある富士北稜高学校から始まり、現在は市内3校と市外1校で活動している。
・現在、小中学生にかえる舎の取り組みを紹介する活動もしており、8年目で中学生との交流事業が実現した。
＜NPO 法人かえる舎「超かえる組」と共に市内をフィールドワーク＞
ビンゴを使用して、富士吉田市の文化、オーバーツーリズム、空き家の活用等の近年の変化について学ぶ。今回視察した場所全て、市が主導またはバックアップして取り組んだ事業である。
【視察場所】
▸FUJIHIMURO
・ふじよしだ移住定住促進センターの拠点施設。
・2013 年から慶応大学連携等様々な取り組みが始まった場所。
・現在は、ギャラリー、お試し移住体験施設、コワーキング、保育園、ブルワリーの複合施設となっている。
・施設管理は、you FUJIYOSHIDA が行っている。
・FW 当日は、施設内で地域おこし協力隊馬場氏が「ここどこ展」を開催しており、別の部屋では「氷室どよう市」も開催していた。
▸富士山下宮小室浅間神社
・ハタオリマチフェスティバルの会場の一部。
・10 月～12 月の閑散期に観光誘客を目的として、市が企画、開催しており、かえる組も毎年出店している。
▸本町通り
・インスタグラム公式がこの商店街で撮影した写真がきっかけで観光客が急増した。
・観光客はこの2、3年の間に急増し、オーバーツーリズムとなっている。
▸SARUYAHOSTEL
・富士吉田市にあるゲストハウスのひとつ。
・美容室だった空き家をリノベーションして活用しており、カフェやコワーキングスペースも運営している。
▸ハモニカ横丁本館
・かえる舎が最初に取り組んだ場所。
・皆が集える場所を作るために、街の工務店の協力を得ながらリノベーションした。
・現在は、移住者の短期的な住居として貸し出している。
▸新世界乾杯通り
・織物の衰退と共に、衰退していった飲屋街。
・若者たちによる復活プロジェクトにより、2015 年に復活した。

＜お互いが取り組んでいる事例の共有＞

〇きらくまの取り組み

・上浮穴高校の紹介映像の作成
・久万高原町のPR動画の作成
・先輩たちが開発したスパイスを使用したディップの開発

Q1：テーマが自由なところが印象的だったが、どのようにテーマを決めているのか。

A1：チームで話し合いながら決めている。決まらないときは全く決まらないが、思いついてすぐに決まるときもある。

Q2：発表を聞いて地元愛があると感じたが、どうか。

A2：県外出身である自分たちが地元の良さを広めることができることはいいことであり、結果的に学校の良さもアピールできていると思う。

〇超かえる組の取り組み

・道の駅富士吉田と連携し、名産品のリーフレットの作成と取材したいちご（富士夏媛）といちごジャムの出張販売を行う。
・富士吉田市ふるさと納税寄付者と市民の交流イベント及びワークショップの実施。
・電車内の中吊り広告に、富士吉田市の織物を使用した観光情報を発信（英語版観光案内サイトのQR コードをプリント）。
・外国人観光客向けガイドブック「商店街お助けキット」を作成、配布。
・「吉田のおにぎり」の開発。
・最後に、卒業した「あべいとみなみ」から、想いを伝え、活動を受け継ぎ残していくことが支えてくれた仲間への恩返しと思っている。また、今度は自分たちが支える側となるため、教育関係に進学することや地域コーディネーターとして富士吉田市に戻ってきたいなどと話した。

Q3：超かえる組は、テーマをどのように決めているのか。

A3：ワークショップで決めている。単語帳に市の魅力や課題を書き出し、そこからテーマを決めた時もあった。

Q4：超かえる組からかえる組に変更は可能か。

A4：可能。冬頃からもっと地域づくりしたい等の意見を聞き選定している。

Q5：「吉田のおにぎり」の宣伝方法はどのようにしたのか。

A5：主にイベントで直接地元の人に販売して宣伝した。スーパーで作成した歌を流して宣伝したこともある。新聞やニュースに取り上げられた効果もある。

Q6：週に何回活動しているのか。

A6：週1～3回。放課後に活動している。土日はあまり活動しない。「吉田のおにぎり」の開発時は、週3回、3～4時間活動し、4～5か月で販売にこぎ着けた。

Q7：チラシ等が見えやすいが、デザイナーはいるのか。

A7：かえる組のチラシは、テンプレートをかえる舎側で用意。超かえる組は、全て生徒が作成する。

Q8：学校とかえる組の比重はどれくらいか。

A8：学校は1～3割、かえる組は7～9割。学校での学びは大切と思うが、プレッシャーや苦痛を感じることがある。かえる組は、成績等の評価はなく、自由でやりたいことができて楽しい。また、答えがなく、答えを作っていくことができる。学校では学べないことを学ぶことができる。どちらも半々と答えた生徒は、学校とかえる組で学んでいることはどちらも繋がっているし、自分のためになっていると回答した。

斎藤氏

・活動する年によって、生徒へのアドバイスややり方を変えている。今回交流した超かえる組は、先輩たちに憧れて入った生徒たちのため、これから少し変わってくると思う。
・市が様々な場面でかえる舎を支援してくれている。生徒たちが駒や使い捨てにならないよう、企業等の依頼も選別している。そのため、生徒たちの活動チャンスを逃しているとは思うが、そのおかげで純度の高い状態が保てている。現在は、この活動を継続するために動いている。

共通課題や、その地域固有の課題、お互いの活動内容等を情報共有しつつ、折を見て運営側の視点でも学ぶことができた。また、フィールドワーク等を通じて、RMO の活動に活かせるもの以外にも、派遣者や生徒自身が活かせるものを見つけることができたと話していた。派遣者からは、大変充実した視察になったという感想をいただいた。

・NPO 法人かえる舎　代表理事　斎藤　和真　氏
　　〃　　スタッフ　渡辺　紀子　氏
・山梨県富士吉田市ふるさと創生室ふるさと魅力推進課　課長　堀内　淳　氏
　　〃　　主幹　秋山　眞一郎　氏
・山梨県富士吉田市地域おこし協力隊　馬場　涼可　氏
・学校法人月江寺学園　理事長　山田　寿紀　氏

2　出席者
　一般社団法人ゆりラボ　矢野　奈美　氏
　　〃　放課後ラボ担当　山地　範明　氏
　（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループアドバイザー　山岡　藍子

実施の様子

参加者アンケート

RMO 名	一般社団法人ゆりラボ
参加者（回答者）氏名	矢野　奈美

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

○　地域活動を展開している高校生同士の交流は、大変意義深いということ！
・お互いが刺激し合えるし、尊敬し合えて、明らかに活動への意欲が高まっている。
・環境も活動内容も違うけれど、課題感やぶつかる壁は同じ。
・フォーラムで「あべいとみなみ」に出会った衝撃から始まった交流企画で、「学ばせていただく」スタンスだったが、交流してみると同等であることが分かり、安心と自信が生まれた。
○　地域の魅力について
・フィールドワークで富士吉田の歴史・文化・自然・産業等についての特徴と魅力にたくさん触れることができた。また、それらの伝え方や楽しみ方も（ビンゴ形式）大変参考になった。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

○　地域の魅力を発信するリーフレット作り（高校生からも「やりたい！」の声あり）。特産品や商品について取材し、共通のフォーマットで作る。
○　まちに出て聞き取り調査等をしてから地域課題を見つけ、活動内容を考えていくプロセス。まちと共にある活動にしたい。また、このプロセスを通してコミュニケーション能力も身に付く。
○　外部からの支援を得るためのプレゼンやミーティングを高校生自らが行うこと。これまでは大人がお膳立てしていたものを、ある程度高校生に任せてみる。
○　卒業パーティーなど、メンバーの親睦を深める企画。

Q3　先進地と比べて、自らの地域での活動の方が優れているものを教えてください。

○　高校生のチームワーク、見守る大人のチームワークを、斉藤さんに大変褒めていただいた。また、10 月に発表を見ていただいた時から随分と成長をしているとも。
私たちの方が活動を見守る大人の数が多く、それぞれが個性的でそれぞれの個性をお互いに理解している。考え方の違いはあるものの、それぞれがそれぞれの信念のもとに活動していることを尊重し合えている。
○　活動時間（かえる組：週2～3回×3～4時間、きらくま：週1回×2時間）の割に、成果が上がっている。動画に関しては、帰宅後の自分の時間を割いたことも多かったとは思うが、2年の間に質の高い動画が何本もできている。

Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。

本当に有意義な3日間だった。特に 2 日目は内容が濃すぎて、1 日を 2 日にも 3 日にも錯覚するほどだった。観光の文脈でも大変充実していたし、高校生の地域活動の文脈でも、アイデアや活力がどんどん湧いてくる状態に、高校生も大人も興奮が冷めない。

前々から、高校生同士の交流の場があれば良いなとは思っていたが、今回いかに意義深いものかを確信したので、年に 1 回遠征または交流ができたらと考えている。また、その旨を高校生に提案したところ、早速「三崎高校に行きたい」という意見が出た。また、かえる組とのつながりも続けていきたいという声もあった。高校生が地域の大人と関わることも大変意義深いが、熱を持った高校生同士の交流は爆発的なエネルギーを放っていた。

広い世界を知った上で、目の前の課題に取り組みたいものだ。Think globally, act locally.
（三崎高校勤務時代、この手の研修参加はオーディション形式にしていた。オーディションでないにしても、目的意識と責任感を持たせる工夫は必要だと感じている。）

RMO 名	一般社団法人ゆりラボ
参加者（回答者）氏名	山地　範明

Q1　今回の先進地派遣先で学べたものを教えてください。

高校生が地域づくりをするためには「理解者」が必要である。地域住民、教員、自治体など。しかし、本校の取組と同じく、初めから応援してくれる人は少ない。人との関わりを継続していくことで、少しずつ理解してもらう。この構図は、どの地域でも同じであることを感じた。また、かえる舎の代表　斎藤氏をはじめ、高校生が地域に純粋な「愛」を持っていると感じた。この愛が地域づくりをする核となり、高校生が主体的に創ろうとする原動力になるのだと学んだ。「かえる舎の活動は市役所の支えが無ければ成り立たない」と斎藤氏が繰り返し言っているのが印象的であった。学校や行政は成果物を求めがちであるが、富士吉田市役所は、かえる舎が伸び伸びと活動できるように、そして、生徒が発案した地域づくり案を実現できるように、かえる舎と連携したいという企業を断っている。高校生による地域づくりの目的は、地域が活性化することだけではなく、高校生の内面の成長や、高校生の地域愛の醸成やＵターン人材の育成であることを学ぶことができた。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

具体的な地域づくりの活動ですぐに生かせる内容が三つあった。一つ目は「フィールドワークビンゴ」である。今回のフィールドワークは、単に地域を周るだけでなく、ビンゴを用いてゲーム感覚で楽しめるように工夫されていた。ビンゴは、フィールドワーク中に出会えそうな「猫」「外国人カップル」「商店街」などを見つけたら数字を折れるようにしていた。二つ目は「従事者リーフレット」である。富士吉田市で働く人を取材して、1枚のリーフレットとしてまとめていた。この活動を通して、市内の働く場所を広報できるだけでなく、高校生が市内の働く人を取材して、地域の魅力を発見することにもつながる。三つ目は地域づくりの進め方である。かえる舎の地域づくりの進め方の特長が、フィールド調査を行うことである。地域の人のみならず、外国人環境客に対して質問を行い、そこから課題を見つける。より客観的で現実的な課題をどのように解決していくのかを考えて実行している。
きらくまの活動でも1年生に対して、また、小中学生などに対して、楽しいフィールドワークを考えたり、課題の見つけ方を工夫したりして、活動をアップデートしていきたい。

Q3　先進地と比べて、自らの地域での活動の方が優れているものを教えてください。

農林業などの第一次産業である。久万高原町は農業や林業が盛んであり、特に人工林を用いた杉の出荷が多く、県内外から久万高原町の杉を求めて来る。富士吉田市は第一次産業の利益が市の全利益の 1.1 %しかないという。先進地と比べて久万高原町の強みは第一次産業であると考える。しかし、第一次産業従事者は毎年減っている。久万高原町の地域づくりの一つの方法として、第一次産業の活性化が挙げられると思う。そして、きらくまとして、高校生ができる活動を考えていきたい。

Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。

富士吉田市に到着したとき、富士山の景色に圧倒された。富士吉田市といえば富士山である、と誰しもが自信を持って言えるだろう。これを、久万高原町に置き換えてみる。久万高原町といえば何か。先日、90 歳の地域住民に「久万高原町といえば」聞いたところ「何もない」と回答された。生徒に聞いても「雪」「山」など、他の地域でも言えることを答えられた。地域住民が久万高原町の魅力を見つけられていないと感じた瞬間だった。
それならば、地域に住む若者が地域の小さな魅力を見つけて（作って）、発信していけば良いではないか。そんな思いで始めた「きらくま」という高校生の地域づくりプロジェクトチームは、少しずつ地域や教員の理解を得ながら活動ができるようになってきている。そして、かえる舎の視察を通して、大いなる刺激を受けるとともに、きらくまの活動は間違っていないのだと実感することができた。
今回の先進地視察は生徒・大人ともに刺激を受けられる事業であった。是非、来年度も応募させていただきたい。

○プラットフォーム・研修派遣

日付	派遣 RMO	研修先	参加研修等
R6.11.21(木) ～23(土)	横林自治振興 協議会	鳥取県日南町	(一社)地域活性化センター主催「中山間地域のモデルを創るまちづくりの実践～森林資源を活用した SDGs×官民連携による創造的過疎のまちづくり～」

1 概要

プラットフォーム構築事業・研修派遣で、(一社)地域活性化センター主催の地方創生実践塾に西予市横林自治振興協議会の役員2名を派遣し受講いただいた。

鳥取県日南町は山陰地方で古くから行われている玉鋼生産の過程で必要となる木炭生産のために植林されてきた山林を、林業だけでなく、木材を工業製品化するLVLにいち早く着目し、地域経済を潤す取組みを続け、さらに昨今の SDG,s の取組みを地域経済に循環させるカーボンクレジットの取組みを町行政主導で進めるなど、衰退する日本の中山間地域のモデルとなり得る取組みを行っており、同じ森林資源を活用した地域づくりを進めている西予市野村町横林地区の今後の取組みに大いに刺激となるカリキュラムであった。

<u>11 月 21 日(木)</u>

開講式

講義① 森林資源を活用したSDGs×官民連携の創造的過疎のまちづくり事例紹介
日南町まち未来創造課 主幹 荒金太郎氏

講義② 「伐って、使って、植えて育てる」循環型林業の取り組み
日南町森林組合 組合長 木村実次

講義③ 林業人材の育成・確保、森林資源を活用した地域価値の創造
にちなん中国山地林業アカデミー専任講師 小菅良豪氏

<u>11 月 22 日(金)</u>

フィールドワーク①
株式会社オロチの事業概要説明、LVL製造工場内の見学
株式会社オロチ 代表取締役 相見晴久氏

フィールとワーク②
白谷工房の事業概要説明、寄木細工ワークショップ
白谷工房 代表 中村建治氏

講義④ 日南町×山陰合同銀行における脱炭素の取り組み
ごうぎんエナジー株式会社 営業戦略部 副部長

講義⑤ 脱炭素まちづくりカレッジ
美保テクノス株式会社 安全環境本部 洋谷友子氏

<u>11 月 23 日(土)</u>

フィールドワーク③

株式会社ウッドカンパニーニチナン見学
株式会社ウッドカンパニーニチナン　代表取締役　秋末光司氏
ふりかえりグループワーク

2　出席者
横林自治振興協議会　周藤　功治
〃　　蒔苗　圭輔
（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりGチーフアドバイザー　田村　政幸

実施の様子

参加者アンケート

RMO 名	横林自治振興協議会
参加者（回答者）氏名	周藤 功治

Q1 今回の研修派遣で学べたものを教えてください。

〇地域資源を活用した取り組み。
〇民間企業との連携を生む絶妙な取り組み。
〇全国の中山間地が似たような状況の中、「日本の 30 年後」と謳い、過疎研究のフィールドと大学機関や企業に対し、着目させた視点。
〇SDGS という時代の要請をいち早くとらえ、町の資源である森林の持つ多様な機能の発揮も見据えた「SDGs 未来都市宣言」の取組等、国や県、民間からの支援を待つのではなく、自分たちの町が社会に果たせる役割を発信されている取組。
〇常に、未来を見据えた視点があるからこそ、いち早く施策を展開され、そこで新たな価値や産業を創出されていることに、驚きと学びの多い研修となりました。

Q2 自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。

〇当地域でも、原木椎茸栽培を起点とし、循環型農業、地球に優しい取り組みといった新たな活動を展開しようとしております。今回の日南町の取組は、産業まで創出されており、発信と民間企業等の連携は、大いに参考にさせていただきたいと思っております。
〇林業アカデミーの取組では、森林教育にも取り組んでおられるとともに、日本の林業の担い手を育成するという懐の深い姿勢に感銘を受けました。当地域でも、児童生徒を対象にした「へらぶな塾」という教室を開催していますが、『自分の故郷を語れる』ような子供を育てていきたいと思っています。
〇SDGS のワークショップは、近い将来地域でも開催し、地域住民へも持続可能な地域づくりに向けた取り組みを考えていただく、きっかけにしていきたいと思います。

Q3 研修講師のうち、再び指導いただきたい講師とテーマを教えてください。

〇美保テクノス株式会社安全環境本部－洋谷 友子さん
『SDGS に向けたカードゲーム型ワークショップ』
〇にちなん中国山地林業アカデミー―小菅 良豪さん
『人材育成と担い手づくり』

Q4 今回のご感想など自由にご記入ください。

今回の実践塾には、同じ中山間地に住む人間として、単に支援を待つのではなく、中山間地の持つ機能を発揮し、社会にも有益な取り組みを創造していく学びが得られればと思い参加しました。
今回の研修では、実際に創造的過疎を念頭に、人口減少社会を受入れ、過疎の中身を創造的に改善していき、新たな産業まで創出されていた現場を目の当たりにし、非常に勇気が持てました。
あきらめず、自分たちの存在意義や有用性をしっかりと伝えることで、企業や人と繋がり、共有や共感の和が広がることで、また新たな価値が生まれていく・・・。
現在の構想をもう少し磨き上げ、連携や未来への志向を基に、これからの地域づくりも進めていきたいと決意を新たに努力していきたいと思います。
参加させていただき、本当にありがとうございました。

RMO 名	横林自治振興協議会
参加者（回答者）氏名	蒔苗 圭輔

Q1 今回の研修派遣で学べたものを教えてください。

林業団地では、木材の伐採から加工、販売、さらにはバイオマスエネルギーの活用まで、一連の流れが効率的に構築されていました。特に、地元住民と企業が協力し、環境負荷を抑えながら収益を上げている点が印象的でした。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。
寄木細工のように、もとは捨てられるものだったものがアクセサリーなどの商品になり、さらに雇用まで生まれていることに驚きました。 今までゴミとして扱われていたものが加工することで価値あるものに変わる可能性もあると考えると、横林地区内でも何かそういったものを探してみようと思いました。
Q3　研修講師のうち、再び指導いただきたい講師とテーマを教えてください。
企業の取り組みは規模が大きすぎて現実味がなかなか感じられなかったので、個人でも取り組めそうな持続可能なまちづくりをしている人の話を聞いてみたいと感じました。
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
地域資源を最大限に活用し、住民の力を引き出す日南町の取り組みは、課題の多い地方でも可能性が広がると実感しました。 ただ、町規模での取り組みになってくるので一地区だけでどうこうできる規模ではないなとも感じました。

○プラットフォーム・研修派遣

日付	派遣 RMO	研修先	参加研修等
R7.2.28(金) ～3.2(日)	みらいの関川を考える会	島根県益田市	益田市のひとまち集会実行委員会主催「ますだ　ひとまち集会 2025(やってみたいが生まれるまち。やってみようを応援するひと～地域も学校も　みんなでつくるまちを目指して～」

1　概要

今回参加した集会は、事例紹介や対談を聞くだけではなく、参加者同士が意見交換や実施してみたいこと等を話す時間が多く設けられていた。そのため、参加していなければ関わらない方々と交流する機会となり、派遣者も同じ立場の方と意見交換することができていた。また、事例紹介にあったイベント(わいわい広場)を事前に視察していたことで、身近に感じることができ、今後のみらいの関川を考える会の運営等の参考になればと思う。

今回参加した集会には、愛媛県南予教育事務所の職員も参加しており、西予市田之筋地域づくり活動センターも地域づくりに力を入れていることや、西予市は、公民館機能を残しており、活動等はある程度把握しているが、大洲市は公民館を完全に切り離したため、現在、社会教育として関わってない等の話しを聞くことができた。

日　時:令和7年2月 28 日(金)～令和7年3月2日(日)
派遣先:島根県益田市
研　修:ますだひとまち集会 2025

【1日目】
7:30　tiliki 出発
8:10　JR 松山駅出発
9:34　JR 伊予三島駅出発(園部氏と合流)
14:30　JR 益田駅到着
【2日目】
9:30～12:00　イベント(わいわい広場)及び益田市内を視察
13:00～17:15　ますだひとまち集会 2025 へ参加
17:30～　　交流会へ参加
【3日目】
8:44　JR 益田駅出発
13:52　JR 伊予三島駅出発
15:17　JR 松山駅到着
15:40　tiliki 到着

○わいわい広場の視察(益田市立市民学習センター前広場)

様々な世代の「やってみよう！」から生まれたイベント。受け取るだけのサービスではなく、必要なものはみんなで持ち寄り、楽しい時間をつくっていくことをコンセプトに実施している。

イベントで作る食べ物の材料やイベントに使用する道具等は、全て参加者の持ち寄った物のみで、金銭のやり取りは全くなかった。たまたま立ち寄った人にも声を掛けており、立ち寄った人も自然とイベントに参加し、交流する場所となっていると感じた。また、大人が中心ではなく、子ども達が積極的に動いている印象を受けた。

○来ぶらりマルシェの視察（益田市立図書館）

島根県益田市教育委員会協働のひとづくり推進課が、図書館の利活用の促進と市民団体に活動の場の提供し、市民団体の横のつながりを作りながら図書館を核とした交流の場を構築するという目的で平成 28 年から毎月第1土曜日に実施している。

今回参加する「ますだひとまち集会 2025」とは別で実施しており、フリーマーケットや手作りのアクセサリー等を販売していた。

このマルシェも地域の人が交流する場となっており出店者と訪れた人が談話している姿や、図書館へ来た人がブースを眺めている様子を見ることができた。

●ますだひとまち集会 2025（益田市立市民学習センター）

参加者：約 300 人

テーマ：やってみたいが生まれるまち。やってみようを応援するひと。～地域も学校もみんなでつくるまちを目指して～

（分科会4）

事例発表①　参加者ではなく、参画者に。みんなでつくる「わいわい広場」

発表者

NPO 法人おむすび　　岩坂 菜月　氏

益田市立益田東中学校3年　　南　目蓮　氏

・毎月1回開催している「わいわい広場」を始めた経緯やイベント中に困ったこと、開催するごとに変化していったこと、参加者から参画者になった経緯等について話された。また、地域で行うイベントは自由度が高く、特に益田市では自分がやってみたいことをすることができる土台がすでにできていたこと等を話された。

事例発表②　150 人集落に 1 週間で 3000 人！アートによるまちづくり

発表者：こっちの大山研究所　所長　大下　志穂　氏

副所長　薮田　佳奈　氏

・「イトナミダイセン芸術祭」を開催するに至った経緯や地域をどのようにして巻き込んでいったか等を話され、やりたい人が自然と集まってくることが地域づくりに繋がっていくと話された。

グループ対談

・3人程度のグループに分かれ、現在行っている活動やしてみたいこと等について話した。同じグループになった方からは、益田市の商店街の人達の交流の場を作りたいと、自身が経営しているホテルのレストランを会場に勉強会を兼ねた交流会を開催していること、今は企業も地域づくりに力を入れていると話された。

スペシャルゲスト

NPO 法人おむすび　代表　大畑　伸幸　氏

・主体的であることを取り戻すためには、自分が楽しいことをし、それを皆で行うこと。皆は大勢ではなく、自分と誰かの 2 人で構わない。自分自身がやりたいという気持ちを掘り起こすし、どう感じ、どうありたいかが大事であると話された。

（全体会）

モチヨルトーク（15 分×3回）

・3～5人程度のグループに分かれ、それぞれがやってみたいこと、活動してみたいことを話しながら参加者同士が交流した。参加者からは、公民館が主体となり地域の方々と一緒に行っている地域食堂の説明や、学校のイベントを公民館と共同で行いたい時、どのようにして公民館へ話しを持っていけばいいのか、イベントの周知方法について等現在活動していることやそれに対する疑問等を参加者同士で話していた。

対談　マスダノヒト×牧野篤氏×那須正裕氏

・「みんなでつくるこれからの教育」をテーマに、現在の社会教育や学校教育、今後の教育はどのように変わっていくべきか対談された。
現在の不登校は、選択的不登校が多く、学校に行かなくても学ぶ方法を選択できるようになっている。昔の学校は楽しいところ＝やりたいことがある場所だったが、今は生徒を管理する場所になっていると感じる。また、近年多様性が拡大し、学校にそのニーズに対応してほしいという声が高まっている。社会教育は、子ども達のやりたいことができるようにするためには、学校へどのようにアプローチをしていけばいいのか、子ども達を社会の作り手としてどう育てていくかが課題である。
・探求・総合的な学習は、相手の背後にあるものを想像する力を育てると共に、子ども達の知ることへの期待を高めることができるのではないか。また、その学習で関わった大人が魅力ある人生を語ることで、子ども達がその大人に憧れると共に、そこから気づいた地域の魅力や答えのない課題に対して、様々な発想や想像することにより、多くのことを学ぶことができるのではないかと期待していると話された。

2　出席者
　みらいの関川を考える会　園部　真理
　（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループアドバイザー　池田　桃子

実施の様子

参加者アンケート

RMO 名	四国中央市　みらいの関川を考える会
参加者（回答者）氏名	園部　真理

Q1　今回の研修派遣で学べたものを教えてください。
地域づくりはひとづくり。常にアンテナの感度をよくして、機会があればとにかく出ていき人と話すことが大切だと改めて感じました。地域づくりに関わる人はとにかくその人本人がとても元気よく、精力的に活動していて魅力的でした。モチヨルトークやその後の交流会でも公民館関係者とお話しすることもでき、公民館活動は地域に寄り添い、その地域にあったものをしていけば、地域と上手く連携できる可能性をまだまだ秘めていると思います。 また、人通りは少ないものの、大通りはバスの利便性もある半面、車が無いと不便等、どこか似たような風情を感じました。特に素晴らしいと思ったのは SNS などによる情報の発信力です。トークで一緒になった公民館ではインスタグラムで発信していたり、観光案内に関しても、ネットで検索するとすぐにおすすめコース（買い物コースや歴史散策などが徒歩〇分、バス停名などもわかりやすく明記されており、当日、どこへ行こうか？と思ったときに、すぐに行動できるような表記）や、夜神楽の情報などが出てくるなど、初めて益田市を知った人にもわかりやすい情報発信ができていると感じました。 分科会で、「みんな」とは「2人」でもいいじゃないかという話があり、何かをするときに、とりあえずやってみよう、やりたいことを「わたし」がする、という主体性の大切さも学びました。行政機関は何かと確認事項も多く、できないと思われることもたくさんありますが、どうしたら出来るのかを一緒に考え行動する仲間づくりも今後は必要だという気持ちを強くしました。
Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせると思ったものを教えてください。
地域の情報発信に力を入れること。 伝統楽器や地域特有の桜などについての情報を簡単なパンフレットにまとめて、来訪客に わかりやすく説明できるようにしようと思います。地域でも、まだまだ知らない住民もいるので、これを機に、自分たちに地域の魅力についても発信していけるように、様々な手法を検討したいです。すでに次年度に向けて、ふわっとしたビジョンはあるものの、まだまだ出来ていないことに少しずつ手を付けていこうと思います。
Q3　研修講師のうち、再び指導いただきたい講師とテーマを教えてください。
効果的な情報発信の方法や地域の魅力を伝え方。 公民館ができる地域住民の憩いの場の活用方法の事例。 「やりたい」気持ちの人が集うきっかけづくり。
Q4　今回のご感想など自由にご記入ください。
此度は貴重な機会をいただきありがとうございました。北海道から長崎まで約300名が集い、あれだけの熱量がある場に参加でき、今後の活動に向けての活力を頂きました。 団体で動くときは、どうしても「みんな」という一定の足並みをそろえる必要性の方へと 目が向いてしまいますが、できるだけ、「やりたいこと」を誰かがしようとしている時は、一緒にサポートできる体制づくりを心掛けていこうと思います。また、私個人としてもやりたいことがたくさんあるので、団体の活動とともに、もっともっとチャレンジしていこうと思います。出発から帰りまで池田さんには大変お世話になりました。また何かの機会があればぜひ参加させて頂けたら幸いです。

アドバイザーレポート

（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループ　アドバイザー　池田　桃子

「ますだひとまち集会」は、参加者同士の対話を中心としたイベントだったため、事例紹介や講師の話しを聞くだけではなく、参加者同士が意見交換や実施してみたいこと等を話す時間が多く、参加していなければ関わることのない様々な方と意見交換をすることができた。

意見交換時には、私と同じ、事業コーディネートの立場の方と意見交換することでき、公民館が管轄する地域規模による運営方法や課題等について話すことができ、また、事例紹介にあったイベント（わいわい広場）を事前に視察していたため、より意見交換時の内容を理解できた。

今後、プラットフォーム構築事業における「地域課題解決勉強会＆交流会」の企画・運営において参考となる場面も多く、特に参加者同士での対話の時間を設けることは大変有効であると感じた。

今回の集会には、愛媛県南予地域の社会教育・学校教育の関係者が多く見られ、熱心なことが伺えたので、公民館等を軸とした地域振興を考える自治体へのアプローチに生かしたい。

アドバイザーレポート

（公財）えひめ地域活力創造センター　地域づくりグループ　チーフアドバイザー　田村　政幸

島根県益田市の NPO 法人おむすび 理事長 大畑伸幸さんからのご案内を受け、以前から公民館を軸とした RMO 育成を進める四国中央市関川公民館にご紹介し、参加いただいた「ますだひとまち集会2025」は、多くの対話を生み出すアウトプットを重視する集会である。

参加者は、自らの取り組みを他者に語ることで取り組みや課題が整理され、別の参加者の全く新しい視点や活動事例に触れながら、お互いが次に取り組むべきものは何かを模索する。何が生み出されるか始めてみないと分からないこのイベントは、人を信じ、対話で生み出されるアイデアを肯定し合い、実現に向けた行動を応援するという益田の地域風土によって支えられ、「益田市ひとづくり協働構想」「益田市未来をつくる人づくり計画」という市の施策を、市民が自らの手によって事業化している点で画期的である。

社会教育施設でありながら地域づくりの拠点として機能してきた「公民館」を、いわゆる「センター化」する自治体がある中、社会教育の本旨である「ひとづくり」のため、公民館がその活動を通じて地域住民の底力を引き出し、自発的なまちづくり活動につなげることを期待する自治体にとって、益田市の取り組みをそのまま真似するのではなく、自らの地域にできることを自らが考えるための「仕掛けづくり」の参考としていただけると良いと思う。

○プラットフォーム・地域づくり課題解決勉強会＆交流会

日付	テーマ	内容・会場
R6.11.2(土)	生活インフラ （移動・買い物）	「生活インフラは地域で運営できるのか」 場所：みそぎの里（内子町）

1　概要

（1）実際どうなの？生活インフラ運営事例

①ミニスーパー豊茂(買い物支援)　10：10～10：50

◇発表者：大洲市豊茂自治会　顧問　藤淵 良子 氏

・ミニスーパー豊茂の設営経緯、利用した補助、運営状況、地域の反応等の紹介を行った。

②交通空白地有償運送(移動支援)　10：50～11：15

◇発表者：久万高原町 NPO 法人 TEtoTE 理事 山本 一人 氏

・NPO 法人の立ち上げ経緯と NPO を選択した理由、交通空白地有償運送の利用率と運営状況等の紹介を行った。

（2）パネルディスカッション「その課題、他人事ではありません。」11：25～12：30

◇ファシリテーター

愛媛県集落支援員・(一社)えひめ暮らしネットワーク

副代表　鍋島 悠弥 氏

◇パネリスト

大洲市豊茂自治会　顧問　藤淵 良子 氏

久万高原町 NPO 法人 TEtoTE　理事　山本 一人 氏

・参加者の自己紹介、運営事例の運営状況についての質疑応答、運営に携わっている人への給与等についての質疑応答等があった。

実施の様子

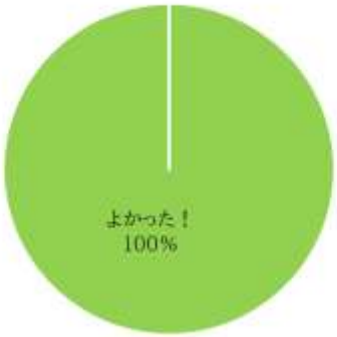
2　参加者アンケート結果

№	満足度	理由	要望等
1	よかった！	課題解決という目的は同じでも、財源確保手法の違いがある2パターンの事例を教えていただき勉強になりました。 ほとんど聞くだけで終わった印象なので、ディスカッション時間が多い方が学びが多くて助かります。 今回時間が足りなく感じました。	
2	よかった！	他地域の状況が良く判った。	今日は利用ありがとうございました。
3	よかった！	悩みを共有できたことで、勇気がわいた気がします！	
4	よかった！	NPO法人TEtoTEの報告について、まさに地元で10年前にやりたかったことを進めておられる事で、実行されておられる事に敬意を抱きました。その他、地域の困り事に取り込まれていて、過疎山間地には本当に参考になりました。	
5	よかった！	困りごとお助け事業について興味がありました。	
6	よかった！	色々なたちばの方と話せて良かった。	地域づくり人。またやって欲しい。
7	よかった！	今回の事例は、私が住んでいる自治体でも同じ課題を抱えているところが多いので、とても参考になりました。また、いろんな方々と繋がりができたこともよかったです。	これからも過疎、高齢化地域の地域づくりに役立つ情報を発信してほしいです。

満足度

よかった！　7

もう一歩！　0



総括

地域課題解決勉強会＆交流会の初回ということで、テーマ絞りから企画、会場選定、周知も手探りで進め、当日のテーブルレイアウトにも配慮するなど、小規模でリラックスしながらより深い意見交換ができるよう心掛けた。満足度は非常に高い評価をいただいたが、個々の参加者からの話を引き出すまでには至らず、やや時間不足を感じたため、次回以降の反省としたい。

○プラットフォーム・地域づくり課題解決勉強会＆交流会

日付	テーマ	内容・会場
R6.12.21(土)	空き家対策	「地域課題第１位「空き家対策」さぁどうする？」 場所：IYO 夢みらい館（伊予市）

１　概要

（１）事例紹介

◇NPO 法人空き家サポート伊予 代表理事 藤井 祐一郎 氏
◇伊予市移住サポートセンター「いよりん」代表 冨田 敏 氏
◇伊予市産業建設部都市整備課 課長補佐 坪内 悟 氏
◇伊予市地域おこし協力隊　隠岐 一徳 氏
◇伊予市企画振興部地域創生課 係長 城戸 敬考 氏

・伊予市における「空き家対策」を軸とした課題に対する、行政施策側と中間支援組織側の話を伺う。「空き家サポート伊予」は、空き家となる建物の価値が落ちる前に次へつなぐことを旨とし、運営母体である建設会社のノウハウを改築や修繕などに発揮できる強みを、「いよりん」は、代表自らも移住者であり、移住者のニーズを的確に把握し空き家をマッチングできる強みを生かしている。

（２）交流＆ディスカッション

◇ナビゲーター
（一社）えひめ暮らしネットワーク 副代表 鍋島 悠弥 氏
（公財）えひめ地域活力創造センター　チーフアドバイザー 田村 政幸

・参加者からは「空き家調査の地域住民で行うための調査費用の補助は？」「空き家の家主に手放してもらうための説得の実際は？」「空き家を流通させるための取組みは？」「空き家対策ネットワークづくりはどうすれば？」といった質問が寄せられ、それらに沿った事例などが紹介された。
・人口減少による空き家増加は、過疎地域に限らず空洞化著しい中心市街地においても起こっているが、そのような状況に対し、地域の人々（個人・法人）が「何ができるのか」「何を今すべきか」「どう連携すればよいか」を考える機会にしてほしい。

実施の様子

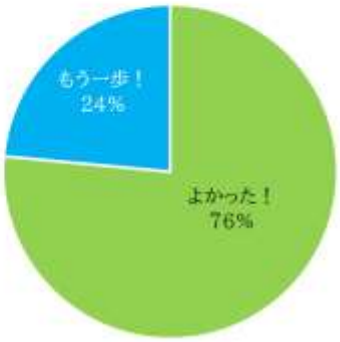
2　参加者アンケート結果

No.	満足度	理由	要望等
1	よかった！	内容が知れて良かったです	
2	よかった！	グループワークとかなくて、参加のハードルが低めで良きでした。	
3	よかった！	自分がこれからやることや、将来へのヒントが得られました。	
4	よかった！	冨田さんの活動事例が参考になった。	
5	よかった！	多様な立場の方からのお話が聞けて参考になりました。難しいテーマだと思いますが、地域にとって重要な内容だと思います。こりおり舎のコーヒー嬉しかったです。	
6	よかった！	他地域の取組状況や方法が判った。	
7	もう一歩！	全体的な内容は良かったですが，質疑応答の時間をもっと取ってほしかったです。	
8	よかった！	他市の事例を実際に聞くことができてよかった。今、自分たちの取組みで足りてないこと、やりたいこと、やらなければならないことが明確になった。南予以外のつながりができた。	コーヒーとても美味しかったです。南予でも開催してほしい。
9	よかった！	空き家に関して，さまざまな知識をもった方のお話や、他自治体の事例を聞くことができ、とても勉強になった。	
10	よかった！	地域アンケートで、まさに第1位の地域課題であった「空き家」のこと。まだどんなこおtに課題を感じているのか、取り組むのか・・・何も進んでいませんが、今日の話を聞いてヒントをいただけました。ありがとうございました^▽^	
11	よかった！	伊予市の具体的な取り組みを知ることができた。参加者の皆様が何に困っているのかなども知ることができた。交流&ディスカッションの時間でも、いろいろな話が聞けた。	空き家対策編の第2回をぜひ開催して欲しい。半日もしくは1日、例えば利活用している物件を会場に開催するのも良いと思う。
12	もう一歩！	後半の「プロセスが大事」という話が出ながら、ほぼほぼ結果についての話しか聞けなかった気がします。時間はかかるかもしれませんが、プロセスの話も聞きたいなと思いました。あと、質問が抽象的だったなって。なので答えも少し抽象的だったな。	
13	もう一歩！	アウトプット（思い、課題感の言語化）を先にして、その後に専門性や実践例れ応えていく、という流れが、より満足度（納得度）が高かったかと思います。	
14	よかった！	空き家の取組もしっかりと話していただき、対応、対策等、説明いただけてとても勉強になりました。	質問にも答えていただきありがとうございました。色々と勉強になり、参加できて良かったです。飲物も提供いただきありがとうございました。
15	よかった！	伊予市の具体的な取り組みについてお話しを聞けて参考になりました。ありがとうございました。	
16	よかった！	他市町の取り組みについてお話を伺うことができて大変勉強になりました。愛南町はまだまだなので、持ち帰りたいと思いました。	継続的に勉強会に参加していきたいと思いました。ありがとうございました、。（やっぱり遠いなぁ～というのが不安です。）
17	もう一歩！	時間が短い。空き家対策でも、使いたい側、対策する側など範囲が広いのでさらにテーマをしぼってもらえるといいと思います。	今後も研修、講演など期待しております。

満足度

よかった！　13

もう一歩！　4



総括

想定されるテーマが多岐に渡る地域課題であるが、概ね4人に3人は「よかった！」と回答をいただき、予想よりも高い満足度が得られた。また、「もう一歩！」と回答いただいた方の理由も、激励や提案が中心であり、次回以降の開催に向けて良いアドバイスをいただけた。勉強会＆交流会の趣旨を踏まえると、テーマはあまり絞らず、地域における課題対応の内容やレベルなど、想定される受講者のレンジを幅広くとって、参加者が互いに「気付き」が得られるような運営を心掛けつつ、プラットフォーム構築事業「専門家マッチング」など他の事業メニューの活用も含め、順次、モニタリングを重ねながら引き続きマッチングを図り、より満足度の高い運営を目指したい。

○プラットフォーム・地域づくり課題解決勉強会＆交流会

日付	テーマ	内容・会場
R7.2.14(金)	中間支援	「行政と住民の間にある「中間支援組織」とは」 場所：SAIJO BASE（西条市）

1　概要

（1）活動紹介　13：35～14：20

◇ NPO 法人西条まちづくり応援団

職員　伊勢 史菜 氏・髙橋 ひとみ 氏・伊藤 美桜 氏

・NPO 法人西条まちづくり応援団の活動内容、中間支援(地域活動)に関わった背景、今まで経験したことを中間支援にどのように生かしているか等を紹介する。

◇ 一般社団法人ゆりラボ　代表理事　板垣 義男 氏

・一般社団法人ゆりラボの設立経緯、活動内容を紹介する。

（2）各参加者の自己紹介　14：20～14：25

（3）ホンネトーク！リアルを語る　14：35～15：35

◇ NPO 法人西条まちづくり応援団　理事長　戸田 聖子 氏

◇ 一般社団法人ゆりラボ　代表理事　板垣 義男 氏

・中間支援に関することを参加者を交えて話す。

・ゆりラボが西条まちづくり応援団に関わった経緯、戸田氏が西条まちづくり応援団に関わった経緯、一般社団法人、ＮＰＯ法人の違い、行政と関わったことでメリットはあったか、各中間支援組織の資金確保、運営方法について、中間支援組織として活動するメリットはあるのか、人材育成について等の質問があった。

実施の様子

2　参加者アンケート結果

No.	満足度	理由	要望等
1	よかった！	細かい話も聞けてよかったです。もう少し時間が欲しかった。	引き続き色々な視点で研修、勉強会の開催をお願いします。
2	よかった！	中間支援組織の運営（人的リソースや人件費、メリット・デメリットなど）についてリアルなところが聞けてたいへん参考になりました。もっといろいろ聞いてみたかった。	次回も参加してみたい。このような企画や関連する企画に期待しています。ありがとうございました。
3	よかった！	法人を運営する上での悩み、実践例を聞けて大変勉強になりました。地域に持ち帰って、法人運営の面で役立てたいと思います。 ありがとうございました	
4	よかった！	聞きやすい雰囲気と人数がよかった（この間の伊予市の空き家対策は人数が多すぎて参加者同士の距離が遠かった。）	
5	よかった！	初歩的な事から、リアルな悩みのことまで細かく教えていただいてありがとうございました。	ちょっと飲みながら話せるような機会もあったらいいなぁと。
6	よかった！	中間支援組織を実際されている方々の考え方や実体験、ぶっちゃけ、相互質問など参考になった。	地域おこしを上手にされて、実行されている方々、考え方や行政の方の考え方と事業等（？）との実態。難しさについて聞いてみたい。

満足度

よかった！　6

もう一歩！　0

総括

2週連続2回の勉強会で企画していたが、前週の久万高原町「ゆりラボ」の開催が大雪により中止となったため、急遽、この回で「西条まちづくり応援団」と「ゆりラボ」の両方の事例紹介をいただいた。中間支援組織の運営の実際をリアルにお話いただき、中間支援を受けたい方、中間支援組織の設立を考えている方、中間支援組織の存在を初めて知った方々への学びや刺激の場となり、満足度も非常に高い評価をいただいた。

○プラットフォーム・地域×専門家マッチング支援

<table>
<tr><td>RMO 名</td><td colspan="2">かりとりもさくの会（申込者：事務局　二宮祥子）</td></tr>
<tr><td>支援メニュー</td><td colspan="2">法人化支援・組織運営支援</td></tr>
<tr><td>tiliki 担当</td><td colspan="2">（公財）えひめ地域活力創造センター　　田村　政幸</td></tr>
<tr><td rowspan="3">第 1 回</td><td>日時</td><td>令和6年8月5日（月）13:00～15:00</td></tr>
<tr><td>講師</td><td>安形　真（（一社）リズカーレ代表理事）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>●かりとりもさくの会・西村さん
・西予市、明浜町、狩江の紹介（西村さん）
・地域づくり交付金の説明（27 地域で総額 1 億円）
・かりとりもさくの会は 1817 万 4 千円
・20 年間で 35%人口減
・来年度の法人化に向け、法人化対応の協力隊を募集予定
・空き家改修作業（愛大社会共創学部学生の協力で）
・地域食堂などの運営開始
・段々畑ガイド
・修学旅行受入（体験・民泊）
・関係人口
・会をそのまま法人化するか、別組織として立ち上げるか。
・法人運営に職員としてがっつりかかわるのが困難なため、地域おこし協力隊を軸に運営してもらう目論み。
●（一社）リズカーレ・安形さん
・住民全員を会員とした場合、会員名簿の管理が大変。
・構成員をどうするか。全員を出資者にしてもらうとか。
・NPO 法人か一般社団法人か
・違いは NPO 法人は会員入会を原則断れない。
・社団法人は「社員」で構成され議決権あり。大まかに役員を社員として組織する。
・役員は充て職ではない。
・営利、非営利の違い
・NPO 法人の収益事業（40 万円以上）は課税対象
・将来やりたい事業の内容によって法人種類を検討
●RMO の法人化において、NPO 法人と一般社団法人との選択するポイントが何か。
・狩江地域を継続させる目的
●法人化しないデメリット
●法人化種類

15：00 終了</td></tr>
</table>

第2回	日時	令和6年9月27日(金)19 時 00 分～21 時 45 分
	講師	安形　真((一社)リズカーレ代表理事)
	内容	地域づくり法人立ち上げ検討会(第 1 回) テーマ「法人設立の是非について」 ・西崎　覚会長よりあいさつ ・安形　真さん自己紹介 ・委員自己紹介 <u>1　狩江での地域づくり法人の設立について</u> ・R5 売上約 430 万円(観光体験・修学旅行受入) ・利益約 40 万円、残高約 69 万円 ・任意団体のままでは信用上の問題が ・金銭管理も含め法人格を持つことが必要ではなかろうか。 ・法人化の在り方として「かりとりもさくの会」をそのまま「一般社団法人かりとりもさくの会」とするか、別組織「一般社団法人かりエンジン」とするか。 ・「かりとりもさくの会」令和 5 年度収支決算状況の説明 <u>意見交換</u> ・そもそも「かりとりもさくの会」はどの方向へ向かおうとしているのか(毛利さん) →地域活動のためにはある程度の収益が必要で、一方、地域活動と収益事業を一緒に運営していくことが難しいと感じるところもある。そのため収益事業に特化した組織が必要ではないかという現状での考え。(西村さん) →移住者が住む空き家の修繕に収益を充てて移住者増加を見込むことや、移動支援などを行うための事業原資にするとか、地域のためのお金を落とすための仕組みが必要ではなかろうか(西村さん) ・修学旅行の受入れが今後も続くのかどうか(薬師神さん) →八幡浜観光公社が窓口。再来年までオーダー受付済。当面は修学旅行生の受入れは続く予想。(西村さん) ・他に収益を上げる算々はあるか(西原さん) →ふるさと納税によるものを当て込んでいるが、それ以外に大きく収益を上げるものは現在なし。(西村さん) ・何を目指すのかがやはり大事。法人の組み合わせも可能。ふるさと納税による収益受入れは任意団体でも可能(安形さん) ・税務署に突っ込まれるのが心配。(大塚さん) ・ゆくゆくは整理する必要があろう。法人化により市との関係はどうなるか。市からの交付金はこれまでどおり出るのだろうか。(笠松先生) →出せるとの回答を得ている。(西村さん) ・そうなると住民合意をどのようにするかが課題。(笠松先生) ・住民さんをはじめ、ここの皆さんがどう考えているのかが大事。住民の合意形成も含め、この地域をどう回していきたいのか、その思いを出し合ってほしい。(安形さん) <u>2　法人化のメリット、デメリット(安形さん解説)</u> ※スライドを基に説明 (質問)

		・収益還元に関することについて ・一般社団法人の営利・非営利の決算分けについて 意見交換 ・方々に迷惑をかけないためにも法人化は賛成。一番の問題はだれが続けていくのかではなかろうか。それによっても法人形態を考慮しなければならないのでは。（毛利さん） →地域おこし協力隊に法人運営を担ってもらう構想あり（西村さん） ・かりとりもさくの会の情報公開の状況は？（安形さん） →総会資料を住民に配布。地域の外部には公開していない。（西村さん） 3 法人化意向確認 ・法人化に向けた意向に賛成か（西村さん） →西村さんがいることが前提にならざるを得ないのでは。（毛利さん） →役員変更のたびに定款変更必要。コスト増が課題では。（二宮さん） ・任意団体の「かりとりもさくの会」はそのままで、収益事業部分を法人の事業として推進するが良いのでは。（西村さん） →観光地域づくりの事業を別会社（法人）に持っていくイメージであったがあっているか？（薬師寺さん）→そのとおり。（西村さん） →「かりとりもさくの会」の事業を、「地域活動」と「収益活動」に分解し、法人として行う事業を整理・定義する。（安形さん） →社保加入など働く側のメリットを提供しつつ、インターンなどで優秀な学生を人材として確保するような仕組みはどうか。（笠松先生） ※概ね意見を出し尽くしたところで、西村さんより、今後、法人化に向けた検討会を続けていくことについて委員へ意向確認を行い、了承される。 （20:20 会議終了） 次回以降の運営についての意見交換（20:30～） ●地域法人としてのガバナンスの在り方を検討すべき（安形さん） ●無茶々園など地元リソースの存在や関係を踏まえ事業を整理し、地域法人の収益事業を定義するための議論に当事業を活用してほしい。（田村） ●（株）無茶々園と地域との関係について（西村さんからヒアリング済） ●安形さんにかかわっていただくポイント絞り（田村） ・ステークホルダーマップの作成 ・地域資源の洗い出し ・ビジョンの深堀り（総会資料をもとに笠松先生を交えて議論中。令和 7 年 3 月完成予定） ●ロードマップ（ストーリー作成、成果・ビジョン）を検討し、地域全体で共有することの方針を確認して終了（21 時 40 分） 次回予定 ・第2回地域づくり法人立ち上げ検討会：11/6（水） 講師：なし ・第3回地域づくり法人立ち上げ検討会：1/10（金） 講師：安形真さん 21:45 終了

第３回	日時	令和6年11月6日（水）19 時 00 分～20 時 50 分
	講師	― （第２回狩江地域づくり法人立上げ検討会として実施）
	内容	（出席者） ・かりとりもさくの会　会長　西﨑　覚 ・事務局　地域任用職員　二宮　祥子 ・事務局　地域づくり活動センター　係長　西村　吉仁 ・愛媛大学社会共創学部　准教授　笠松　浩樹 ・伊予銀行卯之町支店　支店長　宮西　俊光 ・古谷税理士事務所　古谷　佑一 （議事メモ） ●法人化の必要性（古谷税理士） ・法人化メリット（税負担軽減、信用力向上、管理明確化、事業承継のしやすさ、資金調達のしやすさ、人材確保）の説明 ●法人格の違いの説明（古谷税理士） ・株式会社、合同会社、NPO 法人、一般社団法人の主な違い ●一般社団法人の説明（古谷税理士） ・営利型だと全所得課税 ・法人税法施工例に定められている 34 業種にのみ法人税課税 ・最低２名必要（非営利型の場合は３名以上） ・役員任期は２年 ・非営利型の場合には定款に一定要件あり。 ・事前準備も含め３か月程度で設立可能 ・営利型、非営利型と共益的活動型がある。非営利型を目指すのであれば、事前に税務当局に確認した方がよい。 〇法人化の目的は金銭管理 〇一般社団法人を前提とした検討 〇5年先の経営シミュレーションをすべきでは（西原さん） 〇第４回（安形さん）は予定どおり 20:50 終了

第４回	日時	令和7年3月13日（木）19時00分～（2時間程度）
	講師	安形　真（（一社）リズカーレ代表理事）
	内容	狩江地区地域づくり法人立上げ検討会（第３回） ●前回の振り返り ・法人化すべきか　→　すべき（全会一致） ・事業シミュレーションの実施 ・法人の種類は一般社団法人がいいのでは ●協議 〇財務計画の説明 ・地域おこし協力隊をR7年度からR9年度まで受入れ予定 ・R10 年度から協力隊分の人件費を賄えるよう計画 ・協力隊は募集中。現在のところ未決定 ・R7 の手上型交付金に応募予定 ・修学旅行の受け入れに限界があることも踏まえ、客単価を上げていく必要はある。 ・ワーケーション場所に無茶茶園による廃校利用の部分で協力できる。 〇法人格の種類の決定（愛媛県中小企業団体中央会（鶴原・石本さん） ・南予地域で設立事例の多い企業組合はどうか。 →中央会より企業組合の説明（設立楽、中央会の支援が潤沢） ・メリットの多い「企業組合」設立で一致 ・定款に公益性・公共性を担保する工夫が必要 ・3月18日（火）のかりとりもさくの会理事会で決定 ●終了後 ・安形氏より、「中央会の説明には無かったが、企業組合の場合、「民泊」や「漁業体験」など地域で役務を提供する側が構成員となった場合、外注先とならず、併せて出資者であった場合の配当も含め税処理上の課題が考えられるので、税理士に相談してみては」との指摘。 ・法人形態は「企業組合」としつつ、出資者の範囲、地元役務提供者と企業組合役員と関係など、税務上の留意事項を踏まえつつ、定款において公共性などを担保し、RMO による企業組合設立を目指すことを確認した。

アンケート

RMO 名	かりとりもさくの会
支援メニュー	専門家マッチング
支援期間	令和6年4月1日(月)～　令和7年3月31日(月)
回答者氏名	西村吉仁

Q1　今回の専門家マッチングで専門家から学べたことを教えてください。

1. 法人化のメリット
法人化することで、社会的信用が向上し、大手との契約が可能になること。また、法人としての責任が有限であるため、個人のリスクを軽減すること。
2. 人材の確保
法人としての信頼性が高まることで、人材を採用しやすくなる。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせる(既に実施している)ものを教えてください。

よろず支援拠点や中小企業中央会への相談を行っている。
よろず支援拠点では、具体的な売上げ目標や数字の算出方法などを教えていただいた。また中央会には、企業組合のメリットなどをご指導いただいている。

Q3　今後、専門家支援により進めたい地域課題解決や地域事業があれば教えてください。

・法人設立後の経営コンサル。
・空き家の改修(お金をかけずに改修する方法)

Q4　本事業やえひめ地域活力創造センターへのご意見・ご感想など自由にご記入ください。

今年度も大変お世話になりました。
どの事業も本当に身になる事業で、大変助かりました。
先進地視察で学んだ事を参考に、体験パンフの作成と体験型ふるさと納税を 4 月からスタートさせます。
マネジメント講座では、同じ志を持つ同志からやる気をいただきました。
専門家マッチングでは、地域存続のためのお金の大切さを学びました。令和 7 年度中には法人設立できるよう準備します！
来年度もよろしくお願いします。

RMO 名	かりとりもさくの会
回答者氏名	二宮　祥子

Q1　今回の専門家マッチングで専門家から学べたことを教えてください。

1. 法人化へ移行するための情報や知識の取得できた。
2. 法人化をするための様々なサポート機関との連携ができた。
3. 検討委員会(住民)と地域の経済活動の意義や目的を再確認できた。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせる(既に実施している)ものを教えてください。

1　よろず支援拠点や中小企業中央会への相談を行った。
2　令和 10 年までの事業計画や数値目標を作成した。

Q3　今後、専門家支援により進めたい地域課題解決や地域事業があれば教えてください。

今後も法人設立にあたっての相談や、経営についての勉強会を進めたい。
商品販路拡大のための勉強会やサポート。

Q4　本事業やえひめ地域活力創造センターへのご意見・ご感想など自由にご記入ください。

この度は様々なサポートとアドバイス支援をありがとうございました。
今後ともよろしくお願いいたします。

実施の様子

○プラットフォーム・地域×専門家マッチング支援

<table>
<tr><td>RMO 名</td><td colspan="2">横林自治振興協議会（申込者：事務局　周藤功治）</td></tr>
<tr><td>支援メニュー</td><td colspan="2">横林地域農産品ブランド「霧源」のブランディング及びマーケティング</td></tr>
<tr><td>tiliki 担当</td><td colspan="2">（公財）えひめ地域活力創造センター　　田村　政幸</td></tr>
<tr><td rowspan="3">第1回</td><td>日時</td><td>第1回・令和6年7月31日（水）19:00～21:00（2 時間）</td></tr>
<tr><td>講師</td><td>cuddle　長尾　愛里（フードコーディネーター）</td></tr>
<tr><td>内容</td><td>18:56 開会
・井上謙二センター長あいさつ
・自己紹介（井上センター長、周藤補佐（事務局）、地域おこし協力隊　蒔苗さん、高橋さん、元協力隊　草葉さん、大麦さん、兵頭さん）
・講師の cuddle 長尾愛里さん　自己紹介
・原木椎茸「霧源」紹介ビデオ
・横林地域の現況説明（周藤さん）
・原木椎茸「霧源」の展開状況（蒔苗さん）
・生産者による生産現場の状況説明（高橋さん）
（横林からの希望）
・販路拡大、新たな担い手確保に関する学びを得たい。
・50 年先の横林住民の生活の糧となる取組みとしたい。
（長尾さんからの発言・提案・紹介）
・説明を聞くだけで大ファンになりました。
・「霧源」ブランドのポテンシャルの高さに驚きました。
・イメージビデオ、ロゴ、パッケージも完成しており問題ない。
・ただ、地域を少し離れると知名度が低い。
・販路拡大のお手伝いは十分できる。
（原木椎茸栽培農家・高橋さん）
・原木椎茸の生産量は年間5トン程度（生・乾燥含め）
・プレミアムは12月～2月が出荷時期
・一般的には路地栽培は春～秋（秋がメイン）
・プレミアムの販路は松山の料亭やホテルが中心
・売価は霧源プレミアム6～8個で 4,000 円程度
・原木椎茸の農協への出荷は全量買取のメリットがある一方で単価が安いため、農協には出荷せずほとんどが個人売買
・天候による収量の差があり、今年のプレミアムは収量小
・収量が少ないため営業活動が難しい（需給マッチング困難）
・プレミアム霧源はさておき、ノーマル霧源と上位レギュラー品の原木椎茸の販路拡大を画策したい。
・これまで都心部でのフェアに参加し、いい刺激になったが、バイヤーが求める収量に達しておらず、需要と生産量とのマッチングに困難さを感じた。
・生産量を拡大するのが大変。
・出荷のほとんどが乾燥椎茸となるが、横林に来て、例えばブドウ狩りのように、生の原木椎茸の美味さを味わってもらえるようなものが欲しい。
（長尾さんからの発言・提案・紹介）
・乾燥の原木椎茸パウダーが商品化されているが、消費者の動向は、すぐに食べられる加工品（ポタージュなど）の受けが良い傾向。
・ふるさと納税の返礼品としては、それらの加工品にプラスして原木生椎茸現物とセットすれば、受けが良いのではないか。</td></tr>
</table>

		・乾燥椎茸の出荷が多いが、生椎茸の販路開拓に力を入れてみてはどうか。例えば東予においては今治と新居浜は客単価が高い傾向であり、おそらく都心部での生活経験のある人が多いのが理由ではないかと思うが、今治のとあるスーパーマーケットでは、地場産品を意識した「ふりかけ」などの加工品が、他地域の市価より 150～200％の単価で売買されているため、これらの地域での取引を拡大してみてはどうか。（長尾で対応可） ・発送の手間をしていただけるのであれば、同様に、関東・関西の飲食店等への販路拡大もお手伝いできる。 ・加工品のバリエーションをもう少し増やせると良さそう。先程提案した原木椎茸粉末を使ったポタージュなど、消費者が調理する手間をかけなくてもよい商品が開発できれば良さそう。 ・加工品のバリエーションを増やせると、売り場のフェイス（陳列棚の面積）を取りやすくなり、手に取ってもらえる確率が高くなる。 ・横林地域で霧源ブランドの原木椎茸を味わえる場所はぜひとも欲しい。店舗で調理というよりも、最初は網焼きなどを手軽に味わってもらえるものとか、霧源ピザとか土日限定の展開はどうか。 （横林自治振興協議会事務局　周藤さん） ・加工品（パウダー）の販路拡大はありがたい。 ・営業、新規顧客獲得のノウハウを知りたい。 （原木椎茸栽培農家・元協力隊・草田さん） ・オフシーズンにあたる夏場の原木椎茸を生産。椎茸の原木を水に浸けることで、それをきかっけに椎茸が生育し、極めて短期に収穫が可能。 ・一般的には 120 円／kg 程度。生育が早いためプレミアム（生育に 1 か月以上）よりも肉薄ではあるが、通常の椎茸よりは肉厚。 ・生育が早いため収穫が大変だが、需要に応じて生産量の調整ができるメリットがある。 （原木椎茸栽培農家・高橋さん） ・規模維持の困難さはあるが、地域が前に向かっていくもの（今は原木椎茸）があって、それを基にして、地域の未来がつながってほしい。 ・収量・収益の安定は、担い手確保に最重要。 ・「霧源」ブランドは、原木椎茸だけでなく、横林で採れる農産物全体に展開できる。 （長尾さんからの発言・提案・紹介） ・霧源ブランドとしてパッケージするとき、色見のある農産物と一緒にすると、色見の地味な原木椎茸は映える。他の農産物は柿や柚子とのことだが、より「横林」を感じられるパッケージとして検討できるといい。 ・商品紹介資料の作成サポート可能（農水省スタンダードより上位） ・加工品の商品紹介資料の作成について、次回、現状のものをよりブラッシュアップできるよう支援 ・四村ショッパーズ（今治市）の紹介 21:04 終了

第2回 第3回	日時	第2・3回・令和6年9月26日(木)13:00～17:00(4 時間)
	講師	cuddle　長尾　愛里(フードコーディネーター)
	内容	13:00～ ・オフシーズンにあたる夏場の原木椎茸栽培園地の視察 ・冬場の原木椎茸栽培 ほだ場の視察 15:20～「売る」ためのアドバイス ・売買の形態に関する基礎知識(委託・買取の違いなど) ・手数料の例(販売価格決定に影響) ・販売チャネルの多様化について(多ければ多いほど) ○商談時に必要なものリストの説明 ・商品仕様書(商談シート)　※(有)良品工房の様式を参考に ・原材料産地証明書(生産者又は生産者組合が発行) ・賞味(消費)期限検査証明書(道の駅レベルでも増えてきた) ・賞味期限検査は保健所でも可能だが高い。民間の検査所(食品微生物センター)をおすすめ。 ・賞味(消費)期限は検査結果の 3/4 程度で設定 ・PL 保険証明書(生産者は取得済) ・営業許可証明書 ・見積書に記入すべき項目の説明(資料参照) ・パンフレットや POP ○商談後のフォローが大事という話 ・商談後に連絡がないのは「あるある」。そうなった「何らかの理由」をバイヤーから聞き出すことが重要。勇気をもって聞き出そう。 ○フリー質疑 ・消費期限の設定について ○「ちいたけ」のテストマーケティング(県内限定で) ・長尾さんへ小ロット卸してもらえないか ・包装の工夫をしてほしい ・クール便での発送費を含めた卸値を教えてほしい ○販路開拓について ・「飲食店」と「小売」　※ホワイトボード記録参照 ・信頼のおける取引先を少しずつ増やす戦略で ・加工品を増やせないか(パウダーだけでなくソースや出汁パウチ etc) (今後の専門家マッチング展開) ・霧源ブランドの方向性(商品像やブランディング)の検討を展開する。 ・「ちいたけ」のテストマーケティングの実施(10月中) ・生産しやすい「菊芋」の活用からの～　→新商品化・農地保全・椎茸と合わせた加工品開発 ・販売側から見れば、その土地でその土地の住民が生産したものであることが商品説明上有利に働きやすい。ブランディングの方針を探る上でも、ストーリー性は大事であり、所縁のない農産品の開発は再考した方がよいのでは。 ・4 回目は 12 月 11 日(水)に予定し、冬場の販売戦略をテーマに御指導を仰ぎたい。 ・5 回目は、地域ブランディングの方向性について確認する場としたい。 17:00 終了

第4回	日時	令和6年12月11日（水）16:00～18:00（2 時間）
	講師	cuddle　長尾　愛里（フードコーディネーター）
	内容	16:00～ ●商品開発手法や考え方 （考える） ・商品開発の流れについて ・まず考えること ・プロダクトアウトとマーケットイン （作る） ・「作ったものを売る」時の決まりごと ・製造場所について ・加工品を作るとき気を付けること （デザインする） ・「売る」デザインとは ・「地産品」のデザイン ・容器や包装も大事 ・デザインあるある Q 販売価格の決定タイミングは？ ・レシピ、製造原価、パッケージ原価が決定した段階 ・原価計算表を用いて算出 Q 霧源うまみパウダーへのアドバイス ・レシピがあるといい（QR コードでアクセス） ●冬場の販売戦略について ・令和 7 年 1 月 11 日～13 日イオンモール新居浜で開催の「西予市フェア」に出品（城川ファクトリーモンブラン・明浜ちりめんおにぎり・霧源原木椎茸・椎茸たたき） ・試食品として「椎茸のたたき」「戻し汁を使って寿司酢」 ・霧源椎茸のパッケージ ・プレミアムは強気で値上げしては？（値上げしやすいタイミング） ●次回（最終回）の件 ・周藤さんより、以前にマルブンの真鍋会長とのご縁がありながら逃してしまった旨の話を受け、長尾氏よりマルブンの真鍋会長のご紹介をいただくことと、アドバイスを受けてはどうかとの提案を受け、一同賛同。 ・後日、真鍋会長よりご指導いただけることとなった旨、長尾氏より連絡があり、R7.1.7 にマルブン小松本店を訪問し、真鍋氏にご挨拶の後、正式に依頼。 ・第5回は1月 30 日（木）に西条市小松町のマルブン小松本店をお借りして実施することとなった。 18:00 終了

第5回	日時	令和7年1月30日(木)10:30～13:30(正味 2 時間)
	講師	株式会社マルブン　取締役会長　眞鍋　明 cuddle　長尾　愛里(フードコーディネーター)
	内容	10:30 マルブン小松本店到着 ●生産者　髙橋征敏より ・霧源椎茸は無肥料・無農薬で育てており、人と生き物が共存できる里山づくりを目指している。 ・1個千円で霧源椎茸を売りたいが、その金額では売れないのが現状。 ・職人の高齢化等により、生産者が 10 名しかいないため、販路を開拓しても生産量が追い付かず、現状維持が精いっぱいである。 ●眞鍋会長からのアドバイス ・霧源椎茸の素材は一級品であるが、全国には同じレベルの物が数多くあるため、いかに突出(特別感を出)しているかが重要となってくる。 ・南予地方と久万高原町は食材に対するイメージが良い。 ・ターゲットや卸先は明確にすること。(どのようにブランディングし、どのような人に光を当て、どのような人に興味を持って食べてもらいたいか、どのような人に売り、どのような人に売らないか等) ・まずは、お客を知ることが大事である。 ・現地のものを現地でしか食べることができないという価値もある。 ・商品のファン作りが大事である。 ・商品を知ってもらう活動が PR である。広報＝PR ではない。 ・メディアを利用することが大事。地方はテレビの影響力はまだある。 ・その土地の歴史や雰囲気を感じられるものを絡めるとおもしろい。 ・行政や学生を巻き込むとなおよい。メディアも興味を持ちやすい。 ・成功すれば、後継者候補も出てくる。 ・農業経営者は、マーケディングや人材育成ができていないと感じることが多い。そのため、農業に関する技術の継承がされない。今からは、AI 等を使用し技術の継承も考える必要がある。ありとあらゆることを考えて実行していくこと。 ・美味しい物はどこにでもある。記憶に残る商品作り重要である。 ・全ては心折れずにやり続けることが大事である。 11:30 ランチ会 ●マルブン常務の真鍋剛志氏による調理 13:00 テストマーケティング報告 ●cuddle 長尾さんよりイオンモール新居浜店での実施報告 ・ディスプレイについては、霧源椎茸の現物があったため反応が良かったが、統一感が出なかった。ディスプレイをひとつのパッケージとして考え、バックに霧源椎茸や野村町の風景の写真や映像等があればなおよかった。 ・「椎茸のたたき」が大変好評であり、レシピを配布していたこともよかった。今後、商品化するのもありではないか。 ・売値も地域性がでるため、販売するエリアによって価格変更をすればいいのではないか。 ・飲食店で霧源椎茸を食べてもらい、近くのお店で売っていると宣伝をしてもらう等、飲食店と連携してもいいと思う。 13:30 終了

アンケート

地域運営組織（RMO）名	横林自治振興協議会
支援メニュー	法人化支援・ブランディング等に関する専門家派遣
支援期間	令和6年6月 27 日（木）～令和7年1月 30 日（木）
回答者氏名	周藤　功治

Q1　今回の専門家マッチングで専門家から学べたことを教えてください。

〇商品開発や販売活動といった経済活動に対するノウハウが全く無かった当組織にとっては、専門家を通じ商品開発の基本的な考え方、価格設定の手法を学ぶことができた。
〇当地域の加工品である原木椎茸パウダーについても、「全てを消費者に委ねる」現在の販売戦略では売れにくいと指摘いただき、時短で食べられて旨味を感じられる商品開発への提案までいただけたのは、今後の展開を進める上でも大きな参考になった。
〇生椎茸の販売強化や、ターゲット層設定におけるアドバイスも、様々な経験を持たれた専門家ならではのアドバイスであり、大変勉強になった。
〇地域づくり組織における商品開発等では、専門的な知識が無い中で、補助金等を活用しプロダクトアウトで進めてしまうが、『マーケットイン』の考え方を学べた事は、非常に有意義でした。

Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせる（既に実施している）ものを教えてください。

〇今回ご縁をいただいた cuddlie の長尾さんとは、今後もアドバイスを受けながら一緒に活動できればと、考えています。早速に販売活動において、協議中です。
〇第4回では、MARUBUN さんに食材を持込み、メニューの試作も実施していただきました。今後は、料理人の派遣もしていただけるとの事で、「地産外商」「地産知食」の取組も進めていきたいと考えています。
〇販路の開拓についても、実際にイオン新居浜店での販売活動を基にアドバイスいただきました。それを基にいただいた改善点等は、これからすぐにでも実践すべきものばかりです。誤った手法で世に広める前に、今回の事業を受けられたのは、幸運でしかありません。パッケージデザインにまでアドバイスいただき、感謝しかありません。
〇霧源ブランド規格の再構築や商品パッケージの改良。
〇ECサイトのデザインを霧源の世界観を取り入れたものへ変更。
〇加工品の原価計算を再度見直し、適正な販売価格の設定。

Q3　今後、専門家支援により進めたい地域課題解決や地域事業があれば教えてください。

〇農産物の販売活動や、人・モノの移動支援、農業の人手不足解消に向けた活動や人材の確保等、将来的には法人格所有に向けた活動へも専門家の支援を受けられると、大変ありがたく思います。

Q4　本事業やえひめ地域活力創造センターへのご意見・ご感想など自由にご記入ください。

〇今回の事業を通じて、専門家に事業に関わっていただく事の魅力や必要性を大きく実感しています。ただ、可能であるなら、事業の段階的な展開に即した専門家を派遣いただく等、伴走支援的な意味合いも込め、3年程度の継続事業で展開いただけたら大変地域にとっては、ありがたいなぁと感じています。

実施の様子

動画（YouTube）
西予市横林「霧源・原木椎茸 meets マルブン」

https://youtu.be/z30E2JhE_7U

○プラットフォーム・地域×専門家マッチング支援

RMO 名	みらいの関川を考える会（申込者：近藤和明）	
支援メニュー	未来を担う人材育成の仕組みと実践のための支援	
tiliki 担当	（公財）えひめ地域活力創造センター　　田村　政幸	
第1回	日時	第1回・令和 6 年 10 月3日（木）10:00～12:00（2 時間）
	講師	NPO法人おむすび　理事長　大畑　伸幸
	内容	●益田市ひとづくり協働構想を軸とした公民館における人材育成の実践 ・辺境のまち益田市の歴史と地勢→移住者やチャレンジを大事にする風土 ・関川地域の地勢・風土を生かすことが大事 ・子どもたちは、いろんな姿を持っている。（あたりまえ） ・「子ども」と「地域の大人」を引き合わせる活動。しかし学校ではできない（通り一辺倒の職場体験）。だったら・・・ ・体験活動（etc マッチ擦り）を思う存分やらせる活動などの紹介。力いっぱい、地域の大人と、地域の中で時間を共有することが、地域（ふるさと）回帰への意識が芽生えるはず。 ・「自立」とは、「何かがあったときに助けてくれる人が身近にいる環境をつくること」 ・地域の人づくりは、面倒でも、人情によっていざというときに支えられる環境をつくること。 ・「子どもと出会う」「子どもと一緒に動く」「子どもが自ら考える場をつくる」「子どもが自由に発想し、活動を支える風土をつくる」 ・公民館は「世代をつなぐ」活動に。いろんな大人と過ごす機会を作る。 ・もう一度、関川の子どもたちにできることを考えてみては。 ・大人の中に子どもがいることの効能（大人だけで新たなものが始まりにくいが、子どもの提案は取り上げてみようという雰囲気になりやすい） ・子どもは「大人の失敗談」が大好き ・対話はスキル。 ①　笑顔で大きくうなずく ②　ハ、ヘ、ホをつかう ③　深堀り質問 ・人の人生を垣間見る（子ども→大人）（大人→子ども） ・「地域の大人はどんな存在？」→「あこがれの存在」「仲間」益田の子ども談 ・自分の想いを形にできる・そして語れる子どもたちを育てる。 ・地域や暮らしの中での学びは、「教える」ではなく「やりたいことをやらせる」 ●関川でできることは何か ・子どもを担い手として、まちづくりの活動に取り込むこと。 ・小学校時代から上手に手なずける活動（あせらず、ゆっくり） ・子どもの「やりたいこと」を実現させるための活動 ・例示「草トーク」の話 ●質問・意見交換 12:00 終了 ●参加者 井上彰（顧問） 寺尾晴志（顧問）

		井上惠子 柿本敬子（事務局） 烏谷康恵 近藤博昭 鈴木孝義 園部真理（事務局） 髙橋英吉 辻本瑠美 深川信夫 藤田国広 松木謙二 山本大将（四国中央市地域振興課） 南未久（四国中央市生涯学習課） 篠原理子（四国中央市社会福祉協議会）

アンケート

地域運営組織（RMO）名	みらいの関川を考える会
支援メニュー	専門家マッチング
支援期間	令和6年10月3日（木）
回答者氏名	園部　真理
Q1　今回の専門家マッチングで専門家から学べたことを教えてください。	
これからの地域を支えていくためには、いかに子どもたちが地域への愛着を育てるかが重要ということを学びました。また、地域の一人一人が地域愛を持って、様々な活動を行うことが大切だということを改めて感じました。 特に当会では、地域の核となる場づくりを目標にあげているため、益田市における公民館の在り方などを、実際に手掛けてきた大畑氏の話を聞くことができ、非常に参考となりました	
Q2　自らの地域での活動にすぐに生かせる（既に実施している）ものを教えてください。	
子どもたちが地域づくりに関わる機会づくりとして、さっそく、11 月 10 日（日）公民館祭によける6年生のもちなげ体験や、光のイルミネーション事業における小学校のイルミネーションの飾りつけを児童・保護者にも参加してもらうなどを実施いたしました。 今後も、子どもがこの地域が好きを素直に言えるような体験活動や学びの機会を増やしていこうと思います。	
Q3　今後、専門家支援により進めたい地域課題解決や地域事業があれば教えてください。	
・人づくり（互いに支えあう生活パートナーシップ） ・災害時におけるゼロ・エネルギー推進活動による防災意識向上　など	
Q4　本事業やえひめ地域活力創造センターへのご意見・ご感想など自由にご記入ください。	
これまで、当会で進めていた地域づくりの場に関する考えが、大畑氏との座談会により、見直すきっかけとなりました。抱えている課題はどれも簡単に解決できる課題ではないため、右往左往しながらの活動ではありますが、新しい風を吹き込んでいただきありがとうございました。 また、当会では実施できないような研修なども、参加させていただき貴重な機会となっております。いつもありがとうございます。	

実施の様子

○集落サポート人材育成・地域づくりマネジメント講座

（1）　事業の内容

人口減少や少子高齢化の著しい県内地域における集落機能の維持・強化を図るためには、地域の実情を把握し、その状況に見合った効果的な集落サポートを推進できる市町職員及び集落支援員等の育成が不可欠となっている。

こうした現状から市町職員及び集落支援員等を対象に、地域づくりに関する実践的な研修を実施し、今後の集落機能を維持する仕組みづくりをサポートするためのマネジメント能力の向上を図るとともに、地域づくり関係者のネットワーク構築を推進する。

ア　時期　令和6年11月4日、11月30日、12月1日（3回）

イ　場所　第1回　愛媛大学城北キャンパス
　　第2回、第3回　西予市明浜町渡江集会所

ウ　対象　市町職員、集落支援員等

エ　内容　地域づくり有識者による講演、地域づくり関係者による意見交換や現地フィールドワークを通じ、条件不利地域における地域づくりの目指す方向性及び具体的実施内容について学ぶ。（データの分析・活用、計画づくりなど含む）

オ　実績

第1回 11/4（月） 場所：愛媛大学 城北キャンパス 参加者　11 名	○講演 愛媛大学社会共創学部　笠松准教授 『集落実態調査から見えてきた愛媛県における今後の地域づくりの方向性』 徳島大学大学院　田口太郎教授 『地域づくりってなに？どうサポートしていけばいいの？』 ○意見交換、各自意見取り纏め ファシリテーター　徳島大学大学院　田口太郎教授 各自意見発表 アシスタント　愛媛大学社会共創学部生
第2回 11/30（土） 場所：西予市 渡江集会所 参加者　6 名	○現地フィールドワーク① かりとりもさくの会、愛媛大学未完商店 ○事例発表『渡江地区における地域づくり活動の実践』 かりとりもさくの会　西村吉仁氏、二宮祥子氏 愛媛大学未完商店　榊原文太代表ほか５名 ○先進事例『久米南町「食」のサブスクリプションサービス』 中国学園大学　佐々木公之教授 久米南町　中村英之主幹 ○意見交換会 アシスタント　愛媛大学未完商店
第3回 12/1（日） 場所：西予市 渡江集会所 参加者　6 名	○現地フィールドワーク②　かりとりもさくの会、愛媛大学未完商店 ○全体振り返り ファシリテーター　愛媛大学社会共創学部　笠松浩樹准教授 各自意見発表 ○主催者挨拶 アシスタント　愛媛大学未完商店

参加者　延べ 23 名（3 回）

カ　実施概要

第1回講座

愛媛大学社会共創学部　准教授　笠松浩樹

講演『集落実態調査から見えてきた愛媛県における今後の地域づくりの方向性』

講演要旨

・愛媛県は条件不利地域に所在する集落・自治会および地域活動組織を対象に、5年ごとに集落の実態調査を実施。（2013 年・2018 年・2023 年）
・無住化（2013 年→2018 年　5 集落、2018 年→2023 年　3 集落）　機能停止（2013 年→2018 年　1 集落、2018 年→2023 年　3 集落）
・運営の転換点（自治会から地域運営組織へ）地域運営組織には老若男女に活躍と意思決定の場がある、特定の人に仕事が集中しない、リーダー群による役割分担がされている、テーマごとに部会などで責任と権限がある、革新的で新しいことの活動がある。
・事例紹介　だんだんおもご（久万高原町）、かりとりもさくの会（西予市）
・考察　支援の重点　①集落対策の前に就業・居住の充実を　②地域運営組織への支援に重点を移す　③地域活動組織で育むのは住民の自発性やアイデンティティ　④目的を指定しない交付金、分野連携など支援の方法を変える。

徳島大学大学院　教授　田口太郎

講演『地域づくりってなに？どうサポートしていけばいいの？』

講演要旨

・地域づくりは地域（集落）の改善を目指すこと。マズローの欲求段階を地域づくりに当てはめてみる、地域づくりのイメージはできているか、共有できているか、発展することが全てではない。
・地域づくりは自分達で自律する、地域の自律性（自治力）を高める取り組み、関係人口がもてはやされているが自分達にとり、疲れず持続的に関係を維持したい人達を見極める必要がある、「戦略的なのびたくん」になろう、目指すは自治の再生、自治力を取り戻そう、地域に必要なのは企画力と実行力、地域を去っていく人達に「これからもよろしく」と言える

かどうかはとても大切。

・サポートする人達は引き際を考えること（引き際のデザイン）、サポートする人達は非専門で、地域の人達と一緒に汗をかくことができる人達であることが大切。一般的に地域づくりはビジョンづくりから始まると考えられているがそうではない。まずは場づくり/状況づくりがあり、次にビジョンづくり、さらに仕組みづくり/体制づくり、集落自治の確立、代謝を内包した持続性に発展していく。（この先は実践演習へ）

実践演習　指導　徳島大学大学院　教授　田口太郎

参加者各自が地域づくりについてワーク、考えをまとめて発表。

集合写真

第2＆3回地域づくりマネジメント講座

現地フィールドワーク

西予市明浜町渡江集会所周辺散策

事例発表

かりとりもさくの会　西村吉仁、二宮祥子

<u>発表要旨</u>

・平成 23 年せいよ地域づくり交付金制度創設、基礎型と手上げ型を 7:3 で配分
・公民館を地域づくり活動センターに移行して、地域任用職員を配置
・地域おこし協力隊は個人事業主タイプ（委託型協力隊）を導入
・段々畑ガイド、みかん収穫体験、タコ漁体験など観光田舎体験の受入れ
・修学旅行生・大学生の受入れ
・最重点課題として、みかん農家の所得向上に取り組む
・みかん農家の後継者を募集、空き家対策はこの延長
・愛媛大学未完商店は、地域 PR とインターネットの活用に貢献
・「心のパンツが脱げるまち」を目指す

愛媛大学未完商店　榊原文太、高川智成、藤原透磨、橋本舞、佐藤弘一

発表要旨

・未完商店は、地域との信頼関係づくり、持続的な関係を維持しながらも学生の主体的な取組みに重点を置いている。学生が地域活動をしていくうえで、地域が求めることと学生がやりたいこととのギャップをどう埋めていくか、学生が活動していくうえでどう資金を確保していくかなど課題はいろいろありバラ色な状況ではない、こうした状況とどう向き合っていくか。（学生主体でミニワークショップを実施）

・やることが単発・単発ではなく目的を明確にして全体の継続性をだしていく、学生が活動できるのは実質 3 年なので、未完商店という形で学生が入れ替わっても継続性を持たせることは大切、地域と学生の役割だけでなく学生間での役割分担も大切、学生の見えないところで先生やスーパー公務員は頑張ってます、こうしたことを関係者が共有化していけたらいい。

中国学園大学　教授　佐々木公之
久米南町　主幹　中村英之
講演　地方創生担当大臣賞受賞『久米南町「食」のサブスクリプションサービス』産学官連携が成功する秘訣

講演要旨

・社会心理学、マーケティングを活かして仕事している。マンデラ効果、RESAS を活用して、客観的数値で分析し、「正しい情報」を把握、共有する。
・常に何かを気にしているとその情報が自然と目に留まるようになるカラーバス効果、新しい発想はリラックスした状況から生まれる創造性の 4B、物事を俯瞰的に考えていくメタ思考。
・セレンディピティ「偶然の出会いに気づき、楽しめる力」、「アハ！体験」が大切。
・学生を絡めること、学生を絡めないこと、産学官連携の目的・目標を明確にする。産学官連携で大事だと思うのは、①正しい情報を共有する　②地域に行き肌で知る　③地域の人と仲良くする　④スーパー公務員を見抜く　⑤学生を「やる気」にさせる　⑦固定観念を持たない　⑧アイデアを出すことを「習慣化」　⑨異業種の仲間をつくる　⑩人の役に立ちたいと思う
・地域の強みである「農業」と「食料品」を活かす、農家に安定的収益と付加価値をもたらす、外部人材を活かす、この 3 点について考えた結果として「食のサブスク」サービスがある。2020 年から中国学園大学×久米南町で実証実験をスタート、年会費 49,800 円で「宅配」、「体験」、「食事」が月 1 回無料になる仕組み、合同会社久米南アグリ＆フード社（仮名）を設立。
・一人じゃ限界がある。アフリカの諺　if you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together.（早く行きたいなら一人で行け　遠くに行きたいならみんなで行け）
・現在進行中の新企画デジタルノマド構想をサプライズで説明。2021 年ポルトガルにデジタルノマドビレッジができた、今この市場が熱い、特に英語圏、日本でもデジタルビザが始まった、地方にもチャンスが来た。世界初のデジタルノマドに特化したポータルサイトを創設したい、事業の根幹は決裁機能を持つこと、ここに大規模な経営資源を投入したい。

意見交換会、現地フィールドワーク
タコ漁体験、みかんジャムづくり体験、みかん加工施設見学

全体振り返り
ファシリテーター　愛媛大学社会共創学部　准教授　笠松浩樹
振り返り要旨
・いかにこの地域の資源をブラッシュアップして活用していくか。みかんは 16 種類ある、みかんマイスターズカードとかみかんマイスターズをもっと活かす、みかんまみれのパンやマフィンなど「みかんまみれ」をシリーズ化していくとか、もっとみかんを活かした仕組みづくりをできるところから進める。

集合写真

愛媛大学笠松准教授と未完商店 OB（初代メンバー）

キ　アンケート結果

・講座の満足は高い。主な意見としては次のとおり。

・いかに地域の信頼をつくっていくかが最も重要な課題なのではないかと感じた。

・「学生達をタダで使える労働力にしてはならない」と常々考えている。また、学生達は常にアイデアがあふれており、それを実践できる場所に飢えていることも実感させられた。「地域の労働力」ではなく、「地域の促進力」として関わってもらえる方法、学生達が「たった 1 日でもこの地域に来てよかった」と思える地域の体制を整えていきたいと思う。（アンケート用紙は添付資料参照）

（2）事業の効果と課題

5年毎に愛媛県が独自に実施する集落実態調査を有効活用し、今後の地域づくりを進めるヒントを得られたのではないかと推察する。また、地域づくりはまず場づくり/状況づくりが大切で、ビジョンづくりはその後にくること。サポートする人達は地域の人達と一緒に汗をかきながら、いずれいなくなる引き際まで考えておかないといけないことなど有益な示唆があった。

さらには、地域を去っていく人達に「これからもよろしく」と言えるかどうかも大切。

愛媛大学未完商店の OB（初代メンバー）が第 2 回講座にサプライズ参加してくれたが、このような、都市圏に居住しながら特定の条件不利地域と良好な関係を維持している人材をネットワーク化する仕組みは今のところないのではないか。（彼らはインフルエンサーとして、都市圏で特定の条件不利地域を PR し、特産品販売等で貢献している） 条件不利地域の地域づくりを促進するうえで貴重な示唆があったのではないかと推察する。

また、中国学園大学佐々木教授が講演で提唱したデジタルノマド構想は、外国人の日本への関心が高まる中で地方に誘客していくきっかけづくりとなるのではないか。こうした構想を中長期的視点で具現化するための仕組みづくりが望まれる。

以上

○元気な地域づくり応援団「関係人口」創出事業

1	
活動日時	令和６年６月１日（土）14：30～20：30
場所	正八幡神社　（松山市窪野町 1098）
参加応援団	（株）伊予銀行　４名 （株）愛媛銀行　２名 計　６名
応援内容	第３回松山くぼの町ホタル祭り運営補助
活動の様子	（交通誘導） ・神社周辺で一部交通規制をかけているため、住民の車両の誘導や、従事者の車両誘導を誘導灯を使用し、要所に立って行っていた。 ・交通量が時間帯によって変化するため、状況に応じて地元スタッフや消防隊員、応援団同士で連携をとって対応する様子が見られた。 ・飲料や弁当配布、休憩もスタッフ同士で連携してとれている様子であった。 ・交通量が少ない時間帯は簡易テントで集落の人と会話がされていた。 ・活動後、応援団より夜間になると外灯などの明かりがなく、反射板等もない状態での誘導であったため、車内から誘導員の姿が確認できているか不安で、危険だったとの意見あり。集落担当者へ次年度開催時に改善要望を行った。 （シャトルバス乗降誘導） ・時間帯によって乗降者の増減が著しく、利用者が多い時間帯は待機列の整理、待機者と乗降者が混ざらないよう誘導を行っていた。また、来場者への声かけも積極的に行われていた。 ・バス２台が同時到着した際には、乗車と降車、バスの方向転換が同時に行われたが、事故や混乱もなく、スムーズな誘導が見られた。 ・従事場所が会場から離れているため、トイレや食事休憩の取得に苦慮していた。また、従事場所の中では解散時刻が最も遅い場所であった。 （販売ブース） ・１ブースに応援団の他ボランティア団体数名との作業であり、作業当初はブース内の役割分担にもたつきが見られたが、徐々にスタッフ同士に連携が生まれ、自然と役割分担が行われ、各々が声かけをしながら作業が行われていた。 ・休憩時も来客状況を見ながら、お互いが声かけをして順次取得することができていた。 ・他団体のボランティアスタッフとも交流を図る様子があった。 ・集落担当者より、来場者は昨年度から微増の約 2,050 人であり応援団を始め、大勢のボランティアスタッフの協力を得ることができてとてもよかったと話があった。 ・ボランティアへは愛媛大学教育学部ボランティアサークル、愛媛大学社会共創学部寺谷教授研究室、伊予銀行愛媛県庁支店などの団体が参加しており、応援団含め各団体が協力して作業に従事し、お祭りを楽しむことができていた。

所見等	応援団の派遣申請から活動日当日まで、集落との必要事項の連絡は遅滞することなくスムーズに行うことができた。 活動中も、集落の人たちから「ボランティアの人たちがたくさん来てくれて嬉しい。」「自分たちのやることがないほどよく動いてくれている。」等の声があり、交通誘導に従事していた応援団員からも集落の人から感謝の言葉をかけてもらったと報告があった。 しかしながら、従事内容や場所によって集落の人との交流に差があったため、内容が多岐に渡る場合、できるだけ集落との接触が多い場所に参加企業を配置してもらえるよう、集落との事前協議の必要がある。 また、活動当日は全員が私服での参加であったため、他に私服で参加している団体との区別や、所属企業の判別が困難であった。愛媛大学は赤いポロシャツ、伊予銀行県庁支店は銀行名やキャラクターがプリントされたウィンドブレーカーを着用し、一目で所属が確認できていた。応援団についても、次回活動時には元気な集落づくり応援団であること、所属企業が判別できるよう対策を講じたい。 昨年度参加した応援団へは集落から直接依頼の連絡を行ったこともあり、必要な人員を確保することはできたが、参加応援団が少ないことや、参加する応援団が固定化されているため、今後何らかの対応が必要と思われる。

２	
活動日時	令和６年７月１４日（日）8：30～13：00
場所	旧中津小学校　（久万高原町中津 4732）
参加応援団	（株）伊予銀行　７名 （株）愛媛銀行　２名 聖カタリナ大学　２名 ねこの手　１名 計　１２名
応援内容	旧中津小学校周辺整備（小学校・体育館・プール清掃）、交流会
活動の様子	（小学校清掃） ・伊予銀行５名、愛媛銀行２名、ネコの手１名、センター２名で校舎の窓ふきを行った。 ・地域が準備した窓ふき用洗剤、雑巾を使用し、１階と２階の廊下、教室の窓を手分けして清掃を行った。参加者は高身長の男性が多かったため、高所の窓まで清掃を行うことができていた。 ・伊予銀行、愛媛銀行に昨年度も参加した人がおり、応援団間での交流の様子が見られた。 （体育館清掃） ・伊予銀行２名が体育館清掃を行った。南予、中予にある支店からの参加とのこと。地域の方と一緒にモップがけ、窓清掃を行っていた。作業後には地域の方と談笑する様子や子供とふれあう様子が見られた。 （プール清掃） ・聖カタリナ大学２名が行った。中津に祖母の家があり、手伝いに行かなければと思い参加したとのこと。８時から地域の人と一緒にプール清掃を行っており、主にプールの壁面の清掃を行っていた。地域の人と声かけをしながら円滑に作業を行っていた。 （交流会） ・旧中津小学校での作業が終わり、昼頃に久万高原町公民館中津分館にて交流会が行われた。 ・婦人会が朝から作った料理が振舞われ、交流会冒頭に応援団参加団体の紹介が行われた。交流会は地域の人や応援団の他、柳谷小学校の教職員、旧中津小学校周辺整備のために他地域から帰ってきた人などが参加し、食事を楽しみながら交流を図った。
所見等	今回は地域の人に混ざっての作業であったため、応援団参加者には腕章を装着してもらった。腕章を渡す際に参加確認をすることができ、作業中は応援団を容易に判別することができた。腕章に書いている団体名を見て、地域の人が応援団に話しかける様子もあり、今後も活動の際は腕章の使用を続けるのがよいと思われる。 作業は地域の人だけでなく、中津に縁のある人たちが協力して活動にあたっており、家族と一緒に来た子供たちが草刈り後の校庭で虫取りをして走り回る姿が見られた。子供は１０人近く集まっていたが、集落側担当者によると、集まった子どもの中で柳谷小学校生徒は２人で、他の子どもたちは他の場所で暮らしている子とのことだった。 現在は宿泊施設として活用されているが、地域の活動を通して廃校となる前の小学校の様子を垣間見ることができた。

3	
活動日時	令和６年８月４日（日）14：00～21：00
場所	中浦公民館(南宇和郡愛南町中浦 8302)
参加応援団	（株）愛媛銀行　６名 （株）小関電工　１名 ねこの手　１名 計　８名
応援内容	夏祭り会場設営及び屋台の運営補助
活動の様子	（会場設営） ・愛媛銀行６名、小関電工１名、ネコの手１名でお祭りの会場設営を行った。 ・販売ブースや休憩場所、焼きそばと焼き鳥の調理場所の設営等を手分けして行った。 ・机や、鉄板等重い物も多かったが、地域の人と協力して作業しており、予定より早く設営が終了した。 ・作業後は、かき氷の試食や金魚すくいの体験等を地域の人達と談笑しながら行っている場面も見られた。 （屋台の運営補助） ・愛媛銀行３名、小関電工１名、ネコの手１名で焼きそばと焼き鳥の調理補助を行い、愛媛銀行３名が販売補助を行った。 ・焼きそば等の調理は外での作業だったこともあり、熱中症予防のため扇風機を回したり、氷袋を調理をしている人に当てたり等、地域の人と応援団双方が気を配りながら作業を行っている様子が見られた。

	・販売補助では、地域の人と声をかけながら販売を行っており、スムーズに販売している様子が見られた。終了間際では、地域の人と談笑している場面も見られた。
所見等	今回も、地域の人に混ざっての作業だったこともあり、応援団参加者に腕章を装着してもらった。 地域の人と応援団参加者と判別がしやすかったが、装着する場所によっては、袖に隠れてしまい判別が難しい場面も見られたため、次回からは、腕章を渡す際に一言必要と思われる。 また、事前に当日の駐車場と会場の場所の詳細な説明がなかったため、駐車場所の問い合わせがあった。今後、申請者から申請時又は後日、地図等で詳細会場等の情報を共有してもらう必要があると感じた。 お祭りには、地域以外の人も手伝いに来ており、地域の担い手不足を感じた。しかし、お祭りの開始前から地域の人達が集まってきており、楽しみにしていた等の話しを伺うこともでき、地域にとってなくてはならないイベントだと感じた。

４・５	
活動日時	令和６年８月１０日（土）9：00～15：00 ８月１２日（月）9：00～12：00
場所	四国中央市立新宮小中学校グラウンド(四国中央市新宮町新宮 448)
参加応援団	ねこの手　２名 計　２名
応援内容	新宮町盆踊り大会の準備及び片付け

活動の様子	（準備） ・ネコの手１名と（公財）えひめ地域活力創造センター１名で盆踊り大会の準備を行った。 ・櫓の部材と集会用テントを倉庫から会場となるグラウンドまで運搬し、それぞれ手分けして組み立てを行った。 ・組み立てに精通する方がおらず、写真を参考にしながらの作業であったためスムーズに進まなかったが、あれこれ話しながら和気あいあいと作業が行われ、良き交流となった印象。 ・初めての応援団支援ということで参加住民に十分に周知されていたこともあり、感謝の言葉を多くいただいたことは、応援団参加者として励みにもなり、終始よい雰囲気であった。 （片付け） ・ネコの手２名、（公財）えひめ地域活力創造センター１名で盆踊り大会の片付けを行った。 ・前日に、櫓やテント等のほとんど片づけており、机や椅子等を倉庫や公民館への片付けがメインとなった。 ・机等の重い物は男性が片付け、提灯の片付けや椅子等の拭き掃除は女性が片づけていた。 ・準備に参加していたネコの手と住民との交流がすでにできており、談笑しながら片づける場面も見られた。
所見等	今回も腕章をつけて作業をしたためか、地域の方から声をかけてもらえた。 今回参加されたネコの手の方から、応援団の参加企業が固定化されていることが気になっていることを話されていた。

６・７・８	
活動日時	令和６年８月１４日（水）　8：30～12：00 ８月１５日（木）17：00～21：30 ８月１６日（金）　8：30～11：00
場所	内子町寺村集落周辺
参加応援団	ねこの手　２名 松山大学　２名 聖カタリナ大学　１名 計　５名
応援内容	寺村山の神火祭り　準備、駐車場整理、片付け
活動の様子	（準備） ・来場者駐車場（小田分校）の準備：ネコの手１名 ・来場者駐車場（小田小中学校）の準備：ネコの手１名、聖カタリナ大学１名、松山大学１名 ・道路用コーン設置、看板整理等：tiliki２名 ・例年祭り直前に夕立に見舞われることが多いため、来場者駐車場は白いＰＰテープで区画を作製するとのことであった。 ・メジャーを使用してグラウンドに大まかな区画を描き、その上にＰＰロープを引いて釘で打ち付けていく作業が行われた。 ・駐車場それぞれ５～６名程度で行われたが、日陰のない場所に少人数での作業であったため、どの場所もほぼ半日を費やしての作業となった。 ・集落側から適宜飲料の差し入れと休憩の声かけなど行われ、集合場所と作業場所の移動は集落側の車両で行われた。 ・また、祭り当日は会場周辺が一方通行となるため、通行規制用のコーンを設置場所の近くに運搬する作業や、駐車場や会場に設置する看板の仕分けを行い、予定終了時間に終えることができた。 ・ネコの手参加者は例年火祭りに従事しているとのことで、集落側も慣れた様子で会話をしていた。聖カタリナ大学の参加者は小田分校出身ということで、集落の人たちとも顔見知りで気さくに話をしたり、地元の子が手伝いに来てくれたことが嬉しいと高齢の方にハイタッチを求められて応じる場面が見られた。 （会場周辺交通整理等） ・来場者駐車場（小田分校）の車両誘導：聖カタリナ大学１名、松山大学１名 ・来場者駐車場（小田小中学校）の車両誘導：tiliki２名 ・来場者駐車場（旧小田中学校）入口の車両誘導：ネコの手１名 ・16 時頃から寺村集落周辺は夕立に見舞われたが、18 時頃に雨が止まったため火祭りは開催された。祭り本部に集落の人が作成したおにぎりと飲料が振舞われ、従事前に各々お腹を満たしていた。 ・来場者駐車場では入ってきた車両に、帰りは一方通行であることと駐車場閉鎖時間の説明、会場周辺の地図を手渡し、場内への誘導を行った ・会場に１番近い小田分校は 19 時頃には満車となり、小田小中学校は 19 時すぎに満車、その後旧小田中学校もすぐに満車となった。 ・県外ナンバーの車両も多く、来場者の方から労いの言葉をかけてもうらうことが多々あった。 ・集落側から従事場所に飲料の差し入れも定期的に行われていた。 ・祭り終了後は会場周辺が一方通行のため事故なく車両誘導が行われた。

	・小田分校前付近で多少の混雑はあったが、10 分程度で解消されていた。 ・活動終了時刻は 21 時 30 分頃であった。 （片付け） ・各来場者駐車場のライン撤去とグラウンド整備、トイレ清掃、看板撤去、コーン撤去、花火打ち上げ場所周辺清掃、テントの片付けを行った。 ・移動は集落側の車両で行われ、運ばれた先で集落の人の指示に従い作業を行い、終われば次の場所へ移動という流れで行われた。 ・作業中は集落の人が各場所を回って飲料の差し入れが行われていた。 ・作業時間は予定よりも早い 11 時頃に終了した。 ・寺村山の神火祭り保存会の永見雅之会長より、集落の高齢化と人口減少で祭りの担い手が少なくなっているが、これからも外部の力を借りながら実施していきたいとのことだった。 ・応援団活動に参加した大学生からは、来年もあれば参加したいという声があった。
所見等	活動日がお盆の時期や平日ということもあり、応援団への参加人数が少なかった。集落側の希望人数は５～10 名であったので、もっと来てくれると思っていたと少し落胆していた様子があった。 今回に限らず、今後は応援団の団体側へのアプローチが必要と思われる。 火祭りは５年ぶりの開催ということで、集落の人たちは担い手不足や準備等の負担に憂いがある様子であったが、当日は集落の人口より多い人数が来ていたと喜ぶ場面もあった。

９・１０	
活動日時	令和６年９月１５日（日）　9：00～13：30 　　９月２３日（月）　9：00～14：00
場所	松山市窪野町　窪野公園
参加応援団	ねこの手　２名 聖カタリナ大学　１名 計　３名
応援内容	第４回「いよ窪野収穫祭（軽トラ市）」農産品藤の販売補助など
活動の様子	・応援団の他に、愛媛大学と久谷中学校からボランティア参加があった。 ・ボランティアに役割の振り分けはされておらず、自然環境保全活動の啓発活動ブース・お米の重さ当てブース、農産品や軽食、焼き物販売ブースへそれぞれ分かれて従事した。 ・聖カタリナ大学１名はお米の重さ当てブースで従事し、ネコの手２名、愛媛県庁、tiliki は農産物販売ブースで従事した。 ・収穫祭開始１～２時間は客足が途切れず、賑わいが続いていた。その後の客足はまばらとなり、手すきの時間が続くこともあり、応援団と地域、他ボランティアの学生と交流の時間が自然と生まれていた。 ・主催者側より、15 日と 22 日合わせて約 700 名程度の来場があり、販売していた窪野米は昨年の４倍の売り上げであったと話があった。
所見等	トラブルなど無く活動を行うことができた。収穫祭実施日変更も主催者側から事前に連絡をもらうことができたため、応援団参加者とスムーズな連絡調整を行うことができた。 　ネコの手参加者より、応援団への参加団体がいつも同じなので、そろそろ違う団体とも活動してみたいと意見があった。

１１	
活動日時	令和６年１０月６日（日）9：00～12：30
場所	本谷集落（伊予市双海町大久保本谷集落）
参加応援団	ねこの手　２名 愛媛銀行　２名 計　４名
応援内容	中間道の排水溝及び雑草除去等の清掃、交流会
活動の様子	・道の駅ふたみに集合し、伊予市地域創生課の先導で集落まで移動し，長靴を持参した５名で排水溝清掃、残り４名で雑草除去等を行った。 ・排水溝清掃は排水溝の草木を道に上げ、軽トラックに載せる作業だが、高低差や水嵩、草木が水分を含み、相当な労力を必要とした。 ・雑草除去等の作業は、桜を植樹した場所を手作業で雑草を除け、肥料を散布。手作業で間に合わない部分は地元の人が草刈り機で除去した。 ・排水溝清掃が先に終わり、最後は雑草除去等の作業を全員で行った。 ・10 時 30 分に地元の差し入れで休憩。 ・11 時 30 分に作業終了し、本谷集会所へ移動して昼食交流会が行われ、12 時 30 分で終了し解散した。
所見等	・伊予市地域創生課のサポートがありスムーズに行えた。 ・作業中の排水溝清掃場所と雑草除去場所までは急こう配の坂を徒歩移動であったため、移動だけで体力の消耗がみられた。 ・気温があまり高くなく作業は半日で終了することができた。 ・交流会では地域のことなどを中心に話が弾んでいた。 ・地域の 10 戸に作業を案内したが、参加は５戸ほどだった。 ・交流会の中で、次週のスポーツ大会の参加を一軒一軒回ってお願いするのは難しい。住民の合意形成は難しいと代表の人から話があった。

１２	
活動日時	令和６年１１月２３日（土）9：00～16：40
場所	旧中津小学校(久万高原町中津)
参加応援団	伊予銀行　７名 愛媛銀行　３名 三浦工業　３名 ねこの手　２名 計　１５名
応援内容	第１０回久万高原「結い音楽祭」会場の受付支援、入場者誘導、駐車場誘導、販売補助
活動の様子	・中津公民館に集合の後、旧中津小学校へ移動。 ・駐車場の案内では、来賓等の車両案内、臨時運行バスの補助を行った。 ・受付では、当日、予約販売の受付、チケット受付、受付案内等を行った。 ・会場案内では、座席の案内、プログラム内容等の案内を行った。 ・販売補助では、飲食ブースの販売補助を行った。 ・イベント終了後の片付けが 16 時 40 分ごろ終了し解散した。
所見等	・各自で防寒対策をしており、支障なく活動を行うことができた。 ・応援団の参加者に、イベント終了後の片付けを行うまでの周知ができていなかったため、実際の応援内容を確認・周知する必要を感じた。 ・主催者より、１０回目となる今回を最後としたい旨の話があった。 ・今回応援団の参加依頼にあたり、過年度に久万高原町中津で活動実績のあった日本食研と愛媛信用金庫に個別に参加依頼勧奨を行った。

１３	
活動日時	令和６年１２月８日（日）8：30～11：00 頃
場所	東温市立東谷小学校～惣河内神社
参加応援団	愛媛銀行　５名 伊予銀行　２名 三浦工業　２名 ねこの手　２名 計　１１名
応援内容	しめ縄龍の運搬、神社奉納
活動の様子	・東谷小学校の体育館へ集合し、主催者側から説明があった。 ・昨年度に 12m の雌のしめ縄龍を作って神社奉納した。今年度は全長 20m の雄のしめ縄龍が地域の人たちから集めた願い札を持って、雌のしめ縄龍のいる惣河内神社へ婿入りするというストーリーとしている。 ・説明の後に「元気な集落づくり応援団」と応援団参加団体の紹介が地域の人からあった。 ・応援団の他に東温高校男子バレーボール部数名と消防団がボランティア参加していた。 ・紹介の後に全員で体育館に置いてあるしめ縄龍を担ぎ、途中休憩を２回はさんで運搬した。大勢の人が参加していたため、担ぎ手は交替しながら集落の中を進んだ。 ・神社では広場で神事が 30 分程度行われた。神事の後、広場から本殿のある場所まで階段で運び、本殿の廊下へしめ縄龍を担ぎ上げた。本殿へ引き上げる際がこの日一番の力作業となった。 ・参加者に甘酒が振舞われ、神社の広場でパフォーマンスが始まったため応援団の活動は終了とした。 ・終了後、東温市地域活力創出課課長、応援団担当の杉原課長補佐と一緒に、神事へ参列していた東温市長と面会した。本事業の説明と事業活用へのお礼、応援団への参加団体を伝えた。
所見等	・愛媛銀行から当日参加のメンバーがいたため、その場で手続きを行った。 ・開始前の説明時に応援団参加企業・団体を紹介してもらった際、一般参加者から「おぉ！」と感嘆の声があった。活動時に地域の人へ、応援団に参加してくれている企業や団体を紹介することで企業や団体のＰＲにも繋がるため今後も積極的に行えるようにしたい。 ・三浦工業の参加者は２０代の経理の女性であったが、今までこういった行事に参加したことがなかったため参加できてよかったと最後に声をかけてくれた。 ・東温市地域活力創出課が応援団の紹介をしてもらえるよう地域側や東温市長へ働きかけてくれ、地域活力創出課長から応援団の参加団体へもお礼を伝えてくれていた。 ・応援団の派遣依頼の際、tiliki から大和ハウス工業（株）愛媛支店へ個別に参加勧奨を行った。

１４	
活動日時	令和７年３月３０日（日）9：00～13：00 頃
場所	伊予市本谷集落
参加応援団	伊予銀行　２名 愛媛銀行　２名 ネコの手　２名 聖カタリナ大学　１名 三浦工業　１名 計　８名
応援内容	桜・コスモス・ツツジ・アジサイの植樹と肥料撒き、側溝の土砂撤去、猪の罠設置補助、交流会
活動の様子	・道の駅ふたみに集合し、伊予市地域創生課の先導で集落まで移動した。 ・最初に全員で植樹と肥料撒きを行った。植樹場所は剪定された雑草や小枝、菜の花で覆われていたため、鍬等を使用して雑草を集めながらの作業であった。作業箇所が急こう配の坂を下りた棚田で、参加者の中に歩行障害を持った人がいたため迂回して緩やかな道からの移動支援、足場が不安定な棚田での作業中はこまめな見守りと声かけを行った。 ・10 時 30 分に地元の人の声かけで休憩となり、地元から飲料の差し入れがあった。 ・側溝の土砂撤去は当初地域住民のみで行う予定であったが、予想以上の量であったため住民のみでは対応できないと、急遽応援団の半数が途中で土砂撤去の作業へ回った。 ・植樹と土砂撤去終了後、棚田の上に猪の罠を設置するため応援団と地域

	住民で檻を運搬した。 ・12 時過ぎに全ての作業が終了し、その後本谷集会所で昼食を兼ねた交流会が行われた。 　交流会は作業に参加した地域住民の紹介と応援団の一人一人の自己紹介、集落の様子や作業の話を行った。 大学生や(株)愛媛銀行の参加者が入行２年目前後の若手とあって、作業中は地域の方が「どこから来たのか」と度々声をかけたり、伊予市職員へ尋ねる様子があった。 　(株)愛媛銀行の参加者は１０月の活動時に参加した際、地域の行事に初めて参加して地域の人の温かさに感動して今回も参加したと。また参加したいと話があった。愛媛銀行の女性参加者は、役に立てているのかはわからないがまた参加したと話があり、区長からは女性のボランティアが多い年もあったが、女性たちが蔓の根をはさみで切ってくれるだけでもすごく助かったので気にせず参加してほしいと返していた。 　聖カタリナ大学生は地元が伊予市の下吾川で、今回地元の活動と知って参加したと。ボランティアに参加するのが好きなため、また参加したいと話していた。 ・交流会では区長より活動報告書が配布され、次年度も外部の力を借りながら集落の景観づくりを行っていきたいとのことであった。また、前神有里氏から地域でボランティアを行いたい人はたくさんいるので、応援団を年２回と言わず４回ほど申請してはと提案があったと。Tiliki から区長へ、今のところ申請回数に制限は設けていないため応援団派遣希望があれば申請してもらえるよう伝えた。 　また、Ｒ７年度は秋口に１回と令和８年３月１５日の活動を応援団派遣申請予定と区長から周知された。
所見等	・活動前の地域との連絡調整や当日は伊予市地域創生課のサポートがあり、スムーズな移動や作業を行うことができた。 ・今回の活動に限らず、応援団参加者からトイレの場所を聞かれることが度々あった。同日は活動場所のトイレの場所確認を集合前に確認する必要があると感じた。 ・地域から申請があった活動内容は「桜の植樹」であったが、実際桜は３株のみで、メインはアジサイとツツジの植樹だった。参加者の中には桜を植えたかったと落胆する人もいたため、申請から活動日まで期間がある場合は活動内容の再確認が必要と思われた。 ・交流会では地域の方数名と応援団で地域のことなどを中心に話が弾んでいた。 ・区長より、集落の住民は全員６５歳以上のため今回の作業をするにしても集まってくれるが自分たちだけでは行えない。猪の罠の設置も時間がかかると思ったが、若い人たちが大勢手伝ってくれてあっという間に終わったので驚いた。若い人たちの力を借りないと難しいことが多いので、これからも応援団を活用したいと話があった。 ・今回応援団の派遣依頼するにあたり、伊予中ＯＢに参加勧奨を行った。

１５	
活動日時	令和７年３月３０日（日）　８：00 ～ 17：30 頃
場所	旧中津小学校(久万高原町中津)
参加応援団	伊予銀行　３名 愛媛銀行　４名 計　７名
応援内容	「中津さくらまつり」の販売ブース、駐車場への誘導等の補助
活動の様子	・８時前に旧中津小学校に集合後、主催者側からボランティアの配置先等の説明があった。 ・８時 30 分頃には各持ち場に移動し、再度地域の方から説明を受けた後、従事していた。 ・９時頃から少しずつ客足が増えたが、あまり客足が増えず 12 時頃をピークに客足が途絶えた。 ・午後も客足が少なかったため、ボランティア参加者と地域住民が交流していたり、ボランティア参加者がステージイベントを盛り上げたりしていた。 ・15 時前から片付けを開始し、15 時 30 分頃には全ての片付けが終了した。 ・愛媛銀行、伊予銀行は、懇親会は参加せず活動を終了した。
所見等	・今年は、久万高原町商店街でひな祭りのイベントがあり、例年よりさくらまつりに訪れる人が少ないと話されていた。

	・活動終了後、伊予銀行の参加メンバーより、来年度から誘導係の時間配分について検討してほしい(周辺にトイレもなく、終日立ち続けるため、体力的に厳しい)と相談があったため、運営スタッフに相談内容を伝えた。

広報周知活動（フライヤー・ＳＮＳ）

フライヤー

SNS

広報周知活動（応援団通信）

元気な集落づくり　2024. 09

応援団通信

地域でボランティアをしたい企業、団体が「元気な集落づくり応援団」を結成し、
人手が必要な地域で清掃活動やお祭り、運動会等の地域行事を支援しています。

令和６年９月15日（日）、23日（月）に松山市窪野町で第４回いよ窪野収穫祭を手伝いました。

参加応援団　ネコの手様、聖カタリナ大学様　計３名

農産物の販売　窪野産新米の販売

重さ当てクイズ
袋に入ったお米の重さを当てた方に窪野米がプレゼントされるそうです。
誰も正解を知らないので、皆さん何度も持って悩んでいました。

９月23日の様子　たくさんの農産物が販売されました。

応援団の他に愛媛大学や久谷中学校からボランティアが来ており、ボランティア同士協力して収穫祭を盛り上げました。

２日間で約700名の来場者があり、窪野産のお米は昨年の４倍の売り上げだったそうです。

今後も県内各地でボランティア活動がございます。皆様のご参加で、一緒に地域を元気にしていきましょう！

元気な集落づくり　2024. 10

応援団通信

地域でボランティアをしたい企業、団体が「元気な集落づくり応援団」を結成し、
人手が必要な地域で清掃活動やお祭り、運動会等の地域行事を支援しています。

令和６年10月６日（日）に伊予市双海町本谷集落で中間溝の排水溝清掃、雑草除去等を手伝いました。

参加応援団　（株）愛媛銀行様、ネコの手様など　計９名

排水溝清掃

水分を含んだ植物は大変重く、皆さん汗だくになるほどの重労働でしたが昼前までには作業を終えることができました。

雑草除去等

Ｒ６年２月に応援団が植樹した桜の周辺の草刈りと肥料の散布を行いました。集落で定期的に手入れを行っており、順調に育っているそうです。

集落の大半が高齢者で地域の作業が困難な状況の中、昨年に引き続きたくさんの人が手伝いに来てくれて嬉しいと集落の方から感謝のお言葉をいただきました。

今後も県内各地でボランティア活動がございます。皆様のご参加で、一緒に地域を元気にしていきましょう！

元気な集落づくり　2024. 11

応援団通信

地域でボランティアをしたい企業、団体が「元気な集落づくり応援団」を結成し、
人手が必要な地域で清掃活動やお祭り、運動会等の地域行事を支援しています。

令和６年11月23日（土）に久万高原町中津で結い音楽祭2024の運営を手伝いました。

参加応援団　（株）伊予銀行様、（株）愛媛銀行様、ネコの手様、三浦工業（株）様など　15名

受付の支援、来場者の誘導、駐車場誘導、販売ブースの補助を行いました。

受付、案内

来場者誘導

販売ブース補助

駐車場誘導

会場の様子

７月に実施した旧中津小学校清掃に参加いただいた応援団の方々に大勢参加いただきました。
初めて参加された方も一緒に活動いただけてとても有難いです。
夏の清掃時は静かで広く感じた小学校も、この日は多くの来場者で賑わい、狭く感じてしまいました。

今後も県内各地でボランティア活動がございます。皆様のご参加で、一緒に地域を元気にしていきましょう！

元気な集落づくり　2024. 12

応援団通信

地域でボランティアをしたい企業、団体が「元気な集落づくり応援団」を結成し、
人手が必要な地域で清掃活動やお祭り、運動会等の地域行事を支援しています。

令和６年12月８日（日）に東温市河之内区でしめ縄飾りの運搬、神社奉納に参加しました。

参加応援団　（株）伊予銀行様、（株）愛媛銀行様、ネコの手様、三浦工業（株）様　13名

全長約２０ｍのしめ縄飾を東谷小学校から約１ｋｍ先の惣河内神社まで地域の方と一緒に運びました。
綱のしめ縄飾が奉納されている惣河内神社へ、地域住民の願いを持って嫁入りをするというストーリーの元、地域住民や関係団体、応援団等が一丸となってしめ縄飾を担ぎ、惣河内神社へ奉納しました。

神社奉納

今後も県内各地でボランティア活動がございます。皆様のご参加で、一緒に地域を元気にしていきましょう！